
魔法先生ネギま！～麻帆良に来た魔法使い～

岡崎結弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜麻帆良に来た魔法使い〜

【Nコード】

N61250

【作者名】

岡崎結弦

【あらすじ】

ネギの幼なじみであるアリア・フローレンス。

ネギよりも少し遅れて卒業した彼の修行内容は、ネギと同じだった

……

果たして彼は教師として、魔法使いとして、修行を完遂する事ができるのだろうか……

時間軸は、だいたい修学旅行の前辺りから始まります。基本は原作沿いで、アリアがそれに介入していくという感じにします。原作でネギとフラグを立てるキャラクターが、アリアとフラグを立てるかもしれないが、ご了承ください。

第一話 旅立ち前日（前書き）

最近ネギま！にはまっていて、それで書いて書いた小説です。

駄文でよければござっ！

第一話 旅立ち前日

暗い部屋。

辺りには本が散らばり、部屋の一角には灯りが灯っていた。

そこには、二人の少年がいた。

一人は、赤い髪を後ろで一つに纏めた、眼鏡をかけた気弱そうな少年で、ただひたすらに本を読んでいた。もう一人は、ボサボサの金の髪を肩まで伸ばした、青い瞳につり目の活発そうな少年で、赤い髪の少年を傍らで見守っていた。

「……………まだやんのかよ」

金髪の少年が、呆れたようにそう呟く。

もう五時間もの間、赤い髪の少年は本を読んでいるのだ。

そう呟きたくなるのもわかる。

「……………うん」

そんな少年に、聞いているのかいないのかわからないように曖昧に返事をする。

それを聞いて諦めたのか、ため息をついた後、少年は近くの本を手に取り、それを読み始めた。

が、

「こらあっ！何してんのよあんだ達っ！」

いきなり叫びながら入ってきた赤い髪の少女のせいで、それを中断せざるを得なくなってしまうた。

「アーニヤか……何か用か？」

取り敢えず、そう質問してみる少年。

読書の邪魔をされた文句の一つも言いたいところなのだろうが、そんなことをすれば話がややこしくなるだけなので、やめておいた次第だ。

「何か用か？じゃないわよっ！何勝手にこんなところに来てんのよっ！」

「それは俺じゃなくてこいつに言ってくれよ……俺は巻き込まれただけだ」

「だったらあたしに連絡の一つもよこしなさいよっ！そしたらもつと簡単に入れたのに……」

「……仲間外れにされて、寂しかったとか？」

「うっ」

どろぢぢら星らしい。

「てか、ここの入り方教えたの俺じゃん」

「うるさいうるさいっ！年下のくせに生意気よおっ！」

「言ってること滅茶苦茶だなオイ」

少年はため息をついた後、本に向かっていている少年の方に顔を向けた。

「ネギ、そろそろ逃げないとマジで見つかるぞ。今アーニヤが大声だしちまつたし、人が来るのも時間のー」「こるあーっ！誰じや禁呪書庫に無断でえッ！！」「ーやっべっ、ばれたっ！！」

「ちよっとどうすんのよっ！？」

「そこのバカつれてとっとトンスラすんぞっ！ばれたら二度と来れねえと思えっ！！」

少年は、ネギの襟元を掴み、アーニヤとともに走り出した。

少年の逃走は、はっきり言って見事としか言い様がなかった。

誰も知らないんじゃないかと思うような抜け道を幾つも使い、僅か数分で誰にも見つかることもなく脱出を成功させた。

「ふっ、ちよろいな」

「あんなに焦ってたのによく言っわ」

少年がかっこつけてそう言った途端、アーニヤからの突っ込みが入る。

「てか、前から気になってたんだけど、何であんたってあんなに詳しいの?」

「簡単な話だ。俺も昔同じことしたから。あそこの本はもう全部読破したぜ」

「……………はあ」

頭を抱えてため息をつくアーニヤ。

「あれ?」

そこで、初めてここが禁呪書庫でないことに気付いたネギ。どれだけ集中していたのだろうか……

「アーニヤ?何でここに?」

「仲間外れが寂しくてー」「あんたは黙ってなさいっ!」「ーあべしっ!?!」

少年がネギに何故アーニヤがいるのかを説明しようとした途端、アーニヤからの飛び膝蹴りをくらった。

何度かバウンドした後、ズザザアと地面を転がり、そして少年は動かなくなった。

「アーニヤッ!?!」

あまりのことにそう叫んでしまうネギ。

事情を知らないネギからすれば、当然のことだ。

「ふんっ。そいつが悪いのよ」

そつぽを向きながら、そう言うアーニヤ。だが、横目でチラチラ動かなくなった少年を見ているあたり、やりすぎてしまったことは自覚しているらしい。

ネギは少年のところに向かって走り、その体を起こした。

「大丈夫？アリア」

ネギが少年、アリアにそう呼び掛ける。アーニヤも心配そうにネギの後ろから覗き込んでいた。

それに対してアリアは、

「返事がない。只の屍のようだ」

「ふんっ」

アーニヤがアリアの顔面に拳をめり込ませる。

「効かぬわっ！ー！」

しかしそんなものは効かないと、体を起こし、アーニヤに向かってそう言うアリア。

「……………」

「殺す気がアツ……………あれ？」

叫んだ後、辺りを見回すアリア。

そこはよく見慣れた、自分の部屋だった。

「夢か……………よかったあ〜」

先ほどの出来事が夢であったことに、胸を撫で下ろすアリア。

現実ならば、今ごろアリアは自室ではなく病院のベッドで寝ていたことだろう。

「まあ、実際にあったことなんだけど……………」

そう、あれは夢は夢でも、数年前に実際にあった夢だ。

あの子のことは……………話すのはやめておこう。

「アリアー。起きたー？」

部屋の外から、女の人がアリアを呼ぶ声がする。

「ネカネさん？どうしたの？」

部屋の扉を開けると、そこにはネギの姉の、ネカネがいた。

「日本に行ったネギから、アリアにエアメールが届いたわ」

「ホントッ!？」

「うん、ほら」

そう言って、アリアにネギからのエアメールを渡すネカネ。

「確か今年は3年生の担任なんだっけ？」

「うん、そうよ」

「姉としては、やっぱり心配？」

「まあねえ。そういうアリアは？」

「全然。寧ろ窮地に陥って成長して欲しいもんだよ」

「フフ。変わらないわねアリアは」

「当たり前だよ。何せまだ十歳なもんなんでね」

「その割には大人びてるわよねえ。姿は年齢より幼く見えるけど」

「ぐはっ。コンプレックス直撃……酷いぜネカネさん」

「じゅんじゅん。それより、何時くらいに行くの?」

「明日」

「明日っ！？じゃあ準備とかは……」

「とっくに終わってるよ。明日の早朝にはたつ予定」

「そっかぁ……ネギもアーニヤも行っちゃったし、寂しくなるわねえ」

「暇な時とかは遊びに来るよ」

「フフ。ありがとう。朝食まだよね？作ってあげる。何がいい？」

「フレンチトーストで。紅茶は当然ミルクティー」

「はい」

ネカネが台所に向かった後、ネギからのエメールを見て、そして出発の準備の最終確認をするアリア。

アリアは、ネギ達よりも、少し都合があり魔法学校の卒業が遅れ、その為修行の地に行くのも遅れたのだ。

そして、修行の地は……麻帆良学園。

修行内容は……

『先に旅立った者と共に、教師となれ』

第一話 旅立ち前日（後書き）

感想待ってますっ！

第二話 麻帆良へ

アリア side

「うひゃ〜。すっげえ」

立ち並ぶ建物を見て、そう呟く。

今俺は、麻帆良学園の敷地内を歩いている。

人に道を聞きまくって、何とか学園長がいる、一番奥のほうの女子校エリアにたどり着いたのだ。

さて、取り敢えず学園長に会いに行くか。

「ふっ、はっ」

「ん？」

何やら掛け声みたいなのが聞こえる。

気になったので声のしたほうに行くと、まずバカでかい木が目に入った。

あれが世界樹か……

その木の前で、褐色の肌に金髪の女の人が、掛け声と共に何かの武術の素振りをしていた。

あれは……………中国拳法？

「すげえ……………キレが普通とは違う」

一応武術っつーか格闘技まがいのことを我流でやってるから、あの女の人がどれだけ凄いかはわかる。

……………魔法ありならともかく、魔法なしじゃ勝ち目ねえな。

そう思いながら見ていると、女の人がこちらを見ていた。

じろじろ見すぎたかな？

「何か用アルか？」

おおっ！生粋の中国人っ！

「いや凄いなと思ってさ。今のつて、中国拳法だろ？」

「そうアル。お前、この辺じゃ見かけない顔アルな」

「そりゃ今日来たばっかだからな」

「そうだったアルか。私は古菲^{クイフェイ}言っアルね。お前は？」

「アリア。アリア・フローレンス。よろしくクー」

「うむ、よろしくアル。ところでアリア、お前かなりできるアルね？」

ギクッ

ばれるの早っ！

まあ、魔法以外なら別にばれてもいいんだけど……

「だったらどうする？」

「勝負アルッ！」

超どストレートッ！！

うっ、これだけの使い手なんだし、戦ってみたくはあるんだが、早く学園長のところに行かなきゃなんないんだよなあ。

うむ、ここは残念だが、

「かかってこいやあっ！！！」

本能には勝てなかった。

「よく言ったアルッ！」

クーがそう叫んだと思ったら、既に懐に潜り込まれていた。

ゲッ、やばっ……

「ふっ」

クーの拳が俺の腹に決まり、俺は意識を手放した。

「うう……」

腹が痛い……何故だ？

何か後頭部が何か柔らかいし……

「おっ、気がついたアルか？」

女の人の声がした。

あれ？何か最近この声聞いたような……

目をあげると、まず初めに何やら褐色の肌が目に入った。

まだ焦点もあつてないし、脳もまともに機能してないからこれが何かわからない。

ためしに触ってみる。

ふにっ

「ふえっ?」

おっ、柔らかいな……

ん?てか今の声って……

ようやく焦点が合ってきて、俺が何を触っているのかがわかってきた。

「……………へ?」

俺が触っていたのは、クーのほっぺたで、目の前にはクーの顔があった。

「え〜っど……………」

状況が今一わからない。取り敢えず手は頬から放しておこう。

「イヤー、ビックリしたアルよー。いきなり頬を触ってくるから……………」

クーが少し顔を赤くしながらそう言う。

「ごめんごめん。起きたばっかで思考が働いてなかったから……………てか、一撃でやられたんだなあ、俺」

情けなさすぎる。

「いやいや。その歳にしては中々アルよ?」

「どの辺が？」

「当たる直前に少し後ろに飛んで衝撃を緩和した上、当たるポイントを少しずらしてダメージを最小限にした辺りアルよ。まあ、受け身に失敗して気絶した辺りは、まだまだアルね」

……全部見抜かれてる。

やっぱりすげえなあ。

「はは。クーに勝てるようになるまで、後何年くらい修行すればいいんだろ」

「アリアなら、筋がいいアルからすぐに伸びるアルよ。ま、私に勝つにはまだまだアルがね」

む、ちょい悔しいな。

にしても中国拳法か……

魔法剣士を目指す俺としては、やっぱりもうちょい近接戦闘をできるようにしときたいな……

俺は体を起こして、取り敢えず適当に動いてみる。

うん、頭を打つたらしいけど、特に問題ないな。

「なあクー。一個お願いがあんだけど」

「ん？何アルか？」

「学園長がいる場所まで案内してくんね？」

「ほう。学園長に用があるか？」

「っ!？」

いきなり後ろから声をかけられ、距離をとってその姿を確認する。

気配を全く感じなかったぞっ!!

「おお、超っ!^{チャオ}どうしたアルか、こんなところで？」

チャオと呼ばれた女の人は、どうやらクーの友達らしい。

うーん、この人もガチ中国人だなあ。

「いや何。ちよっと散歩してたら、クーが知らない男の子を膝枕してたから、ちよっと気になただけネ」

「っ!！」

そ、そうだった……

俺って、クーに膝枕してもらったんだよな……

何か今更恥ずかしくなってきた。

対するクーはといえば、俺が子供だからか、全く気にしていないよ
うだが……

「にしても、この子は誰ネ？見たことないガ……」

チャオが俺のほうを興味深そうに見ながら言う。

んー、この人も結構できるな。

「俺の名前はアリア・フローレンス。ここには今日来たばかりだ」

「ふむ、成る程ネ。私は超鈴音チャオリンシエン言うネ。よろしくアリア」

「ああ。よろしく」

チャオと握手をした後、学園長の所まで行きたいことを伝える。

「だったら、私が案内してあげるネ」

「いいのか？」

「気にしなくていいネ。どうせ今日は暇を持て余してたから丁度いいヨ」

「じゃあ頼むわ。クー、次は絶対勝つからなっ！首洗って待ってるよっ！」

「望む所アルツ！！何時でもかかってくるアルよっ！！」

そう言ってクーと、拳と拳を当てあう。

「ふふ。もう意気投合してるネ」

チャオが俺達を、子供を見るように微笑ましく見守っていたが、気にしない。

てか、俺は子供か。

「うめえっ！」

俺は、チャオに学園長の所まで行く道すがら、チャオからもらった肉まんを頬張っていた。

やっぱり本場の味って違うんだな。

その内日本伝統のスシテン普拉を食べて見たいもんだ。

「フフ。それは良かったネ」

チャオは俺がガツガツ肉まんを食っているのが嬉しいのか、さっきからずっと笑ってる。

「チャオって料理うまいんだなあ。あ、俺、今は金ないんだけど…」

「気にしないでいいネ。全部私のおごりヨ」

「ホントツ!？」

な、なんていい人なんだっ!!

日本人……じゃなかった。中国人は皆こんなに優しいのかっ!？

「ありがとうっ、チャオツ!!」

チャオにお礼を言った後、また肉まんをがつく。

「にしても、アリアは学園長に何の用ネ？」

チャオがそう聞いてきた。そついやまだ言ってなかったな。

俺は口の中の肉まんを飲み込んでから、口を開いた。

「俺、明日からここの教師やることになってるんだ。だから学園長にその辺のことを聞きに」

俺がそう言うと、チャオは心底驚いたという顔をした。

そりゃそうか。俺って十歳だもんね……

多分チャオは俺を八歳くらいに見てるだろうけど……

「あいやー、驚いたネ。まさかネギ坊主以外にも子供先生がいるとは……」

「っ!?!」

今ネギって言ったかつ!?!?

「……………チャオってネギのこと知ってるの?」

「ん?知ってるも何も、私達の担任ネ」

「ええっ!?!」

どんな偶然だよっ!!

もうあり得ねえくらいのご都合主義だな…………

「そういうアリアはネギ坊主と知り合いか?」

「幼なじみだよ」

「あいやー…………それはまた凄い偶然ネ」

全くだ。

にしてもネギの生徒かー。こんないい人達が生徒なら、ネギも大丈夫だろうな。

うーん。俺が受け持つ人達も、こんな人達だったらなあ。

「着いたヨアリア」

俺が考え事をしていると、チャオがそう言った。目の前にはいかにもな扉があった。

「ありがとうチャオ。このお礼はいつか必ず」

「アハハ！。別に気にしなくてもいいネ。困た時はお互い様ネ」

「いや、肉まんのお礼はいつか必ずっ！」

「そっちカツ！？まあ、料理を誉められるのは嬉しいものネ」

そう言っつてポリポリと頬をかくチャオ。

「ま、お礼っつて言っつても、俺はお茶くらいしかできないけど」

「充分ネ。イギリス本場の紅茶、楽しみにしてるヨ」

そう言っつて、去っつていくチャオ。

「ホントにありがとうーっ！」

俺がそう言っつと、笑っつて手を振っつてくれた。

うっん。何か先生としてよりは弟に接するみたいな感じだっつたなあ。

ま、無理もないけど。

俺はそう思っつた後、扉を二回ノックした。

「誰じゃ？」

中から老人の声が聞こえる。恐らく学園長だろう。

俺は一度深呼吸してから、答えた。

「明日から麻帆良学園中等部の数学教師となる、アリア・フローレンスです」

第二話 麻帆良へ（後書き）

感想待ってますっ!!

第三話 再会（前書き）

ようやくネギ登場っ！

出番少ないけどネ……

第三話 再会

アリア side

「ふむ、君がネギ君の幼なじみのアリア君か」

「はい。ネギがいつもお世話になってます」

俺は学園長に向かって頭を下げる。

てか、この人昔何かで見たセンニンとやらに似てるな。

まさかこの人がっ!?

八百万の神々に並ぶというあのセンニンッ!?

あわわわ……

ど、ど、ど、ど、ど……

急に緊張してきた……

「ふうむ。時にアリア君。君、泊まる場所は決まってるのかね?」

「えっ?」

こっちで用意してくれてるんじゃないのっ!?

やっべー、何も考えてなかった……

「いやあ……それが全く……」

「ふむ。因みに君は自分がどのクラスの担任か知ってるかね？」

「え？」

数学教師としか聞いてないけど……

昔から数学だけは出来たからな。

「知らぬようじゃな。なら教えてあげよう。君は、3年A組の副担任じゃよ」

「……………え？」

3年A組？

それって確か……

「ネギ君のクラスじゃよ」

「心読まんでください」

「顔に書いておったよ」

くっ、この人やはりできる……

まあ、それはとにかく置いて

まさかあのネギと同じクラスの副担とは……

この学園に来てから、驚くことの連続だな。

ネギの奴も、こんな感じなのかな？

「ネギ君がどこに住んでるか、君は知ってるかい？」

「？」

ネギの住んでる場所？

そこに泊まれてってことか？

「僕の孫、まあつまり、教え子の部屋に住んどるんじゃないよ」

「はあっ！？」

おいおいネギ……お前一体何してんの？

ん？待てよ？俺の住む場所の話からこの話になったってことは……

まさかっ！！

「察しがよくて助かるよ」

「だから人の心読まんでください。てか、まさかやっぱり……」

「うむ。君には3年A君の誰かの部屋に居候してもらおう」

＼H A H A H A H A /

これはきつと何かの冗談に違いない。

それが悪い夢だ。

ああ、ドッキリの可能性もあるな。

ほら、ドッキリ大成功の看板はどこだ？

「現実逃避するでない」

「するわっ！てか、するなってほうが無茶だろっ！俺ここ来てまだ一日目よ？そんな奴泊めてくれるお人好しどこにいったよっ！！」

敬語も忘れて、学園長につっかかる。

「その辺はネギ君の力を借りればよい」

「やだよっ！折角の再会初っぱなから教え子の部屋に泊まるから紹介してくれってどんな奴だよっ！！」

「僕の目の前にいる奴」

「誰のせいだと思ってるんじゃないやあああああああああああああ
っ！！」

「ま、冗談はここまでにするかの」

冗談なのか？ホントに冗談なのか？

「さて、ではネギ君のいる所じゃが……」

あ、そっちは冗談じゃないのね。

「うむ。今日は図書館島に行っているそうじゃな」

「図書館島？」

何だその本好きには堪らなそうな名前はっ！

「明治の中頃、学園創立とともに建設された、世界でも最大規模の巨大図書館。二度の大戦中、戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められた所じゃ。蔵書の増加に伴い、地下に向かつて増改築が繰り返され、現在ではその全貌を知る者はいなくなっておる」

「行って来ますっ！！！」

勉強は嫌いだが、本が大好きな俺には宝の倉庫じゃないかっ！！

早速地下探検に……

「ちなみに、地下には貴重書狙いの盗掘者を避けるために、ワナが大量に仕掛けられておるからの」

「それ本当に学校の図書館っ！？」

まあ、どっちにしる寢床を確保しないといけないから行くけどな。

その途中で、たまたま地下に迷っても仕方ないよな、うん。

そんなわけで、図書館島へレッツゴーッ!!

「これはまた……規格外だな」

図書館島に着いた最初の感想はそれだった。

いやだって、ホントに規格外なんだからしょうがない。

ここにネギがいんのかー。見つかるかな？

てか、ここに来てからずっと思ってたんだけど、何かやけに視線を感じる。

何故だ？

しかし今はそんなことはどうでもいい。

目の前には本、本っ、本っ!!

「ここは樂園か！？」
パラダイス

「こりゃあ地下には一体どんなお宝が眠ってるのやら……」

「近いうちに確かめに行ってみよう。」

「そう思った後、ネギを探してみたんだが……」

「広いっ！広すぎるぞこっつ！」

「こんな場所から一人の人間探すなんて至難の業だぞっ！」

「早く見つけないと、ネギだっていつまでもここにいるわけじゃないんだ。」

「そうと決めれば答えは一つ。」

「人に聞こう。」

「俺は、近くで本を取ろうとしている人に聞いてみることにした。」

「あー、すみません」

「ん？何ですか？」

「ここに、ネギっていう奴がいるはずなんだけど、どこにいるか分かりますか？」

「あなた、ネギ先生のお知り合いですか？」

「ん？幼なじみですけど？」

俺がそう言っと、女の方は驚いた顔になった。

てか、ネギのことを知ってるってことは……

「3年A組の生徒？」

「なっ、何故それをつ！？」

「いやネギのこと知ってるっばかったから……俺はアリア・フロレンス。お前は？」

「いきなりタメ口ですか。礼儀がなってないですね」

ムカッ

こいつ言葉遣いは丁寧だけど滅茶苦茶毒舌だな。

「イギリスには敬語なんてないんでね」

「ネギ先生はちゃんと出来てるですよ」

うーん、確かにあいつなら簡単にやってそうだな。

「てか、相手が名乗ったのに、名乗らないほうが礼儀知らずじゃねえかよ」

「む、確かにそうですね。私は綾瀬夕映です」

「そつか。よろしく綾瀬。で、ネギがどこかわかる？」

「ネギ先生なら、既に学生寮に戻ったですよ」

「あちゃー。入れ違いかー」

「まずいな……学生寮の場所、俺知らねえぞ……」

綾瀬に聞くか？

いや何かその場合物凄い罵詈雑言が返ってきてそつで嫌だなあ。

「じゃあない。自力で行くか。」

「そつか。教えてくれてありがとうな、綾瀬」

「ちゃんとお礼を言うくらいはありましたか。どういたしまして」

「いちいち皮肉言うとなっ！」

「でも悪い奴じゃなさそうだな。」

「そう思いながら、図書館島を後にした。」

「いつか必ず全ての本を読破してやるぜえ。」

「やば……迷った」

今俺は、学園都市の住宅エリアを歩いてるんだが……ここも広すぎですハイ。

やっぱりここは人に聞くしかないか。

男の俺が女子寮の場所を聞くとどんな反応が返ってくるか想像し、聞くのを躊躇われたが、このままでは人間に必要な衣・食・住のうち、住を手に入れることが出来なくなってしまうっ！！

急いで人に聞こう。

俺は近くを歩いていた女の人に道を聞くことにした。

「あの一、すみません。麻帆良学園の学生寮がどこにあるか分かりますか？」

「あ、分かるよー。うちそこに住んでるからー」
ホッ。人の良さそうな人で良かった。

「あの、良ければ道を教えてもらえますか？」

「うん、ええよー。ウチもちょうど帰るとこやったから」

「ありがとうございます。俺、アリア・フローレンスです」

「ウチは近衛木乃香。よろしくなー、アリア君」

「はい。よろしくお願いします」

よしっ！これでネギのとこまで行けるっ！

そう思いながら、俺は近衛さんの案内で、学生寮までたどり着くことが出来た。

あ、そっぴやネギがどの部屋泊まってるか俺知らねえや。

「やっべ、どうしよ……」

「あ、アリア君。良かったらウチの部屋あがってっよー」

何でっ!？

そう思いながら、近衛さんに引きずられる俺。

「いやな？君と同じくらいの歳の子が、ウチの部屋にもおってなー」

「へえ」

この学生寮って、年齢別に部屋割とか決めてないんだ。

「あ、ここがウチの部屋やでー」

やっと気付いたか。

「なっ、ななななな何でアリアがっ……」

大分混乱してるな！。

ま、再会の挨拶くらいはしとくか。

「よっ、久しぶりだな、ネギ」

俺はネギの手をとり、起こしてやった。

この時、俺はこの再会が、俺のこれから大きく関わることになる
とも知らず、ただ親友との再会を喜んだ。

第三話 再会（後書き）

感想待ってますっ！

第四話 現状報告

アリア side

「ふうん。ここがお前の住んでるところかあ」

部屋を見渡して、そう呟く。因みに、今俺の肩には、オコジョ妖精のカモ（本名は長いので忘れた）が乗っている。

こいつとはかなり話が合う仲で（エロ方面除く）、ネギのクソ真面目な部分をもうちよっとどうにかしたいなどでよく話合っている。

（にしても、まさか旦那が日本に来るとは思わなかったぜ）

一般人もいるため、小声でそう俺に話しかけてくるカモ。

ネギは今、二人に俺のことを説明している。

副担の教師として来たってのは、後で話せばいいか。

「ネギ、そっちの女の人紹介してよ」

説明が終わった頃合いを見計らい、まだ知らない女の人のほうを見て、ネギにそう聞く。

多分この人達も3-Aの生徒だろうし、覚えておいた方がいいだろ。

「私は神楽坂明日菜よ」

アスナね。よし覚えた。

「よろしくアスナ」

さて、軽く自己紹介も終わったことだし、ちょっとネギと話でもしたいんだが……

さてどうしよう？

魔法関連の話もしたいので、そうなるここで話すわけにもいかな
いしなあ。

うっっん。

……………面倒くせつ。

もう普通に頼めばいいや。

「ねえねえ。ちょっとネギと深い話をしたいんだけど……………席外せる
？」

ちよつと失礼かもしれんが、ここ以外の場所となると学園長室しか
思いつかないからなあ。

「うんええよ。ほな、ウチらはおいとましょかアスナ」

「えっ、ちよっ……………」

何か言いたげなアスナを引っ張り、このかは出ていった。

感謝感謝。

「んじゃネギ。まず何か聞きたいことあるか？」

「そりゃあるだろうぜ旦那。何せ今頃卒業課題をやってるはずのあんたがここにいるんだからよ」

ネギの代わりに、机に飛び移ったカモが、どっから取り出したタバコを吸いながら言う。

「その卒業課題のために来てるんだよ」

「えっ？どついうことっ！？」

「卒業課題のためって……まさかっ」

カモは気付いたな。相変わらず勘のいい奴だぜ。

俺は持って来たリュックの中から、卒業課題の内容、まあつまり、修行内容の書かれた紙を、ネギに渡した。

それを見たネギは、目を見開いて驚いた。

「いやぁ……こいつはすげえ偶然だな」

「全くだ」

カモの言葉に頷く。

「さあ、素直に隠していることを吐くのさあ」

ふっふっふっ、と笑いながらネギに接近する。

「うっ、うわあああああああああああああああああああ
あっっ!?!」

何があったかはご想像にお任せします。

三人称 side

アリアがネギからこれまでのことを根掘り葉掘り聞いている頃、ア
スナ達は寮を出て外を散歩していた。

(ネギの幼なじみってことは、あいつも魔法使いなのよね……)

このかと会話をしながら、今日会ったアリアのことを考えているア
スナ。

まあ、一般人のアスナからすれば、自分の日常に魔法使いが一人増
えることになるのだから、当たり前のことだろうが。

「うーん……」

「？ アスナでないしたん？」

「えっ！？あ、な、何でもないからっ！」

これからの事を考えて唸っていると、このかがどうしたか聞いてきたが、それを何でもないと誤魔化すアスナ。

きよどつてる時点で怪しさ満点だが、そこは天然なこのかなので（てか3-A、いや、麻帆良の生徒でこの事を気にする奴など極少数を除けばいないだろう）、全く気付かず、「そう？ほならええねんけど」と返した。

内心でホッと安息するアスナ。

事情を知っている者からしたら、やれやれといった光景だろう。

「にしてもアリア君かー。ネギ君と同じくらいかわええ子やったな
ー」

先ほど会ったアリアのことを思い出しながら、そう呟くこのか。

確かにアリアは、性格はまあ置いておくとして、顔は整っているし、髪は細長く艶やかで、瞳は青く澄んでいる。

同年代の子なら、十人中六人一目惚れしたと言っても納得してしま
いそうなほどだ。

だがアスナは、

「えー、そう？ガキなんて皆同じでしょ」

ばっさり。

まさにその一言につきるような言葉をあっさり言っただけだ。

まあ、アスナは子供が嫌いな上、ストライクゾーンが渋いおじ様という変わり者なので、仕方ないと言ったら仕方ない。

「相変わらずやなアスナはー」

それを笑って返すこのか。

そんな感じで、会話をしながら散歩をしていると、アスナ達の進行方向から、知っている顔が歩いてきた。

同じクラスの、綾瀬夕映だ。

「あ、夕映ー」

それに気付いたこのかが、夕映のもとに向かって走って行った。

「あ、待ってよこのかー」

アスナもそれに続いて走って行った。

場所は変わって、女子寮のとある一室。

そこには、二人の少年と一匹のオコジヨがいた。

片方は頭を抱え、もう片方は両手の人差し指をつなげながら、モジモジしていて、オコジヨは冷や汗を流しながらそれを見守っていた。

やがて、頭を抱えていた少年、アリアが盛大なため息と共に口を開いた。

「まず言わせてもらっが……お前、馬鹿だろ」

グサッ

「はっっ」

アリアの容赦ない一言に、モジモジしている少年ことネギに、何か突き刺さる音がして、ネギはノックアウトされた。

「ア、兄貴ーっ!!」

それにオコジヨのカモが叫ぶが、アリアの「やかましい」という一言で押し黙る。そして、ノックアウトしているネギに、追い討ちをかけるべく口を開く。

「初日に一般人、しかも自分の生徒に魔法がばれるって……更に未遂とはいえ記憶消去に、ホレ薬の調合、ばれなかったとはいえ一般

人の前での魔法行使。今まで一人にしかばれなかったのが、むしろ奇跡といってもいいな」

グサグサグサツ

もはやネギのライフはゼロに近かった。

「まあ、あの「闇の福音」のことは、よくやったよ瞬間、ネギの顔がパアツと輝いた。

それにアリアは内心呆れながら、苦笑する。

本当は、色々と説教してやりたいところなのだが、何かもう見てられなくなつて来たので、その話を打ち切り、復活してもらつたために褒めることにしたのだ。

この二人が本当に同い年なんて、外見からも精神面からも、信じにくいだろう。

(流石旦那だぜ。あんなに落ち込み気味だった兄貴を、一発で復活させるなんてなあ)

カモは、アリアの手際の良さに素直に感心していた。まあ、この辺は幼なじみの特権とでも言えるのだが。

ネギが復活したのを確認した後、アリアはネギから生徒名簿を貸してくれと頼んだ。

「やっぱ生徒の顔は確認しとかないとな」

アリアはそう言いながら、ネギから生徒名簿を受け取った。

その言葉を、カモは愚か、あの純粋なネギすら一切信用していなかった。

彼らは知っているのだ。

アリアは、そんな真面目な奴ではないことを。

実際、彼の目的は生徒の顔を覚えることなどではない。いや、覚えるつもりではあるが、そういう事は直接会い、話して覚えていくタイプの人間なので、今から覚えようという気は、一切なかった。

彼が生徒名簿を借りた理由は一つ。

『闇の福音』こと、エヴァンジェリンの顔を一目見ておきたかったからだ。

先ほど、ネギの行ったことに対して注意していたが、内心では彼は、「自分もその場に居合わせたかった。そうすりゃもっとおもしろおかしく出来たのっ！」などと考えているのだ。

まあ所謂、一般社会における不良みたいなものなのだ、彼は。

しかしこう言うては何だが質の悪いことに、彼には魔法の才能があり、魔力は常人離れしていて、頭は良く、既に実戦経験が何度もあり、ネギと同じ速度で魔法学校を卒業し、その成績は首席卒業のネギと、ほとんど大差ない。

つまり、彼は『英雄の息子』であるネギと同等か、それ以上の“天

才”なのである。

それに、今現時点では、経験の差からネギよりも遙かに強く、縮地はまだ扱えないが、瞬動は完璧に扱え、ハイ・エイシェント上級古代語魔法もかなりの数を扱うことが出来る。

他にも、魔法学校等ではまず習うことのない魔法も持っているが、その話や、それを扱えるようになった経緯は、また何れということにして……

つまり、彼は厄介事やスリルが大好きな人間だ。

そんな奴が、自分の受け持つクラスの中にかの『闇の福音』がいるんだ。

確認を取らない方が、無理な話だ。

「絶対エヴァンジェリンさんの確認をしてるよね、アレ」

「ああ。あの顔は間違いないぜ」

アリアの浮かべてる人の悪い笑みを見て、アリアに聞こえないようにそう囁きあう二人(?)。

そんな二人に気付かず、アリアは生徒名簿を見ながら思考にふけていた。

(これは……個性豊かにも限度があるだろ。ネギの落書きはまあ無視するとして、何か忍者とかいるんですけどっ!?!こりゃあ、楽しくなって来たねえ)

クッククツ、と笑うアリア。どう考えても、物語の主人公というよりも、山賊Aとかの役割の方が似合いそうなものなんだが……

「ふむ……まず一言言つとしたら、個性豊かっというかカオスだな、このクラス」

アリアの言葉に、思わず頷くカモ。ネギは生真面目な性格から、かろうじて頷くのを制止する。あくまでも、かろうじてだ。

「で、魔法を知られてる生徒は誰だ？」

これはまだアリアが聞いていないことだった。

（ちゃんと誰にはれてるか知っておかないとこれから面白……対処に困るからな）

「今何かとてつもなく不吉な事考えなかった」

「気のせい気のせい。それより誰なんだ？」

（まさか心のなかで言い直したことを読まれるとは……）

内心そのことに驚きつつ、平静を装い先を促す。

ネギはアリアの言葉を信じずジト目で見ていたが、そんな視線など完璧無視のアリアの態度に諦め、大人しく誰かを教えることにした。

「さっき会ったアスナさんだよ」

「へっ？マジ？」

ネギに身近すぎる人物だったことに、流石に驚くアリア。

(いや、よくよく考えれば普通か。同室ってことは、普段から行動を共にしてるんだろっし、ばれる機会……って、初日にはれたんだっただな。まあ、色々サポートしてくれてるんだろっ)

そう自分の中で結論付け、ネギにある事を聞くことにしたアリア。

「な、なあネギ。お前、アスナと仮契約したのってホントか？」

「ぶふうふうふうふうっ！！？」

若干顔を赤らめながらアリアが聞いた内容に、アリアが生徒名簿を見ている間に入れたミルクティーを盛大に吹き出すネギ。

「げほっ、げほっ……な、何でそれを？」

咳き込み涙目になりながら、必死な様子で聞いてくるネギ。

対するアリアは、

「カモから念話で聞いた」

と、事もなげにそう言った。

「カモ君っ！！」

「ぐへへえ。いいじゃねえかよ兄貴い」

泣きながら力モの名前を叫ぶと、力モは悪そうな笑みを浮かべながらネギを嗜める。

「ふうん、ホントなんだ。じゃあお前にはもう従者がいるってわけだ」

「従者って言うても、まだあくまで“仮”だよ。それに、一般人のアスナさんを、あまりこっちに関わらせたくないし……」

ネギとしては、自分のせいでアスナがこちら側のことを知ったのに、負い目を感じているのだ。

そのことにすぐに気付いたアリアだが、敢えてこの事には追及しなかった。

ネギはともかく、まだ会って間もないアスナのことで、あまり口出しするべきではないと思ったのだ。

その後は、他愛ない話をしばらく続けた。ネギが去った後、アリアがウエルズでどう過ごしていたとか、まだ話していない、ネギのこれまでの麻帆良での生活などを、本当に楽しそうに話し合う二人。

その姿は、はたから見れば仲の良い兄弟のようである。

実際、アリアはネギの兄貴分みたいなものなんだが、悲しいかな見た目からよく弟と勘違いされることのあるアリア。

昔はアーニヤ、ネギ、アリアの三人で、魔法学校の柱を使ってよく背比べしたが、毎回ダントツで小さいアリア。

そのせいというわけではないが、自分の背に対してコンプレックスを持っているアリア。人の良いネギは、アリアに「大丈夫だよっ！きつとすぐに背が伸びるって！」と慰めたが、それが弟分のネギからの言葉で、アリアの傷口をえぐっているのに、ネギが気付くことがなかった。

そんな感じで話をしていると、アスナとこのかが部屋に戻って来た。

後ろにアリアの知らない少女を三人ほど連れて。

「おう。おかえりー」

「あんた我が家のようにくつろいでるわね……」

後ろにいる三人に気付かず、帰ってきた二人に声をかけたアリアに、すっかりくつろいでるアリアに呆れたようにアスナは返した。

「おかえりなさいアスナさん、このかさん」

「うん。ただいまー」

「ねえねえ。ネギ君の幼なじみはっ！？」

後ろの一人が、落ち着きのない声で、アスナに聞く。

「あー、もつづるさいパルツ！ちよっとは落ち着きなさいっ！」

「アスナさんの言うとおりです。少しは落ち着いたらどうですか？」

「……………ん？」

後ろに人がいるのに気付いたアリアは、今聞いた声に違和感を覚える。

(あれ？この声どっかで聞いたような……………)

「ほら、あそこでくつろいでる金髪よ」

アスナの後ろから、三人の少女が部屋に入ってきた。

そして、アリアは入ってきた少女のうちの一を見た瞬間、先ほどの違和感が何なのか理解した。

それは、先ほど図書館島で会った、綾瀬夕映だったのだ。

「何でお前がなんだよ」

「それはどちらかと言えば、こちらのセリフだと思いますが？」

確かに夕映の言葉は正論だ。ここは女子寮で、夕映が住んでる場所だ。どちらかと言えば、部外者で男のアリアがいるほうがおかしいのだ。

「へえ、この子がそうなんだー。カッコいいじゃんっ！」

メガネをかけた、アホ毛が二本たっている少女が、アリアにそう言ってくる。

後一人の少女の方は、ネギの方をチラチラ見ながら、アリアのこと

を見ていた。

それに対してアリアは、居心地が悪そうにしながら、状況確認を行っていた。

まあ、知らない複数の年上の異性から見られれば、当たり前だが。

この時点で辟易してきたアリアだが、これからもっとひどい目に会うとは、この時は想像もしていなかったのである。

第四話 現状報告（後書き）

感想待ってますっ！

第五話 逃走

三人称 side

「はっ、はっ……」

彼は走っていた。

後ろは見ず、ただひたすら前を向いて走った。

走り続けた。

つまずきかけても、息が乱れても、走り続けた。

彼は走りながら心のなかで叫んだ。

何故こうなった。

こんなはずじゃなかったはずだっ！

「くそっ、何で、何で……」

彼は後ろを一度見る。

すると、

「ねー、待ってよアリア君ーっ！」

「十歳ってホントなのーっ!?!?」

そこに現れたのは、皆さんも薄々、いや八割の人が確信していたであろう今回の事件の諸悪の根源、麻帆良のパパラッチこと、朝倉和美だった。

「まあネ 朝倉は何やてるアルカ？」

くーふえの何気ない質問に、朝倉はため息をつきながら話した。

「いやねえ……最近さあ、全っ然スクープないからさあ、せつかくの休日だし（今日は日曜であることを、ここに記しておく）張り切っつて探しまくっただけ……はあ」

結果は聞くなどばかりに落ち込む和美。そんな彼女を見兼ねた、くーふえの一言が、今日アリアにとってこの上なく最悪なことになるのだが、そんなことを知らないくーふえは和美を立ち直らせる為に口を開いた。

「そつ、そういえば私スクープ持てるアルツ！」

ガシィッ

くーふえの言葉を聞いて、和美がくーふえの肩を掴むまで、僅かコソマ一秒。

別段運動神経が特別に良いわけでもない彼女がこれほどの動きをする程、今の彼女はスクープに飢えていたのだ。

（あいやー……余計な事言ってしまったアル）

内心その後悔しながらも、今更教えない訳にもいかないので、くーふえは先程会ったネギの幼なじみのアリアの事を話した。

「ふっふっふっ、久しぶりのスクープよぉ〜……教えてくれてありがとくーふえっ!!」

そう言つて、和美はどこかに走り去って行った。

「……南無南無」

それを見送ったくーふえは、静かに合掌したのだった。

〜とある部屋〜

ぞくっ

「っ!？」

「どうかした？アリア」

「いや、何か寒気が……」

(気のせいかな?)

残念ながら気のせいではないのだが、まあ今の彼はそんな事は知る由もないので仕方ない。

「ねえねえアリア君っ！身長は何センチッ？」

「それは人のトラウマをほじくってるんのかっ!？」

さっき知り合ったパールこと早乙女ハルナが、遠慮もなしにいきなり人のトラウマを聞いてきたので、思わず突っ込むアリア。

「いやー、冗談だよ冗談。でもアリア君って、本当に十歳？」

「しっけえっ!」

「まあまあアリア君。落ち着いて落ち着いて」

「……このかは何で頭撫でんの？」

「だってかわええからー」

「このかさん。それを男の子のアリアさんに言うのは酷ではないでしょうか？」

「おお、初めて意見が合ったな夕映」

「そのくらいは普通です」

「あっ、あのその、ネ、ネギ先生の、こっ、子供の頃は……」

「……何でのどかはきよどってんの？」

「のどかは人見知りか激しいんです」

「あんたみたいに凶々しい奴と違って繊細なのよ」

(……なあネギ？俺、アスナに何かしたか？)

(アスナさんって子供が嫌いだから、それでだよ)

(……本当、個性豊かなこつたな)

「あんた達何小声で話してんの？」

「いや別に。それよりネギの子供の頃の話な。こいつ昔「わわっ！
アッ、アリアアッ！」ん？どうした？」

「あの事は二人の秘密って約束したじゃんっ！」

「……あー、そっぴやそんな約束あったようになかったようにな……」

「まっ、まさか誰かに話したの？」

「……………」

「何で黙るのっ！？」

「なあ夕映。何かオススメの本とかある？」

「スルーっ！？」

「ネギのあの慌てよう……気になるわね」

「ホンマやなー。何があったんやろ？」

「ねえねえアリア君。お姉さんにこっそり教えてみなって。ね？」

「ハルナに話したら、明日には学園の反対側まで広まるですよ？」

「マジでっ！？あんな、実は……」

「わーっ、わーっ、わーっ！ー！」

「ンダようるさいなあ」

「うるさくもなるよっ！ー！」

「まあ、お前の慌て振りも見れたし、これくらいでいいや」

「……………」

「へ？いやネギ？まさか泣いたりは……しっちゃったりする？」

「何泣かせてんのよ」

ゴシッ

「痛つてえっ！」

「自業自得よ」

「アスナさあんっ!」

「あー、ハイハイ。もういじめっ子は退治したから泣かない泣かない」

「……アスナさん、いいなあ」

「むむっ、こりゃあ負けてられないね。のどか、ここはいつちよア
ピールするよっ!」

「えっど、どうやって?」

「そりゃあ……夕映先生っ!」

「ちょっとは考えてものを言ってください」

「じゃあ夕映は何か案あんの?」

「ありませんが?」

「何で偉そうに言えるの?」

「あー、泣かせちゃったなー」

「アリア君、友達泣かしたらあかんえー?」

「反省してます」

「ホンマかー?」

「本当だつて。よしっ、じゃあいつちよ謝ってくるっ！」

「ええ子ええ子ー」

「頭撫でるなっ！」

とまあ、こんな風に和気あいあいと楽しく話している間にも、パパラッチの魔の手が刻一刻と迫って来ているが、アリア達はそんな事はつゆ知らずに話を続けた。

場所は変わって、女子寮ロビー。

そこには、不適な笑みを浮かべる女がいた。

そう、皆さんご存知こと、パパラッチ朝倉である。

「ふふふ。これでよし」

そう呟き、その場を去るパパラッチ。

彼女のした事は、実に単純。

ただポスターを貼っただけ。

『只今ネギ君の幼なじみがこの女子寮にいる』、と。

本来なら、取材をしたいのなら、こんなポスターは貼らない方がいいのだが、彼女はある算段をたてていた。

「これでよしと。さあて、後は時を待つだけね」

そう言って笑う彼女の顔は、小悪魔と呼ぶには邪悪すぎる笑みだった。

――数分後――

結果は言うまでもないとは思うのだが、一応その結果に至るまでの過程を記そう。

まず、ロビーを通り、真っ先にポスターを見つけたのは、ピンクの髪を頭の上の部分で二つに縛り、肩まで髪を伸ばした、天真爛漫という言葉が似合う外見の、新体操部の佐々木まき絵だった。

「ええーっ!!」

それを見た彼女は、その内容に驚き、大声を上げた。

その大声に何事かと、まき絵と一緒に自主練を終えて帰って来ている運動部四人組は、まき絵のもとに行き、ポスターを見た。

その後のまき絵達の行動は素早かった。

皆すぐに、ネギのいる部屋、まあつまり、アリアのいる部屋を目指したのだ。

しかも、その四人が慌てて走っているのを気になったクラスメイトに事情を矢継ぎ早に話し、アスナ達の部屋に着く頃には、その数は軽く十人に達していた。

そして、彼女達は扉を開けた。

~~~~~回想終了~~~~~

あの後、彼女達の質問攻めから逃れる為に脱走して、追いかけて来る彼女達から逃げていたのだ。

しかも追いかけてられるうちに、更に数人増えて、今では十五人に達していた。

(くそっ……本当に何でこうなった!?)

逃げながら何度もそう思う。

(取り敢えず、どっか隠れられる場所は……)

そう思つて、そんな場所がないことを思い知らされる。

ここは女子寮なので、隠れるとしたら誰かの部屋に入るくらいしかない。(風呂やトイレなら隠れられると思つたが、流石にアリアの常識がそれを許さなかつた。)しかし、誰とも知れぬ人の部屋に入るのは躊躇われる。

さて、どうしたものかな？

うっくん、とアリアが頭を抱えながら走っていると、いきなり彼の横のドアが開き、彼を引きずりこんだ。

「なあっ「静かにつ!」っ!？」

引きずりこんだ張本人であろう人物に、口を塞がれて黙らせられるアリア。

(何なんだ一体!?)

そう叫びたいが、口を塞がれているので出来ないアリアは、ムーツ、ムーツ、と何か唸つてるような声しか出すことが出来ない。

そんな彼の耳に、今最も会いたくない奴らの声が入ってきた。

「アリアくーんっ!どこー!？」

「おっかしいなー。確かにこっちに来たと思つたのに……」

その声を聞いて、押し黙ってしまつ。彼も見つかりたくはないからな。

「あの子らに見つかりたくないでしょ？」

ウィンクしながら、大人しくなつたアリアを離しながらそつ言つ。

「あ、あんたは……」

少し咳き込みながら、自分を助けたであろう人物を見る。

「あたし？あたしは朝倉和美。よろしくね、アリア君」

アリアの長い1日は、まだ終わらない。

第五話 逃走（後書き）

感想待ってますっ！

## 第六話 疲れた初日

三人称 side

「よろしくね、アリア君」

そう言って、手をアリアに手を差し出す和美。

ここはパラッチこと、朝倉和美の自室である。

今回彼女のとった作戦は、至ってシンプルだった。

普通にアリアがいるであろうネギのいる部屋に行つたところで、途中、或いは質問する前に3-Aの生徒が来て、何も出来ずに終わるのがオチだ。

だったら、ネギや他の人がいない場所であればいい。

そこで、今回のような行動をとつたのだ。

いきなり、複数の知らない年上の異性に質問攻めされれば、その場所から逃げ出すに決まっている。

そして、そこを助けていい印象を持たせた状態で、取材に挑もうとしたのだ。

これは、前回会つたお見合い騒動から学んだ結果だったりする。

(ふっ、我ながら完璧な作戦)

アリアに笑顔を向けながら、心のなかでそうほくそ笑む和美。

だが、アリアは半眼で和美を見た後、あっさりところう言った。

「あんだだろ。今回こんな事になった諸悪の根源は」

瞬間、空気が凍った。

「え、え〜つと……何の話かな？」

凶星を言い当てられて、内心かなり焦っているが、何とかそう言つてとぼける和美。

だが、アリアはそんな言葉には耳を貸さず、口を開いた。

「とぼける気か……じゃあ聞くけど、何で俺の名前知ってたんだ？」

「……………あつ」

しまったと思う和美。アリアの言うとおり、彼女は、アリア本人から名前を聞いてもいないのに、彼の名前を呼んでしまった。

「そつ、それはさつき追いかけてた子達が君の名前を呼んでたから……………」

だが、そこは流石パラッチの二つ名をもつ和美。その程度で取材の芽を潰すはずもない。咄嗟に思いついた言い訳でアリアに納得してもらおうとする。

しかし、それをアリアはやれやれと言った感じで首を振った。

本当に十歳か？という疑問は、消去させてもらう。

「まずきよどつた時点で嘘ってバレバレだぜ？」

「うっ」

「それに、俺は走って逃げていたってのに、扉の開くタイミングが絶妙すぎだ。あんなの、予め人を待ち構えてでもない限り、不可能だ」

「……………」

十歳の少年に、言葉で完璧に打ち負け、うなだれている女子中学生の姿が、そこにはあった。

ていうか、和美だった。

（まっ、負けた…………この子本当に十歳なのっ！？とてもネギ君と同じ年とは思えないわね…………）

その事に驚愕しながらも、次の算段をたてる和美。麻帆良のパパラッチはこの程度では諦めないのだ。

（これは出来れば使いたくなかったけど…………スクープの為っ！）

そう思った後、和美は口を開いた。

「ぶっぶっぶ。ばれたら仕方ないわね」

「いきなり開き直ったなオイ」

呆れながらそう呟くアリア。彼としては、和美のように面白い人間は好きなので、何が目的か聞けば二つ返事で頷こうとしていたのだが、これはこれで面白そうなので、敢えて黙ってることにした。

「君のことを詳しく教えなさい。さもないと、さっきの子達をここに呼ぶわよ?」

「なっ!?!」

それだけは、アリアは避けたかった。あんなもみくちやにされれば、やってる方は楽しいだろうが、やられる方はたまったもんじゃない。

(俺のことって、『魔法使い』としてじゃなくて、『ネギの幼なじみ』としてでいいんだよな?なら別にこんなことしなくても……)

そこまで考えた後、さっきのことを思い出すアリア。

(なるほど。確かにあんなんじゃない、落ち着いて聞くことなんて出来ないわな)

そう納得し、さてどうしたものかと考えるアリア。

(このまま教えるのが一番無難だが、別に魔法を除けばこれといって面白い話があるわけでもない。それで納得するのか?それに、何でここに来たばっかの俺の過去を知りたがるんだ?これもネギ関連か?)

だったら問題ないかと思い、話そうとしたところで、アリアはあることが引つ掛かった。

(あれ?よくよく考えたら、何で俺ってこんな目にあってるんだ?えっと、確かここに来た目的は……)

「あああああああああああああああああああっっ!?!」

ようやく今日ここに来た目的を思い出し、つい叫んでしまうアリア。

「うわぁっ!何々どうしたのっ!?!」

いきなり叫んだアリアに驚く和美。しかし今のアリアには、それを気にする余裕など皆無だ。

(やべえやべえやべえっ!?!完っ壁に忘れてたどうしようっ!?!今からネギのところに戻るのなんざ自殺行為に等しいぞっ!?!かといつて戻らないと野宿確定……どうすりゃ……そうであっ!?!)

アリアは名案を思いついたとばかりに手をうった後、部屋を飛び出した。

「……………え?いやスクープ……………」

啞然とそれを見送るしかない和美だった。

アリアside

「……よし、いないな」

曲がり角からそっと顔を出し、誰もいない事を確認した後、ダツシユで音をあまりたてないように一気にネギのいる部屋まで駆けて、倒れこむように部屋に入った後、急いで扉を閉じた。

「ぜえ……ぜえ……」

あゝ、疲れた……

部屋にいるのは、ネギにアスナ、このか、のどか、ハルナ、夕映か。

ふう。さっきの連中はいないな。

その事に安堵の息を吐いた後、ネギの前まで歩いていく。

他の連中が何か言ってるが、今はそんな余裕はない。

「ネギ、頼みがある」

「え？な、何？」

俺は、今日ここに来た経緯を話す。

それを聞いたこのかが、呆れたように「おじいちゃん……」って言

っていたけど気にしない。

「で、あてはあるか？」

「え、えっと……」

早くしてくれっ！じゃないとあいつら戻って来るからっ！

「うーん……ハルナさん達の部屋は？」

「えっ、私ら？うーん……余りのベッドがないわね」

頭を掻きながら、そう言うハルナ。

「それとも、一緒に寝る？」

「……………遠慮シマス」

「顔赤くなってやんの」

アスナ五月蠅い。

さて、この三人も駄目となると、やっぱり一回学園長のところに戻るしかないな。

そう思って立ち上がると、ネギが名案を思いついたとばかりに手をうった。

おっ、何だろ？あてでも思いついたか？

「今日一緒に寝ようよアリア。昔みたいに」ゴツンッ  
取り敢えず一発殴つといた。

「?????」

涙目で頭の上に？マークを浮かべるネギ。

「あ・の・な？確かに今日はお前のところで寝ればいいかもしれないけど、明日はどうすんだ？」

「……………あ」

そう小さく声をあげたネギを見て、深く深くため息を吐いた。

### 三人称 side

「うーん。で、結局どないするん？」

唸った後、アリアに聞くこのか。その言葉に、全員がアリアのほうを見る。

「学園長のとこ行って、別のとこ用意してもらおう」

「ですが、その場合少なくとも用意されるのは明日になるのでは？」

「……………ネギ、今日一緒に寝ようか」

てな訳で、アリアの部屋が決まるまで、アリアはネギと一緒に寝ることが決まった。

誰かと一緒じゃないと夜眠れないネギは喜んだが、ネギがよく寝呆けて近くにあるものを抱き寄せるくせを知っているアリアは、げんなりしていた。

因みに、この時、ネギ以外の人間は、アリアが初等部に転校してくる子だと思っていたらしい。

さて、明日はどうなることやら。

夜。

アリアは中々眠れなかった。

明日からの事に興奮して眠れていないのだ。

「ねえ、アリア起きてる？」

アリアの横で寝ているネギが、そう聞いてくる。どうやら彼も眠れないようだ。それもそうだろう。しばらく会えないと想っていた親友と、明日からは同じ職場で働くのだから、十歳の少年に興奮するなというほうが無茶な話だ。

「ああ、起きてるよ」

その事を察したアリアは起きていた事には突っ込まず、ただネギの言葉に答えた。

「何だか昔を思い出すなあ」

「年寄りみたいだぞ、ネギ」

「え？そうかな？」

「そうだよ。こういう時は、子供の頃とかいう言葉を使うだろ、普通」

「僕らまだ子供だよな？」

「もう職についてるけどな」

その言葉に、お互いに顔を見合せて笑いあう。何がおかしいというわけじゃない。ただ、何となく二人共笑いたくなったのだ。

ひとしきり笑った後、ネギが口を開いた。

「明日から頑張ってね、アリア」

「ん、りょくかい」

その言葉を最後に、二人は静かに寝息をたてた。

これからの彼らに待っているものは、幸か、不幸か、それとも、歯車はとづくに動いていて、二人の道を決めてしまっているのか、今は誰にもわからない。

だが、願わくは彼らに幸あらんことを……

第六話 疲れた初日（後書き）

感想待ってますっ！！

## 第七話 初登校

アリアside

……どこだ、ここ？

周りを見渡す。

辺りは暗く、せいぜい自分の足元を確認できる程度しか見えない。

耳をすますと、風によって葉が揺れる音が聞こえた。

どつやらここは森らしい。

……あれ？

おかしくないか？

俺って確か……あれ？

ああ、これ夢か。

夢だと分かり、試しに体を動かそうとすると、何故か体が動かない。

何でだ？

そう思っていると、体が勝手に動き出した。

おいおい、何でだよ。

そう思いながら、勝手に動く俺の体に違和感を覚えながら歩いていくと、開けた場所にでた。

そこには焚き火と、一つのテントがあった。

焚き火のそばに、長身の魔法使いが着るローブをかぶっている男が座っていた。

あれ？この人って……

「戻ったぞ、――」

俺が男に対して疑問に思っていると、俺（の体）が勝手に話した。

何か変な感じ。

「遅いぞ能無し」

ひどっ！俺（の体）の扱いひどっ！！

って待てよ？この扱い方ってものすごくくしく身に覚えがあるんだが……

「うつせえクソ野郎。ガキに飯とりに行かせててめえが寛いでる奴が言える立場かよ」

あ、これもう完璧に“あいつ”だわ。

てことは、これは昔の夢か。

そう思っていると、俺（の体）が手に持っていた“何か”を男の方に投げた。

「……………何だこれ？」

「ネズミみたいな何か？」

「何で疑問系かは取り敢えず置いて、俺は確か飯とってこいつつたよな？」

あ、肩震えてる。てか、この後の展開思い出したあああああああああああつっ！！！！

やばいやばいやばいいいいいいいいいい！！

早く謝れ俺（の体）っ！！

「そつだがそれが？」

挑発するかのように言う俺（の体）。

てかやめろおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！

「……………言い残すことはあるか？」

立ち上がりながらそう言う男。

あ、終わったわ。せめて夢で位結果が変わって欲しかったよ。



三人称 side

目が覚めたアリアは、取り敢えずネギを蹴飛ばして起き、先に起きていたこのかが作っていた朝食を貰うことにした。

「いやあ、わざわざ朝飯までもらうなんて悪いな」

なんて言いながら、一切遠慮のない食いつぶりを発揮するアリア。

この辺はまだまだ子供の雰囲気を残している。

「遠慮せんでええよー、って微塵も遠慮してないかあ」

「うん」

あっさり認めるアリア。人見知りをしないいい子だと前向きに解釈してもらいたい。

「まあ、そんなに食べてくれると、作るほうも嬉しいわあ」

アリアが今食べているご飯は、既に五杯目だったりする。

身長百二十弱のあの体のどこに入るのかは謎だ。

「ネギ君みたいな大人しい子もええけど、アリア君みたいな元気な子もええなあ。なんや弟が二人いるみたいやー」

「俺もこのかみみたいな優しい人が姉ちゃんだったらいいなって思う

ぞ。美人だし料理も美味いから、きっと将来いいお嫁さんになるよ」

「もう、アリア君ってば」

ゴチンッ

金づちで頭を殴られるアリア。突っ込みにしては激しすぎではないか？

(……………うん、この件はスルーの方向で)

そう思い、再び食事を再開する。

「ん？そついやアスナは？」

部屋にアスナがいない事に気付き、その事を尋ねるアリア。

「あー、アスナは新聞配達のバイトに行ってるんよー」

「へー、偉いんだな」

素直に感心するアリアだが、内心では中学生であるアスナが朝早くからバイトに行っていることに疑問を感じていた。

(何か訳ありか？……………まあ、聞かないのが利口だな)

そこまで考えた後、アリアはその事は一旦忘れて、またこのかと他愛ない話をしながら、朝食を食べた。

「う、うん……………あれ？アリアは？」

ようやくネギが起きた頃には、既にアリアは朝食を食べ終わっていた。

「いっつちだぞ〜」

食後のお茶を堪能していたアリアが、手をヒラヒラ振りながら言う。

「おはようネギ」

降りてきたネギに、挨拶をするアリア。

「う〜ん、おはようアリア〜」

まだ完全に目が覚めてないのか、間延びした声で挨拶を返す。

「ネギ君おはよー」

「おはようございます、このかさん」

今度はちゃんと挨拶するネギ。どうやらもう目が覚めたらしい。彼の肩には、彼の友達のカモがのっていた。どうやら彼も起きたようだ。

一度伸びをした後、ネギはこのかに用意してもらった朝食のある机の前に座った。

「う〜ん、何だかお腹が凄く痛いような……」

先ほどアリアに思い切り蹴られてたから、当然だろう。

それに対するアリアは、

「変な寝方でもしたんじゃないか？」

あっさり惚けましたねハイ。

まあ、抱きついたネギも、自業自得と言えるが。

その後も他愛ない話をしながら学校へ行く準備をしていると、アスナがバイトから戻って来た。

「アスナ今日は遅かったなー」

朝食を片付け終え、制服に着替えたこのかが、アスナを迎える。

「今日バイトの先輩で来れない人がいてねー。その人の分もやったから時間かかっちゃって」

「へえ、本当に頑張ってるんだなあ」

お茶をズズ、と啜りながらアリアが言う。

「って、何のんびりしてんのよっ！あんたは早く学園長のとこ行って、部屋貸して貰わないといけないでしょっ！！」

あまりにまったりしているアリアを見て、すかさず突っ込むアスナ。

それを聞いたアリアは、

「……………あつ」

「忘れてたんかいつ！」

スパーンッ

「痛えっ!?!」

アリアに見事な突っ込みが入る。

とまあ、そんな訳で、急いで準備を済ましたアリアは、学園長室へと向かったのだった。

〜〜学園長室〜〜

「ーと言っわけなんですけど、何とかありませんかね?」

アリアから事情を聞き終えた学園長は、ふむと一度頷いた後、自分の立派な顎髭を何度か撫でて考え込んだ。

そして、考えがまとまったのか、口を開いた。

「ちょっと今すぐにはいかんが、今日の放課後までには決めてお

くといふことでよいかの？」

「あ、はい。それなら全然構いません」

割とあっさり話もついたことなので、アリアは学園長室を出ようとすると、学園長に呼び止められた。

「？ 何ですか？」

何で呼び止めたのか疑問に思いながら振り向き、用件を聞くアリア。すると、学園長の顔が急に真剣なものになったので、アリアも身を引き締める。

（何だ？何か重大な用件でもあるのか？）

そう思いながら、緊張した面持ちで、学園長の言葉を待つ。

そして、ようやく開かれた学園長の口から放たれた言葉は、

「本当にピッチピチの若い女子と一緒に一つ屋根の下生活をせんでも……」

「失礼します」

学園長の言葉を途中で遮って出ていくアリアであった。

「うーん、今更緊張するってのもな」

31Aの教室の前で、頭を掻きながらそうぼやくアリア。

彼は今、朝のHRが終わるのを教室の前で待っていた。

どうやらその後で紹介するつもりらしい。

「ふふ。やっぱり緊張する？」

彼の隣に立っていた、源しずなが聞いてくる。

「そりゃあまあ、それなりに」

しずなの言葉に、曖昧に答えるアリア。

どうやら時間が経つ度に、緊張が増している様だ。

(あゝあ。やっぱりじっとしてるのはあわねえな)

訂正。ただ単に待ちくたびれているだけのようだった。

そんな風に、もうそろそろ貧乏揺すりでもするんじゃないかという  
雰囲気をかもしだした時、教室の中からこんな声が聞こえて来た。

「はい先生えーっ！今日新しい先生が来るって本当ですかーっ！？」

（情報早っ！）

そう思わずにはいられないアリア。しずなも苦笑いしていた。

「わー、情報早いですねー。本当ですよー」

ウキウキとしながら、ネギが感心と歓喜の入り交じった声で言う。

情報についての突っ込みはなしかっ、とアリアは思ったらしいが、どうやらなしのようだ。

「もう教室の前に来てるんですよーっ！」

滅茶苦茶はしゃいでいるネギ。どうやらアリアが副担任になることが、余程嬉しいらしい。

すると、生徒から質問の嵐が巻き起こった。

「新しい先生は男！？それとも女！？」

「何歳なの！？」

「担当する教科は！？」

「彼氏、もしくは彼女持ち！？」

「そいつ強いアルか！？」

等々と、質問を立て続けにする生徒達。

それにネギは対応しきれず、あわあわとしている。

それを外で聞いていたアリアは、回れ右をして歩き去ろうとしていたが、しずなに肩を掴まれて阻まれた。

「は〜な〜せ〜っ!!」

「え〜っと、多分大丈夫だからきつと」

「多分ときつとが入った大丈夫なんか信用出来るかあっ!!」

そう叫びながら、逃げる為にしずなの拘束から逃れようとする時、教室の中からネギの言葉が聞こえてきた。

「えっと、実際に見てもらった方が早いと思うので、入って来てもらいましょうっ」

それを聞いて、一瞬アリアがゲツと顔をしかめて、動きを止める。

しずなはその隙を逃さず、アリアを一気に教室の扉の前まで持って来た。

流星にもう逃げれないと判断したのか、アリアは小さくため息をついた。

「それでは、入って来てくださいつ」

アリアは、はつらつとしたネギの言葉を聞き、扉を開けた。

すると、彼の頭の上から、黒板消しが落ちて来た。

それはそのまま彼の頭に……

「よつと」

……落ちなかった。

黒板消しは、床に落ちている。

アリアは、黒板消しが当たる瞬間、一步後ろに下がって、それを避けたのだ。

「え〜つと、何コレ？」

そう聞きながら、ネギのもとに歩いて行こうとすると、今度はロ―プが足を引つ掛けるように仕掛けてあったのを、跨いでよけ、降つて来たバケツは殴って弾き、最終的に飛んで来た矢を掴んで捨てた。

それを見ていたクラス一同は、オオ〜と感心の声をあげた。

だが次の瞬間、クラスの半数以上が固まった。そのほとんどが、新しい先生が子供だったことに驚いたのではなく、昨日会った“初等部”にいるはずの子供が先生だったことに驚いたのだ。

だが、その事を知っていたネギは、固まっている生徒とは違って、生徒に向かって半分涙目で叫んだ。

「誰ですかあっ！？あんな畏仕掛けたのおっ！？」

その声に、我にかえった悪戯双子姉が立ち上がって、自信満々で、

「私だよっ！」

と答えた。

「てか、何でアンタが先生なのよっ！？」

今度はアスナが立ち上がって、アリアを指差しながら叫ぶ。

その言葉に、昨日アリアに会った面々が、うんうんと頷いている。

「いや何でって言われても……昨日言わなかったっけ？」

『言っていないっ！』

見事にハモった一同に対して、アリアは取り敢えずこう言うことにした。

「お前ら息ピッタリだな」



第七話 初登校（後書き）

感想待ってますっ！

## 第八話 いきなり仮契約？

三人称 side

「え〜、という訳で、新しい副担任の、アリア・フローレンス先生ですっ。僕の幼なじみなんですよ〜」

あれから何とか生徒を落ち着かせた後、アリアの自己紹介に入った。

「アリア・フローレンスです。今ネギが言った通り、ネギの幼なじみだ。これから一年間、よろしくな」

オオーツ！！と声をあげながら、拍手がおこる。

「他に言うことある？アリア」

ニコニコ笑ってるネギがそう聞いてくる。アリアは顎に手を当てて考えた後、

「ん〜。じゃあ、俺がこのクラスの副担としての抱負を」

「おおっ、いいねいいねーっ!!」

「いっちょ頼みますぞ旦那ーっ!!」

アリアの言葉に、更にうるさくなるクラス。こいつらのエネルギーは無限なのだろうか？

ひとしきり騒いで、静かになったのを見計らって、アリアが口を開



「気のせいだろ」

そう言いながら、さっきメモった紙を、ポケットにしまう。

『何をしまったあああああああああああああっっっ！！』  
『？』

そう叫びながら、アリアに向かうバカ達。

しかしアリアはそれを軽々とすり抜けながら、

「はっはっはー。捕まえてーらんないー」

と満面の笑みでバカどもに言う。

瞬間、

ガシッ

「……………」

あっさりと隠す気あんのかお前って言いたくなるような忍者に捕まったアリア。

「さ、今隠したのを渡すでござるよ」

ニコニコと笑いながら言う楓。楓はともかく、後ろで目を光らせてる奴等が怖いので、冷や汗を流しながら大人しく渡すアリア。

その後、教壇に戻ったらネギにポカポカと叩かれながら怒られ、そ

れを必死に宥めるのをクラス一同で温かく見守った後、アリアへの質問タイムになった。

因みにHRの時間などつくに終わっていて、現在は一限目の時間だが、一限目がアリアの数学なので、その時間を使用している。

因みに教室の扉の前には、何故かネギもいる。

アリアが、

「何でお前がいんだよっ！」

と突っ込んだら、

「いやあ、初めてだから何かと不安なんじゃないかなあって」

と笑顔で答えられたとか。

どうやら、自分の方が教職業については自分の方が先輩なので、お兄さん風を吹かせたい様だ。

アリアは取り敢えず、ネギの事は置いておこうと思い、切り替える事にした。

「えっと、じゃあ質問ある人」

瞬間、半数以上の生徒から手が上がった。

「うわっ、これ全部答えないといけないのかっ!？」

アリアがそう叫ぶと、全員にうんと頷かれてしまった。

その事に結構辟易しながらも、取り敢えず端から当てることにしたアリア。

クラス名簿を片手に持ちながら、誰を当てようかと思案する。

「え〜っと……じゃあ、出席番号三番の朝倉」

「ズバリ、初恋は何歳？」

「子供にする質問かあっ!!」

すかさずアスナに突っ込まれる。

アリアはそれを見て、

「アスナは突っ込み係っ」と

と呟きながら、クラス名簿に何かを書いていた。

「余計な事書くなあっ!!」

それに対しても見事な突っ込み。それを見たアリアは一つ頷いた後、

「やっぱり突っ込み係っ」と

「うがーっ!!」

壊れたアスナを無視して、先ほどの和美からの質問に答えることに

するアリア。

「恋なんてした事ないよ」

「えー、ホントにい？」

「いやホントだけど……」

「いやいや少しくらいは……」

「えつと次は……」

このまま話していてもしつこそうなので、次に移ることにするアリア。和美とその他数名が抗議の声をあげていたが無視した。

「んじゃ、十二番のクー」

「何か武術を習てたアルカ？」

「あ、それ私も気になってたんだー」

「さっきのあれ凄かったもんねー」

くーふえの言葉に同調するかの様に何人かが声をあげる。

それに対してアリアは、右手を出して、数える様に指を折りながら、くーふえの質問に答える。

「ムエタイ、空手、中国拳法に柔術、剣術に槍術、棒術、銃衝術に……」

『多すぎでしょっ!』

アリアの言葉は途中で遮られてしまった。

「いやいや、いくら何でも冗談だよな?」

完璧に冗談だと思っている顔で、アリアにそう聞く。

それにアリアは一瞬怪しい笑みを浮かべた後、子供のような（まあ実際子供なんだけど）笑顔で、

「当たり前じゃん。剣術を少しかじってるだけだよ」

こう言ったアリアだが、その真偽は怪しいものだ。

「じゃあ次は……」（以下略）

とまあそんな感じで、律儀に手をあげた二十人近くの質問に答えて、授業がまともに来れなかつたとき。

〳〳放課後〳〳

「えーと皆さん。来週から僕達31Aは、京都・奈良へ修学旅行へ行くぞーで…!」

異様に高いテンションで、ネギがHRを始めた。

因みにアリアはドアの前の椅子に座っている。

「もー準備は済みましたかー!?」

『はーい』

「……小学生？」

ついそう呟くアリア。それほどまでに異様にテンションが高いのだ。

「この学校は人数が多いので、修学旅行の目的地はハワイ等の数ヶ所からの選択肢となっていますわ」

「へえ、やっぱ凄いなこの学校」

委員長の言葉を聞き、改めてこの学校の凄さに驚くアリア。実際、この学校の権限や財政は世界規模で見ても大きいのだが、アリアがその全貌を知ることはないだろう。

「うちのクラスは留学生も多く、ネギ先生もアリア先生も日本は初めて……日本文化を学ぶ意味でも、クラスの総意で京都・奈良を選択させて頂きました」

(それを決めた時、俺はいないはずなんだけどな……)

委員長の言葉を聞いて、苦笑しながらそう思うアリア。

対してネギは、そんな委員長に涙を流す程に感激していた。

委員長は、予想以上に喜んでるネギに、顔を赤らめながら喜んでいた。

「うわー。楽しみだな修学旅行！！早く来ないかなー！！」

「お前が一番楽しみなんだな」

呆れながらそう呟くアリア。まあ、アリアも内心ではかなり楽しみではあるのだが、就任していきなり来週に修学旅行と言われたので、今はうれしさよりも驚きのほうが上回っていた。

そんな彼の後ろのドアがいきなり開かれ、そこからしずなが出てきた。

「あれ？しずな先生？何か用ですか？」

椅子に座ったまま、見上げる形で後ろのしずなを確認した後、何か用があるのかと聞く。

「ええ。アリア先生にネギ先生、学園長がお呼びしてますよ」

「あ、はーい」

「ホッ、無事部屋が決まったか」

そんな訳で、アリアとネギは学園長室へと向かった。

〃〃学園長室〃〃

「えっ……し、修学旅行の京都行きは中止っ!？」

「うおっ、びっくりした……」

学園長から修学旅行の京都行きが中止だと言う事実を突き付けられて、思わず叫ぶネギ。そして、いきなり叫んだネギに驚くアリア。そんな二人の反応を無視して、話を続ける学園長室。

「うむ、京都行きがダメだった場合はハワイに……」

だが、説明の途中なものにも関わらず、ネギがふらふらと揺れながら「きょうと……」と呟き、最終的には壁にうなだれたので、流石に学園長も説明を止めて、コレコレと注意する。

「なあカモ。何でこいつはこんなに落ち込んでんだ？」

アリアは自分の肩に乗っているカモに、何でネギがここまで落ち込んでいるのかを聞く。

するとカモは、どこかからタバコを取り出して、それを一度ふかしから、

「そりゃあ無理ないぜ旦那。何せ京都には、兄貴の親父の手掛かりがあるらしいんだからな」

「え？それってあのサウザンドマスターの？」

カモから告げられた事実には驚くアリア。アリアは、ネギから大体の事情は聞いているので、サウザンドマスターのことも知っていた。

「ああ。そのサウザンドマスターだぜ」

「へえ。ま、そりゃああなるわな」

アリアは、未だに壁にうなだれて、「きょうと……きょうと……」と呟いているネギを見て、納得したように頷いた。

「で、学園長。何で中止になったんですか？」

「おう、そーだぜ。いくら何でも理由くらいあんだろ？」

取り敢えずネギのことは置いておき、話を進めるよう学園長に言うアリアとネギ。

「ふむ、まあまだ中止とは決まったらんのだが……」

瞬間、シュピーンツという音ともにネギが復活した。

「ほ、本当ですか!？」

期待に目を輝かせながら聞いてくるネギに、学園長は一つ頷いてか

ら、説明を始めた。

「いやあ……結構な大役押しつけられたなあ」

ネギと共に走りながら、先ほどのことを思い出して、ついそう呟くアリア。

「ぼやいてる暇はないよーアリア。まずは修学旅行の準備しなくっちゃっ！」

京都に行ける事と、親書を渡すという大役を授かったからか、テンションがかなり高いネギが、アリアに向かって言う。

「それにアリアは、部屋の片付けとかも忙しいでしょ？」

「あー、そういやそうだった」

アリアは、自分の部屋の場所を思い出して、深いため息をこぼした。

アリアの部屋は、女子寮管理室となってしまうた。何でも前の管理

人が妊娠してやめたので、その部屋が開いていたからだそうだ。

「大丈夫だよつ。僕も手伝うからっ」

何を勘違いしたのか、アリアのため息を見て励ますネギ。

それにもまたため息をつくアリア。

その後、カモが何やら仮契約のカードについて説明しようとしたら、アスナとこのかと会ったので、おじゃんとなった。

「うーん、これも似合うなあ」

「い、このかさん〜」

「こっちも似合うなあ」

「これ何着目？」

「うーん……十着目？」

「もうそんなに着てたのか」

「せやでー。あ、ネギ君次こっち」

「あ、はい」

アリアとネギは今、アスナとこのかの買い物に付き合っていた。

理由としては、只の成り行きだが……

「せっかくやしネギ君もアリア君ももつとかわええ服着てかな 試着してき〜」

ドサッ

このかに渡された服は、二人合わせて軽く十を越えていた。

その後、アスナに言われ、自分の買い物に戻っていくこのかを、ネギとアリアは苦笑しながら見送った。

「なあ兄貴。このか姉さんで、じじいの孫なんだよな。ってことは、魔法使いの血筋か？」

「うーん、そうみたいだね。本人は知らないみたいだけど……」

ネギの言葉を聞いた途端、カモの目がキラーンと光ったのを、アリアは見逃さなかった。

(この後の展開、何となく読めたな)

そう思いながら、何故かネギと同じ試着室に入り、カモの言葉に耳を傾ける。

「兄貴兄貴」

「何？カモ君」

「このか姉さんの唇を奪っちまえよ！」

ガンッ

上着を着ようとした体勢で、壁にぶつかるネギ。

「大丈夫かー？」

既にこのかから貰った服を着終えたアリアが、全く心配していない声音でそう聞きながら、ネギに手を差し出す。

「う、うん何とか……って、なな何突然言いだすんだよカモ君ッ！」

「違う違う。バクティオー仮契約の話だよ仮契約！！」

「あーつまり、これから関西呪術協会とかといざこざあるかも知れないから、戦力上げといた方がいいって言いたいんだろ？」

カモの言葉に、カモが言いたいことを簡単に纏めて、それであっているかと聞くアリア。

アリアの言葉にその通りと頷いた後、アリアの意見を求めるカモ。

アリアはふむと一つ頷いた後、それに答えた。

「俺もその意見には賛成かな。実際、エヴァンジェリン戦だって、話に聞いた限りじゃ仮契約のおかげで助かったようなもんなんだろう？ だったらカモの意見には賛成だ」

「さっすがだぜ旦那っ！ よく分かってるっ！ てなわけだから兄貴、ささ、いっちょブチューっ」と

「ええっ！？ い、いいよ僕、アスナさんだけで……それに、それを言うならアリアこそだよ。アリア、まだ仮契約してる人いないよね？」

「うっ、そっ、それは……」

「それもそうだなっ！ じゃあ旦那、いっちょブチューっ」と

「やらねえっ！ ！」

「ちっちっ。わかってねーな、兄貴も旦那も」

「「？」「」

「人生の先輩として忠告しとくぜ……若いうちってなあな、何でもいろいろと経験しとくもんだぜ。小さくまとまっちゃまったらおしめえよ」

(そっぴやコイツの方が年上だったな。忘れてた)

カモの話を聞き、ちょっと感心しながらそう思うアリア。

いくらしつかりしてると言ってもまだまだ子供。カモにうまく言いくるめられていることに、この時点では気付いていなかった。

「兄貴のオヤジのサウザンドマスターも、ホントは千人の女と仮契約したからその名がついたって噂も……」

(こいつに少しでも感心した俺が馬鹿だった)

と、すぐに思い直すアリア。カモは少々調子に乗りすぎたようである。

対してネギはといえば、

「ええっ、ホント!？」

「信じるのかよっ!!」

「え?じゃあウソなの!？」

「ったりめえだあっ!!」

「ぐへへえ。分かんねえぜ旦那あ。もしかしたら案外……」

「んなわけあるかあああああああっ!!」

「何や叫んでどないしたん？」

アリアの叫びを聞き、このかが試着室のカーテンを開けて入って来た。まだ着替えの途中だったネギは、うひゃと可愛らしい悲鳴をあ

げた後、急いで服を来た。

「え？い、いやその……」

そしてアリアは、さっき叫んでた理由をどううまく誤魔化すか考えていると、このかがネギの持っていたカードに食い付いた。

(ふう。ラッキーラッキーっと)

カードを食い入るように見ているこのかを見ながら、アリアは安堵の息を吐く。なるべくこのかには、魔法関連の話は遠ざけるよう言われたばかりなのだから、当たり前といえば当たり前だが。

「はぁーん。やっぱりかわええなコレー。ネギ君これウチのも作ってくれへんかなー？」

「えっ」

(むっ、チャンス！)

このかの言葉を聞いたネギは驚き、カモはこれを好奇と思い、アリアは無言で試着室から出ようとしたが、ネギに捕まって失敗に終わる。

その後、カモに後押しされて、仕方なく説明することにするネギ。

「あの一えと……つつ、作れますよこのかさん」

「えっ、ホンマー!?!」

ネギの言葉に、更に食い付くこのか。それを見たアリアは、本格的

に逃げ出したいと感じ始めた。

「で、でもあの条件があつて……僕かアリアと……その、キツ、キツスをしなきゃいけないんですけど……なーんて、ダメですよねそんないきなりキスなんて言つて」

「キス？そんだけ？ええよそれ位なら」

「え……」

「何イツ!？」

このかがあつさりと了承した事に驚く二人。カモはGET!とガッツポーズをしていたが……

「じ、じゃあ俺はこの辺で」

「逃がさないよアリア」

「い、いやこのかだつてネギの方がいいはずだぞ?」

「いやいやそんな事ないはずだよアリア。アリアの方がいいはずだよ」

「いやいやネギの方が……」

「いやいやアリアが……」

「で、ウチはどっちとすればええの?」

「ネギ（アリア）とっ！」「」

（うわぁ、息ピッタリ。やっぱり旦那もまだまだガキだなあ）

「じゃあジャンケンで決めようぜ。それなら文句ないだろ」

「わかった。最初は……」

「ぐーっ！ジャンケン……ポンッ！！」「」

ジャンケンの結果は、ネギはチョキで、アリアは……パーだった。

「ゲッ……」

「やった」

顔をしかめるアリアと対称的に、喜ぶネギ。

そんなネギを睨んでいるアリアの元にこのかは近づき、

「ハイ、アリア君」

「……マジでやんの？」

「大マジだよ」

「い、いやでもやっぱ心の準備が……」

「アカーン アスナだけずるいやん」

「わあああああああああつ!?!」

「チユツ」

そう言って、アリアのほっぺにキスをするこのか。

その瞬間に、仮契約の魔法陣を描く力モ。

そして、光と共に現れたカード。

「ふわぁー、手品みたい、いやーん、ウチのカードやーん」

そのカードを、ドキドキワクワクしながら手にとるこのか。

そこに描かれていたのは、アスナみたいな綺麗なカードでなく、へちやむくれとしたこのかの絵だった。

「あーん、何このへちやむくれーっ!アスナのとちがうやんーっ!」

「や、やっぱりちゃんとキスしなきゃダメなんだー」

「バツ、ネギツ!余計なこと「え、そうなん!?!」ほらあつ!」

ネギが納得したように呟いた言葉に食い付いたこのかを見て、ネギに非難の目を送るアリア。

「じゃアリア君もいつかいー」

「コラコラこのか落ち着いてえっ!」

いつの間にか来ていたアスナの手によって、何とか二度目のキスは免れることが出来た。

その後、カモが仕組んだ事がアスナにばれ、制裁を加えた事は言うまでもない事実だろう。

「いやあ、本当に助かったよ。ありがとうアスナ」

「気にしなくていいわよ。全部このエロオコジョが悪いんだから」  
そう言って、右手で後頭部を摘んで宙吊り状態にされているカモを見せる。

「今度やったらひどいからね」

「もうひどいっス姐さん……」

ボロボロのカモがそう言うが、完全に自業自得なので誰も同情しない。

「あーん。カードウチも欲しいなー」

「……」

無言で顔を反らすアリア。

「なあなあアリア君。今度また二人きりになったら、ちゃんとキスさせてな」

「却下っ!?!」

顔を真っ赤にして叫ぶアリアを、不思議そうな顔をして、前を歩いている二人が振り返る。

「何、どうしたの?」

「んーん。何でもないえー」

「そう?じゃあそろそろ時間だし、行こっか」

「へ?どこに?」

アスナの言葉に不思議そうな顔をするアリアを、三人は似たような笑顔を浮かべて、

「教室よ(だよ)(やよ)」「」

〃〃教室前〃〃

「なあ、何でここに来たんだ？」

「ちよつとノート忘れてな」

「ああ、そついつ事か」

「ごめんな突き合わせて」

「別にいいよそれくらい。何ならもつと頼つてもいいぜ。何せ先生だからな」

「ホンマツ！？なら早速キス……」

「却下あつ！！」

「何騒いでんのよ？いいからさつさと入りなさい」

そう言つて、アリアをドアの前まで引きずるアスナ。

「？何で俺だけ？」

「」「」「いいからいいから」「」「」

「？」



驚いて叫ぶアリアの背中を押して、教室の中心まで持って行く。

「いやあ、何か悪いなあ……」

頬を掻きながら、照れくさそうに言うアリア。

そんな彼を見たクラス一同は、

『かわいいー』

と、彼をもみくちやにしたとか。

それからしばらく質問攻めに合い、何とかそれから逃れたアリア。

「ふう。教師って皆こうなのかなあ」

そう呟きながら、空いている席を探そうと視線を巡らせる。

何かアスナと委員長が取っ組み合いをして、その周りでトトカルチヨを開いていたので、それに混ざろうとすると、後ろから声をかけられた。

「久しぶりだね、アリア君」

「え？タ、タカミチ？」

「うん、タカミチだよ。何年振りかなあ、背も少し伸びたかい？」

「……まあ、少しだけ」

視線を反らしながら言う。タカミチはそれに苦笑した後、近くにあったペットボトルのジュースを紙コップに入れて、アリアに渡す。

「サンキュ」

それを受け取り、一口つけた後、タカミチの隣に座った。

「おや？こんなオジサンより、ネギ君と一緒に生徒の皆のところのほうがいいんじゃないのかい？」

「んな事ないよ。友達なんだからさ。タカミチだぜ？友達になろうって言ったのはさ」

「……そうだったね。じゃあ、一つ聞いていいかな？」

「どぞ」

「そろそろ、僕と手合わせしてみるかい？」

「ん〜、もうちょい待って。後少しでいい勝負できるくらいになるから」

「そうか……もうそんなに強くなったんだね」

そう言って、アリアの頭を少し撫でた後、席を立つ。

「もー行くのか？」

「ああ。ちょっと仕事にね」

そう言って、タカミチは部屋を出た。

アリアはしばらくタカミチが出ていったドアを眺めた後、未だに取っ組み合いをしているアスナ達の周りの連中に混ざり、トトカルチヨに参加した。

その後、ネギにギャンブルは駄目だとアリアだけたっぷり説教を受けたとか。

そして、歓迎会は日が沈むまで続いた。

~~~~おまけ~~~~

「……………どうしよう、これ」

そう呟くアリアの目の前には、輸送されてきたアリアの家具やら何やらいろいろいな生活用品だ。

そして、今の時刻はもう十時になろうとしていた。

「……………片付けは明日にする？」

「……………そうするか」

結局、アリアは乱雑に散らかった部屋の一番奥のベッドに、倒れる用に眠ったのだった。

第八話 いきなり仮契約？（後書き）

いやあ、このかにフラグ立てちゃいましたー（笑）

当初の予定では入れていなかったのですが、この際だから入れる事にします

感想待ってまーす

第九話 とある早朝の出来事（前書き）

今回やっとあの人が登場っ！

誰かはお楽しみにっ！

……………すぐに分かるけどネ

第九話 とある早朝の出来事

三人称 Side

コンコン

朝。まだ日も昇っていないような時間に、扉を二回ノックする無機質な音が、生活用品が乱雑した、まるで引越した初日に荷物をそのまま放置したかのような部屋に響き渡る。

ただ唯一散らかっていない、入口のドアから見て左端にあるベッドの上では、昨日からこの部屋の主となった人間が寝ていた。

輝くような線の細い金髪を肩まで伸ばし、今は閉じられていて分からないが、その瞳は澄んだ青色をしていて、中性的で整った顔立ちは、将来どう育っても美青年になること間違いなしだと誰もが思うだろう。ただ、唯一残念なことは、背が歳と比べて低いことくらいだろう。そんな少年、アリア・フローレンスは、可愛らしい寝息をたてて寝ていた。

「くー」

どうやらノックをされた程度では起きそうにないくらい、眠りは深いようだ。

日本に来てからいろいろあったので、疲れているのだろう。

ネギ同様、いくらしっかりしようと、十歳の少年ということに変わりはない。眠りが深くなるのも、無理はないだろう。

コンコン

しかし、そんなことはお構い無しに、ノックの音が続く。

「くー」

しかし、起きないアリア。

コンコン

またノック。

「くー」

起きない。

コンコン

「くー」

コンコン

「だああああああああああああっ！！うるっせええええええええええええっ！！」あまりにしつこいノックに、叫びながら飛び起きるアリア。

アリアは、そのままドアの前まで行き、ドアを右足で蹴り開けた。

「誰じゃあああああああああっ！！こんな朝っぱらからあっ！！」

そう叫び、ドアの前にいる人物を見る。

「朝早くからすみません、アリア先生」

ドアの前にいた人物は、丁寧に頭を下げながら言う。そんな相手の物腰に、アリアは二の句が告げなくなってしまう。

そして、アリアは目の前にいる人物に見覚えがあることに気が付く。

「え、えっと、お前って確か……」

その言葉に顔をあげて、アリアの言葉を肯定するように口を開く。

「はい。出席番号十番の、絡繰茶々丸です。申し訳ありませんが、一緒に来ていただけませんか？」

「へ？どこに？」

「私の、マスターのところまでです」

エヴァンジェリン邸前。

そこで、アリアは楽しそうにしながら、エヴァの家を見ている。

「へえ。ここに住んでるのかあ」

そう呟くアリアの今の格好は、黒いＴシャツの上に魔法使いのローブを着こんで、背中には杖、左手には指輪と、何時でも戦闘できるように装備していた。

「では、どうぞ」

茶々丸が、ドアを開けながら、アリアに先に入るよう促す。

「お邪魔しま〜すつと」

そう言いながら、エヴァの家に躊躇いなく入り、周りを見回す。

「ふうん。割と普通の部屋だな」

「どんな部屋を想像してたんだ貴様は」

アリアが家の感想を呟くと、呆れたような声が、アリアの前方から聞こえた。

アリアが声のほうを向くと、金髪のアリアと同年くらいの少女がいた。

「貴様がアリア・フローレンスか」

「そうだけど、何か用？闇の福音さん？」

「ふっ、ぼーやと違って随分と威勢がいいな」

「ぼーや？」

「ネギのぼーやだよ。それより、貴様に幾つか聞きたい事がある」

「因みに拒否権は？」

「ない」

エヴァの言葉を聞き、ドアの方を見ると、既に茶々丸がスタンバイしていた。

「準備のいいことで」

それにアリアは、慌てるでもなく、ただ普通に淡白にそう言つと、エヴァに話すように促す。

「本当に威勢がいいな。気に入ったよアリア」

「そりゃどうも」

肩をすくめて言つアリアに、面白そうに顔を歪めたエヴァが、口を開いた。

「お前は、レインの息子で間違いないな？」

その言葉に、一瞬だけ顔をしかめるアリア。しかし、エヴァがそのかすかなアリアの変化を見逃すはずもなく、

「成る程。やはりな」

と、あっさりとばれた。

「……父さんと会った事あんの？」

「十五年ほど前に一度だけ。ナギ……ぼーやの父親と一緒にな」

「……そっか」

エヴァの言葉を聞き、目を閉じてただ一言そう言うアリア。

「……で、他には？」

「ふむ、切り換えも早いな。ますます気に入った」

アリアの言葉に、更に面白そうに言うエヴァ。

それにアリアは、

「俺も、あんたの事気に入ったよ」

と、顔を歪めて言う。

「ふっ、そうかそっか。まあ、この話は置いておいて、次に聞きたいことだ。聞くまでもないとは思うが、お前とぼーや、今の時点でどちらが上だ？」

「俺」

あっさりとそう言うアリア。

それにエヴァは「やはりな」と呟いて立ち上がり、いきなりアリアに残像を残す程のスピードで近づき、アリアの顎に向けて左手で掌底を放つて来た。

「っと」

それをアリアは顔を右に傾けて避け、掌底を繰り出したエヴァの首を左手で掴み、右手でエヴァの服の襟元を掴み、そのままエヴァの力を利用して投げた。

「おっ」

エヴァはそのアリアの動きに感心したような声をあげた後、空中で二回回転して着地する。

「成る程……確かにこれは、ぼーやとは比べものにならないな」

そう言つて顔をあげたエヴァの目の先には、寸止めされたアリアの拳があった。

「で？今のは実力試しと見ていいのか？」

拳を引きながら、アリアがエヴァに聞く。

「ああ。まあ、まだまだだが、その歳にしては上出来だ」

「そりゃどつとも」

そう言って、ドアに向かうアリア。

「何だ？もう行くのか？」

「ああ。そろそろ戻って、今日の準備をしないといけないんでね」

「そうか。まあ、せいぜい頑張れ」

「ちゃんと授業出るよ」

「誰が出るか」

・

・

・

～～アリアの部屋～～

「アリアッ！！早くしないと遅刻だよっ！！」

「わーってるよっ！！もうちょいで準備出来るから待ってるっ！！」

〜おまけ〜

「よっしゃ間に合ったあああああああああああ
！！！」

校舎前でそう叫ぶアリアを、屋上から二つの影が見ていた。

「……………何をやってるんだアイツは？」

「恐らく、遅刻しそうになったのを回避出来たので、喜びのあまり叫んだのかと」

「……………はあ。見込み違いだったか？」

結局、アリアはエヴァに呆れられてしまったのだった。

第九話 とある早朝の出来事（後書き）

はいっ、というわけでエヴァさん登場っ！！

エヴァさんってこんな感じがいいですかね？

感想待ってますっ！！

第十話 秘密のデート？（前書き）

タイトルからわかると思いますが……とりあえずござっ！

第十話 秘密のデート？

三人称Side

アリアが教師になってから早一週間。

教職業にも段々と慣れてきて、クラスのものとの交流も円満になってきたアリアの部屋では、三人の男女がとある会議を行っていた。

一人は、肩まで伸びた輝くような金髪を首筋の部分で一つにくくった、澄んだ青い瞳をもつ、この部屋の主でもあるアリア。

もう一人は、赤い髪をアリアと同じように一つにくくった、アリアより少し背の高い、アリアの幼なじみ兼同僚であるネギ。

最後の一人は、黒い髪を尻の辺りまで伸び、揃えられていて、大和撫子という言葉が似合っている、彼らの生徒でもあるこのか。

この三人は、部屋に一つある円形のテーブルを囲んで、とあることを話し合っていた。

「……じゃあ、話は決まったな。くれぐれも、ばれないように行動するぞ」

「ラジャー」

ニヤリと笑って、アリアが言った言葉に、二人も笑顔でそれに敬礼する。

ここに来てからはじめてのエリアの休日は、奇妙な形で始まったのだった。

時と場所は変わり、昼頃。明後日に控える修学旅行に向けて、自由行動日に着る服を探しに来ていたチア部の三人は、賑わう街を歩きながら、楽しそうに話をしていた。

「ねーねー。これなんか奈良っぽくない？」

先程買ったピアスを見せながら、桜子が美砂に笑顔で聞く。どうやら久しぶりに麻帆良の外に出て、テンションがあがっているらしい。

いや、それは他の二人にもいえることだろう。

「どこがよ」

桜子に聞かれたことに、先程円の制止を振り切って買った、ゴーヤクレープを食べながら答える美砂。

「カラオケ安いよ〜。どう？」

「すみません。今日は用事があるんですー」

先頭を歩いていた円に、カラオケの割引チケットはいらないかと聞いてくるバイトの人。円はそれを用事があるからと断る。

さすがこの三人の中で一番しっかりしているだけのことはある。

そんな風に久々の街を堪能しながらしばらく歩いていると、美砂がいきなり立ち止まって、ある一点を見つめていた。

「どしたの柿崎」

円がそう言いながら、美砂の見ているであろう一点に、視線を向ける。

そこには、楽しそうに歩きながら話している、ネギとこのかの姿があった。

「ん〜」

場所は変わって、チア部の三人がネギ達を尾行している頃、とある

部屋。

そこでは、一人の少年が、木彫り職人がよく使う、片手で持てるくらいの大サイズの、作業で使われる木を持っていて、色々な角度から今彫っているものを見ていた。

「うーん。やっぱり色も塗ったほうがいいな」

そう呟いた後、うんと一つ頷いて、立ち上がった。

「となれば、まずは材料だな。美術室から借りてくるか」

そして少年は、部屋を飛び出したのだった。

場所は戻って街中。

このかとネギが二人で一緒に楽しそうに買い物をしているのを、チア部三人衆が一人、柿崎美砂が当局アスナに電話していた。

「はい。ん、何？柿崎？何よー。せつかくの休日なのにー」

まだ寝間着姿で携帯を持ったアスナが、寝呆けた声で電話をかけてきた美砂に対して愚痴る。

『休日の昼間っから寝てんじゃないわよ！大変！とにかく大変なのよ！コレ見て！』

「？」

電話から聞こえる慌てた美砂の声に不思議そうな顔をしながら、送られてきた画像を見る。

そこには、このかとネギが楽しそうに服を選んでる画像が映し出されていた。

『どう！？これって秘密のデートじゃない！？』

『この二人どうなってんのよ！？アスナ何か知ってんじゃないの！？』

『アスナ〜。ネギ君取られちゃったね〜』

チア部三人が、はしゃいだ声でアスナにそうまくし立てる。

基本、女子中に通う彼女達にはこの手の話題はないので、仕方ないだろう。

そんな三人に対してアスナは、

「んなバカなことあるわけないでしょうが……」

と馬鹿馬鹿しいとばかりに呟き、そのまま再び寝た。

電話からは二度寝するなという声が聞こえて来たが、そんな声など無視して、アスナは静かに寝息をたてたのだった。

「へへ。ラッキー」

美術室からの帰り道、そう呟いた少年の腕には、両手で抱えるくらいの大きさの、ヴェネット用の木が抱えられていた。彼は他にも、色を塗る道具などを持っていて、その姿はまるで職人のようだった。

「どうせなからやっぱ凝ったもの作らないとね」

そう言った彼の表情はどこか楽しそうで、その顔はまるでオモチャを与えられた子供でもあった。

「さあて、夕方までには終わらせるか」

そう呟き、作業を開始した少年。その手さばきは、職人が顔負けするほどのスピードで、とても繊細な動きをしていた。

またまた場所は戻って街中。

あれから色々いい雰囲気になったネギ達を見ては、騒いでいるチア部三人。彼女達は周りの視線とかを気にしないのだろうか？

しかも先程、ネギ達の事をアスナに報告した際、委員長にその事がばれ、委員長に何としても二人の恋を阻止しろと脅……厳命されたのだ。

なので、『二人の恋を応援するのよ チアリーダーの名にかけて！』から、『チアリーダーの名にかけて！！いいんちよの私利私欲を応援よ』に変更された。

いやはや、権力乱用とは正にこの事ではないだろうか？

とまあ、そんなわけで、チア部の三人は、先程から変装をして、ネギ達を買おうとしたものをことごとく横取りしたのだった。

その経費は勿論委員長持ちなのだが……

ネギ達は、どうやら予め買ってあったものがあつたらしく、特に気にする様子も見えなかった。

そして、チア部三人にネギ達の邪魔を厳命した当人はいえ、当

局と一緒にネギ達のもとに向かっていた。

当局ことアスナは、嫌々といった感じだが、カモにカード目当てで連れ出したんじゃないかと言われ、このかが占いグッズのことになると目の色が変わることを思い出し、もしかしたらカモの言うこともあり得るんじゃないかと懸念していた。

まあ、実際は全く違うのだが……

「いやー、でも今日は東京も見れたし楽しかったです」

今日一日のことを思い出しながら、嬉しそうに言うネギ。

「ふふつ。ネギ君大丈夫？フラフラしとるえ？座って休みい」

隣を歩くこのかが、初めて日本の都会を回ったネギが少し疲れていると分かり、休むように促す。

「は、はいー」

それに頷いた後、階段に座るネギ。このかも、その隣に腰掛ける。すると、歩き疲れたネギが、コクツ、コクツと頭を揺らし、そのまま眠ってしまった。

そしてそのままこのかのほうに倒れ、このかがネギを膝枕するといふ形になった。

「ああーっ！膝枕だーっ！！」

「くう〜っ、うらやましいわねこのかの奴〜っ！！」

隠れて見ていたチア三人組は、それを見て騒ぎ立てる。

そんな事に気付いていないこのかは、ネギの寝顔を見ながら、一人呟く。

「ネギ君、寝顔はやっぱりまだまだ子供やなあ。新学期からこっち少しは凜々しゅうなったと思うてたけど……ちょっと今日は無理させてしもたかな？」

そう呟いた後、右の人差し指をクルクルと回転させて、

「疲れよ飛んでけー」

と、冗談のように言った。

瞬間、ほんの一瞬、このかの指が光ったように見えた。

だが、その事に当人は全く気付いてなく、思い出したかのように手

をポンと叩いて、呟いた。

「あ、そやカード！確かネギ君にキスしても出てくるんやった！」

実際は、魔法陣の上でないと意味がないのだが、そんな事を知らないこのかは、ネギに顔を近付ける。

それをチア三人が、慌てて止めようと立ち上がったところで、

「やっぱやーめた。いくら子供でも、寝てるとこの唇奪うのはアカンな」

と、あっさり顔を元の位置に戻した。

そのこのかの行動に思わずずっとこけ、このかに姿を見られてしまった三人。

更には、

「コラーツ！お待ちなさいなーッ！！」

「いいんちよにアスナまで？」

委員長まで来てしまったのだ。

「なんやー、みんなそろってこんなところぞー？」

「ぶっ」

このかの問いかけなど無視して、このかがネギを膝枕しているのを

見て吹き出してしまふ委員長。

「こ、こここのかさ。ネギ先生を膝枕など……私がしたいですわっ……」

「問題発言だろそれ……」

「……え？」

いきなり現れた声に、寝ているネギとこのか以外の人物が、思わず間抜けな声をあげる。

だが、その人物はそんな彼女達を無視して、まだ寝ているネギを膝枕しているこのかのところまで歩いていく。

「で、どういう状況なの？これ」

「それがウチにもよお分からんのよお。そういうアリア君は何でここに？」

いきなりここに現れた人物は、アリアだった。

彼の腕には、プレゼント用の包装とリボンをした箱が抱えられていた。

「いや、完成したら何だかいてもたってもいられなくてさ。お前らに合流しようと思ってこっちに来て走り回ってようやく見つけたと思ったら……」

「この状況やった？」

「そゆこと。てか、まさかと思うけどばれたのか？」

「んー、どうもそうみたいやなあ」

「んー……」

委員長達は蚊帳の外で二人が話していると、ネギが目を覚ました。

「あ、あれ？皆さん……え？アリア？アスナさんまで！？なんでこんな所に……」

起きた途端、先程までいなかった人物が何人もいたので、ネギが戸惑うのも無理はない。

そんなネギに、このかが苦笑しながら、

「ネギ君、どうやらばれてたみたい」

と言い、それを聞いたネギは、

「ええーっ！？そんなどうしよう……驚かそうと思ってたのに……」

驚きながら言うネギを見て、委員長達に動揺が走る。

「ば、ばれてたって……」

「じゃあやつぱあんた達……」

と、そこまで言ったところで、アリアが違和感を覚える。

(あれ？本当にばれてんのか？それにしてもアスナの反応がおかしいような……まさかっ!!！)

アリアがアスナ達の勘違いによろやく気が付いたが、今更もう誤魔化しようもないので、彼はもうなるようになれと思った。

そんな彼の苦悩を知ってか知らずか、いや、絶対に知らずに、このか達はネタばらしをすることを話しあった。

「うーん、こうなったらしゃーないな」

「あーうー、そ、そうですね。一日早いけど……えーと……」

「ネギ、頑張れ」

「うっ、うん……ハイ、アスナさん。4月21日の誕生日おめでとつございます」

そう言っつて、ネギが手のひらサイズのプレゼント箱を差し出した。

「……………へ？」

それに、呆けたような声をあげるアスナ。委員長やチア三人も似たような顔をしていた。

それを見たアリアは、やっぱりなと思ったが、今そんな顔をするのは無粋だと思い、ただ静かに見守っておくことにする。

「今日は朝からずっとこのかさんとこのプレゼントを選んでたんで

す

「アスナの好きな曲のオルゴール……」

「今日は20日だから、明日渡す予定だったんですけど……」

ネギ達の言葉を聞き、思い出したような顔になる委員長。

チア三人は、それに手をポンと打ち、

「ああーっ、そうそう」

「私達もプレゼントあるよアスナーッ」

と、今までの行動をなかったことにすること半分で、アスナに委員長から後で貰う予定の経費で、先程ネギ達の邪魔をして買ったものを渡す。

「俺からはこれ」

そう言っつて、アリアも手に持っていたプレゼント箱を渡す。

「これは？」

「ヴェイネット。まあ、小型のジオラマだよ」

アスナの質問に、頬を書いて答える。

「これ、あんたが作ったの？」

アスナが少し驚いたように聞く。

「そうだよ。昔から工作とか好きでね。ちょっとしたものなら作れるんだ」

今アスナに渡したジオラマを、アリアは僅か三時間ばかりで作ったのだが……

それでも、出来は店に商品として出せるほどよく出来ている。

そして、全てのプレゼントを受け取ったアスナは、涙が少し滲んだ瞳で、感動したように、皆にお礼の言葉を言った。

「あ……ありがとう。ネギ、このか、みんな……こないきなり……わ、私……私、嬉しいよっ」

それを、アリア達は優しく見守っていた。

一部を除いて。

「ちょっとあなた方」

逃げようとしていたチア三人組を呼び止める委員長。

それにチア三人組は、振り返って、

「いや〜、ごめんないんちょ。勘違い……だったみたいね」

と、言った。

その後、委員長が怒鳴ってきたのをお互い様だと主張した後、そのままカラオケでアスナの誕生日会をやるうと主張し、皆で仲良く楽しんだとさ。

〜おまけ〜

「じつ、これは……」

誕生日会も終わり、部屋に戻り、アリアから貰ったプレゼント箱を開けたアスナは、戦慄を覚えていた。

アスナの両隣にいるネギとこのかも、驚いていた。

アリアの作ったヴェネットは……

タカミチとアスナが抱き合っているといったものだった。

箱には、アリアからの手紙があり、手紙にはこんな事が書いてあった。

『ネギから、アスナがタカミチの事が好きだと聞いたので、これを作った。よければ感想を叫んで欲しい』

それを見たアスナは、

「最っ高よオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツ!!!」

と、天高く叫んだのだった。

その叫びは、アリアの部屋まで届き、それを聞いたアリアは、

「お、気に入ったみたいだな。良かった良かった」

と呟き、ミルクティーを一口すすったのだった。

第十話 秘密のデート？（後書き）

いやあ、アリアに意外な特技があったということですが……どうでしょう？

感想待ってまーす。

第十一話 修学旅行の始まり(前書き)

いよいよ修学旅行編っ!!

第十一話 修学旅行の始まり

三人称 side

修学旅行当日。

集合場所に、教員は早目に行かないといけなく、ネギはその為に普段より早目に目覚まし時計をかけていた。

いや、そもそも彼は修学旅行があまりにも楽しみなので、興奮して目覚ましを鳴るよりはるか前に起きていたのだが。

対して、同じ教員で、早目に集合場所に行かなくてはいけなく、ネギと同じでこういう行事などの時に、興奮して眠れないなどが最も多い年齢であろう、アリアはというと、

「くー」

寝ていた。

その眠りっぷりはといえば、それはもう深く深く、完璧なまでの熟睡だった。

彼は、元々朝はあまり得意ではないので、仕方ないのかもしれないが……

ぱんっ

「アリアー！起きてるーっ!?!」

それで許される程教職が甘いはずもなく、薄暗いアリアの部屋に、元気で明るいネギの声が響き渡る。

「……………ん〜?」

ネギの声で、煩わしそうな声をあげながら起きるアリア。

「あ〜ん?ネギ〜?どうしたんだよ〜こんな朝っぱらから〜」

そう言いながら、ベッドから体を起こすアリア。どうやらまだ寝呆けているようだ。

「ほらほらっ!寝呆けてないで起きるよっ!今日は修学旅行なんだからっ!」

「修学旅行?……………あああああああああああああああ
っ!……………」

ネギの修学旅行という言葉聞いて数秒後、突然叫び声をあげるアリア。

「わわっ!〜?ど、どうしたのいきなり?」

「……………準備……………忘れてた……………」

アリア先生爆弾発言投下。

それを聞いたネギは、数秒ポカンという顔をした後、

「いや何っーか、本当に呆れるくらいに騒がしいクラスだな……」

点呼の途中に、アリアが隣にいるネギにそう話し掛ける。

それにネギも、そうだねーと苦笑いしながら頷いていた。

それも無理はないだろう。

予約のとっている車両とは別の車両に行こうとしている生徒や肉まんを一般人や他の生徒に売る生徒、点呼の途中のネギを自家用グリーン車に連れ込もうとする生徒や、それをカメラに納める生徒、肉まんを食べ過ぎて新幹線に乗る前から酔っている生徒。

騒がしいと思うのも無理はないだろう。

「えっと、後は六班だけか？」

「うん、そうだよ」

「……………あれ？確か六班って……………」

そこまでで、アリアの思考は打ち切られた。

生徒の一人が、話し掛けてきたからだ。

「ん？えっと……………出席番号15番の桜咲と、31番のザジか。二人しかいないのか？他の奴らは？」

「ええ。実は私が六班の班長だったのですが……エヴァンジェリンさん、他二名が欠席したので、六班はザジさんと私の二人になったんです」

「……あー、成る程」

先程の疑問が解けたアリア。

（そついや六班にはエヴァンジェリンがいたんだつたなあ。完つ壁に忘れてたわ）

「私達はどうすればいいんでしょうか？」

「……ネギ、任せた」

面倒事をあっさりネギに押し付けるアリア。

そんな彼の態度にもはや悟ったような顔で頷くネギ。その顔からははいはいわかつてるよオーラが出ていた。

「他の班に入れてもらいましょう。じゃあ、アスナさんは桜咲さんを、いいんちよさんはザジさんをお願いできますか？」

「はいはい」

「構いませんわネギ先生」

二人はあっさりと了承してくれて、これで問題なく出発できると思つたアリアは、何やら刹那とこのかとの関係が、ギクシャクしている

のを見た。

(「?いや、どっちかというところ、桜咲がこのかを無理に遠ざけてるよ
うな……」)

そこまで考えたところで、アリアは思考を切り替えた。

(「……今考えたところで、事情を知らない俺に出来ることなんてないな。今はそれよりも、親書の奪取の阻止を考えよう」)

そう思いながら、胸にわだかまりのようなものを抱えたまま、新幹線は出発した。

「へえ。こういうゲームか。じゃあ行くぜっ！俺のターン、ドロ―ッ―じゃあまずこの呪文を……」

「むむっ、そう来るかあ。なら私のターン、ドロ―ッ―私はこのカードを……」

「げえっ、うわあ……なら俺はこのカードでっ……」

「あれ？アリア何やってるの？」

「ん？カードゲーム」

「仕事してよっ！」

「待て！この勝負だけっ！この勝負だけだからっ！」

「そーそー。このゲームだけこのゲームだけー。何なら、ネギ君もやる？」

「僕も教師なんですけど……」

……新幹線の中は、それはそれは盛り上がっていた。

生徒の様子を見て回っていたアリアすら巻き込んで盛り上がっていた。

彼は今、自分の生徒である椎名桜子と、テーブルを二つ挟んで対峙していた。

テーブルには、最近流行っている、魔法で戦うカードゲームのカードが。

そんなアリアを見つけたネギが、仕事をするように注意するが、せめて一勝負だけやらせてくれとそれを振り切るアリア。

そのアリアに便乗し、ネギもやらないかと誘う桜子に、自分も教師であることを苦笑しながらアピールするネギ。

そんなネギは、アリアに本当に一回だけだよ、と言い残して去って行った。

「ようし、お許しも貰ったことで、決めるぜゆーなっ！」

「おうよっ！『炎の呪文』カードでパルに五点の攻撃！」

「えーっ！やられた死んだーっ！」

「夕映に言われた通りに『恐怖のカエル地獄』発動してたおかげだな。サンキュー！」

アリアが、後ろからアリアの椅子にもたれかかるように見ていた夕映に、アドバイスをしてくれたお礼を言う。

「いえいえ。初心者ですので、これくらいは」

「うう。恨むからね夕映」

そう言いながら、自分のバツクを漁るハルナ。

「くっそ。につくきカエルめ」

「ハイハイ。罰金チヨコ五個ね」

「うう……」

そして、取り出した箱を開けた。

箱の中には……カエルがいた。

「キ、キャアアアアアアアアッ!？」

「カ、カエル~~~~~ツ!？」

「っ!？」

(これってもしかして……考えんのは後だっ!)

アリアは、素早くカードを片付け、借りていた夕映に返した後、急いでカエルを捕まえていく。

「アリアッ!」

悲鳴を聞いて駆け付けて来たネギが、アリアのもとまで行く。

「これって一体……」

「話は後だ。それよりさっさと捕まえんぞ」

「う、うん……」

その後、生徒の活躍もあり、何とかカエル百八匹全てを捕まえることに成功した。

(兄貴、旦那、間違いないぜ!! 関西呪術協会の仕業だ!)

(やっぱりか……)

(でもどうしてカエルなんだろ?)

(うーん、ただのイヤガラセか、それともこの騒ぎに乗じて何かを狙っているのか……)

「ハッ……」

「ん?どうした?」

アリアがそう聞いたが、それにネギは答えず、慌てて懐を探り出すネギ。

「あ、あれっ!?!ないっ!学園長先生から預かった親書が……」

「なに!?!」

ネギの爆弾発言に、思わずハモって叫ぶアリアとカモ。

「ほっ、何だ下のポケットにあった」

「お、お前なあ……」

「び、びっくりさせんなよ兄貴」

三人揃って、親書があったことに安堵した瞬間、ネギが手に持っていた親書が、つばめのような鳥に盗まれた。

「ちっ」

それに急いで立ち上がり、追い掛けるアリア。

ネギもそれで我に返り、慌ててアリアを追い掛ける。

先を走るアリアは、つばめの速さに、内心で舌打ちした。

（普通に走ってたんじゃないや追いつけねえ。かと言って、こんな一般人のいる狭い通路で瞬動や魔力の身体強化なんか使えないしなあ……窓とかから逃げられたらシャレにならないぞ……さて、どうしたもんかな。せめて、術者が新幹線の中にいればいいんだけど……いやあない。魔法使うか）

そう思い、懐から、魔法の発動体となる指輪を取り出し、それをはめる。

後ろから追いついたネギも、考えは同じようで、予備の杖を出し、呪文を唱えようとしていた。

「ラス・テル・マ・スキル・マジスキル……」

だが、呪文はそこまでで止まった。

前から、弁当を売っていたカートが扉が開いた瞬間来て、それにぶつかったからだ。

「先に行くぞっ！」

倒れたネギにそう言いながら、つばめの方に走る。

（最後尾の車両だから人も少ない。瞬動を使うか）

そう思い、足に魔力をためた瞬間、それは起こった。

アリアの追い掛けていたつばめが、真っ二つに切り裂かれたのだ。

(今は……)

そう思ったアリアの目の前には、彼の生徒であり、つばめを真っ二つにした張本人でもある、桜咲刹那がいた。

「桜咲……お前「待てえーっ!!」タイミング悪いなオイ」

後ろから叫びながらやってきたネギを見て、思わずため息をつくアリア。

「アリア先生……ネギ先生……」

「さ、桜咲さん……?」

ネギが戸惑っていると、刹那は先程つばめの落とした親書を、アリアに渡してきた。

「これ、落とし物です……」

「……ああ。サンキュ」

そう言って、桜咲から親書を受け取るアリア。

「あーっ、それは大切な親書っ!あ、ありがとうございます!助かりました!」

「これは先生達のものですか？」

「ああ、そうだけど？」

「気をつけた方がいいですね、先生。……特に、向こうに着いてからはね。……それでは」

そう言つて、刹那はネギ達に背を向け、歩き始めた。

「あ、どうもご親切に」

そんな刹那に、素直にお礼を言つネギ。

「オ、オイオイ兄貴！何がどうもだよ！あの女メツチャ怪しいじゃねーか！気を付けるよ！」

「え？どーゆーこと？」

「……それ、見てみる」

アリアが、先程刹那が斬つたつばめを指差す。

「こ、これは……」

「さっきの式紙だ」

「そ、そんな……」

「……」

アリアは、この時ネギとカモに、『刹那が式紙を真つ二つにした』

ということを言わなかった。まだ、情報が足りなさすぎる上、下手な情報は、余計な混乱を生むだけだと判断したからだ。

（さっきのこのかに対する対応……式紙を真つ二つにしたあの剣技……学園長の孫であるこのか……魔法に関わらないように決めてる方針……関西呪術協会……親書……）

次々に、今回のことに関わっていると思う単語をあげていくアリア。

（……こりゃあ、今回は親書届けてハイ終了ってわけには、いかなさそうだな……）

アリア達の修学旅行は、まだまだ始まったばかりだ。

第十一話 修学旅行の始まり（後書き）

感想待ってますっ！

第十二話 スパイ？（前書き）

いやあ、原作の筋書きにそるのって、ぶっちゃけ楽ですねー。

もちろんオリジナル要素もいれるつもりですが……

それでは第十二話どうぞっ！

第十二話 スパイ？

三人称 side

京都に着いた3-A一行は、清水寺に着いた後、集合写真をとり、今は全員自由に清水寺を見て回っていた。

「京都おーっ！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰かつ！飛び降りれっ！」

「では拙者が……」

「おやめなさいなっ！」

神聖かどうかはよくわからないが、寺でこれだけ騒ぐのはどうだろうかと思つてくらの騒ぎっぷりを見せてくれる一行（暴走を止めるのに必死な奴や、呆れてる奴もいるが）。まあ、彼女らがそんなことで騒ぐのを止めれば、明日世界が滅びても過言ではないと言っていいほど異常なことであろうが。

「実際に飛び降りる人なんていないよねー、ちづ姉」

そう言つて、隣にいる千鶴に話し掛けた夏美は、アリアが今にも清水寺から飛び降りようとしている姿を見た。

「えええええええっ！？何やってんのおおおおおおおおっ！

りにはいない。

いや、性格には周りにいるのがぼけ要員だからなので、突っ込もうとする奴がいないのだ。

「……そろそろ戻っても大丈夫かな？」

先程、もう絶対に清水の舞台に近づくなと言われたが、流石にそろそろ戻っても大丈夫だろうと判断し、そそくさと戻ってみるアリア。やはり、また近づくなと言われるかもしれないと思うので、こっそり景色を堪能しようという魂胆なようだ。

「その石段を下るとあそこ、有名な「音羽の滝」に出ます。あの三筋の水は、飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか……」

柱のかけに隠れながら移動していると、先程もやっていた夕映の寺口座が聞こえてきた。

流石はハルナから神社仏閣仏像マニアと言われるだけあって、詳しく語っていた。

（流石だな夕映。んじゃ、俺はこっからの景色でも堪能しますか）

そう思いながら、景色を見ようと手すりの方に行こうとしたら、誰かがアリアの肩を叩いた。

「ん？誰……だ……」

「どこに行こうとしてるかな？アリア君」

「い、いやゆるなこれはだな……」

「連行ーっ!」

『アイアイサーッ!』

「どっから湧いたお前らわーっ!?!」

そのまま抵抗虚しく連行されるアリアだった。

「へー、目をつむってこの石からあの石へたどり着ければ、恋が成就するんですかあ」

「うわっ、遠いな……」

「ちょっとこれ二十メートル位はない!?!」

アリア達が今いるのは、恋占いの石のある境内。

そこにある石を見て、早速それに挑戦しようとな乗りに出るものがい

た。

「で、では早速クラス委員長の私から……」

「あーずるい。私もいくつ！」

「わ、私も……」

委員長、まき絵、のどかの三人である。

だが、委員長とまき絵はともかく、何故かのどかは開始直後からいきなり右に曲がってしまった。

そんな感じで、三人の様子を見ていた時、カモが刹那がないことに気が付いた。

「あれ？そーいえば……」

「ホントだ。いねえな……」

周りを見回しながら言う二人。

すると突然、フラフラと歩いて石に向かっていた委員長が、石に向かって真っ直ぐに走りだした。

「ずるーい！いいんちよ目開けてるでしょっ！」

「ホホホ、まさか！これで私と某N先生との恋は見事成就ですわ！」
目を開けながら委員長を追うまき絵はともかく、本当に目をつむっ

て一直線に走る委員長。

このまま石にたどり着くと思った矢先、二人の姿がいきなり消えた。おかしいと思ったギャラリーが近づくと、二人は底に大量のカエルがいる落とし穴へと落ちていたのだった。

急いで二人を引き上げている途中、刹那が自分たちを見ていることに気が付いたネギとアリア。

(うーん、やっぱり怪しいぜ。旦那もそう思うだろ?)

石段を降りるネギの肩に乗っているカモが、小声でアリアにそう言う。

対するアリアは、

「うーん、どうだろな?」

と、曖昧に答えるだけだった。

カモは絶対だと主張したらしいが……

そんな彼らの前では、「音羽の滝」の前ではしゃいでいた。

「ほら、せんせ。魔法まほうの仕事の前に、教師あしちの仕事したほうがいいんじゃない?」

「それはアリア“先生”もだよ?」

「へいへい……っつて、アレ？」

アリアは、目の前の光景を、今一理解出来ていないようだった。

それはネギも一緒のようで、あんどりと口を開けて啞然としている。

「……なんか、みんな酔いつぶれてしまったようですが……」

「ええーっ!?!」

「何で公共の水で酔いつぶれんだよっ!?!」

そう叫んだ後、急いで水が流れてくる屋根の上に飛び移るネギとアリア。

「こ、これは……」

「お、お酒!?! 一体誰が……」

そこには、水の流れる場所に、酒が流れるようにホースを酒の入ったおけに繋がれているものがあつた。

取り敢えずそれをどうにかした後、急いで下に戻り、見回りに来ていた新田先生と瀬流彦先生を誤魔化したとか。

その後更にしずな先生まで来て、無理矢理バスに押し込むという荒技で、何とか誤魔化すことに成功した。

「ひゃく、すっげー」

「これが露天風呂って言うんだってさ」

旅館で、アスナが協力してくれることになり、多少の情報が手に入った後、二人は教員は早めにお風呂を済ませるようしずなに言われ、今に至る。

（にしても、桜咲刹那……このかの幼なじみか。これはやっぱり、何かあるなあ）

風呂につかり、情緒ある日本の露天風呂の風景をネギやカモと楽しみながら、思考にふけるアリア。

「風が流れてて気持ちいいーね」

「おうよ。これで桜咲刹那の件が無ければなあ。あいつ、いつも木刀みたいの持ってるし、魔法使いの兄貴や旦那じゃ、呪文唱える前に負けちまうよ」

（言ってくれるなあ、カモ。まあ、こいつらの前で戦ったことなんてないはずだから、無理もないか）

アリアは、この二人の前で、実践をしたことは、実はなかったりする。いや、正確には、そんな機会事態がなかったのだ。魔法の訓練といっても、たかが知れているので、ネギ達はアリアの力のことを、

ほとんど知らない。

「うーん、魔法使いに剣士は天敵だよ」

その剣士の対処法も、アリアは万全だったりするので、全く問題はないのだが。

(うーん、今回は戦闘避けられそうにないし、そろそろこいつらに話そうかな)

そう思い、口を開こうとしたら、誰かが入ってくる音が聞こえてきた。

それは、桜咲刹那だった。

(なななんで入り口は男女別なのに中はおんなじー!?)

(混合ってんだよ兄貴!)

(へー、日本にはそんな風習があるんだ)

等々と、会話をしていると、刹那がおけにお湯をつぎ、体にかけてはじめた。

(……ハー、背中がちっちゃいけど、綺麗な人だねー)

(こーゆーのを大和撫子ってんだぜー)

(……どーでもいいけど、逃げなくていいのか?)

(ハッ)

(な、何見とれてんだよっ！ズラかるぜっ！)

(お前もだろっが……)

そんなわけで、そそくさと退散する二人と一匹。

(パートナーもなしの接近戦じゃ勝ち目はねえ！)

(う、うん……)

(急げ急げ)

若干一名、余裕な奴がいたりした。

そんな彼らの耳に、刹那の独り言が聞こえてきた。

「困ったな……魔法使いであるネギ先生達なら、何とかしてくれる
と思っただが……」

(え、ええ……っ！？な、何故僕が魔法使いだと？……そ、そんな。
やっぱり刹那さんはスパイ？)

ネギは刹那がスパイだったという事実にはショックを受けているよう
だったが、アリアは違った。

(？俺達に何かを期待してた？一体何を……)

彼がそこまで考えたところで、ネギが杖を強く握った途端、刹那が

素早く動いた。

ガシャンッ

まずは指で小石を弾き、明かりである電球を割り、闇を作り、隠してあった身の丈ほどもある長刀を構え、

「誰だっ!?!」

と叫び、敵を威圧した。

(しまった、見つかった!?)

対する敵であるネギは、急いでその場を離れようとする。

「逃げるか?……神鳴流奥義……斬岩剣!」

刹那が、居合いの構えをとり、それを横一閃に抜き放った。

そして、その一閃は、ネギ達が隠れていた岩を横に真っ二つに斬った。

(なっ、岩が真っ二つに!?!ス、スゴい……)

岩が真っ二つになったことに驚きながら、急いで詠唱を始めるネギ。

「風花・武装解除!」

ネギの杖から一陣の風が放たれ、刹那の持っていた長刀を弾き飛ばす。

だが刹那はそれを鼻で笑い、すぐさまネギに接近し、右でネギの首を、左でネギの股間を押さえた。

「何者だ。答えねばひねり潰すぞ」

「お前がな」

「っ!?!」

突然、刹那の後ろから声がかかり、驚き慌てて振り返ろうとする刹那。

「おっと、動くなよ。全身黒焦げにはなりたくないだろ?」

刹那の後ろにいた人物は、アリアで、彼の後ろには、赤く光る光球が六つほど浮いていた。火の魔法の射手を、無詠唱でためたものだ。

「……って、ア、アリア先生?それにネギ先生?」

「………は?」

刹那の言葉に、すつとんきょうな声をあげるアリア。ネギはあわあわ言って怯えて、それどころじゃなさそうだが。

「す、すみませんネギ先生!」

慌ててネギから手をどけ、後ろにさがる刹那。その際、勢いよくさがりすぎて、アリアをぶっ飛ばしたが。

「あ、す、すみませんアリア先生」

慌ててアリアに駆け寄り、手を差し出す刹那。その手を取りながら、アリアが聞く。

「やっぱり、お前は敵じゃないのか？」

「え？は、はい！当然です！それより、さっきはどうやって私の後ろに？」

刹那は達人だ。その刹那の後ろに、簡単に回り込んだアリアが、信じられないようだ。

「なあに、簡単なことだよ。ここは風呂場だぜ？湯煙に隠れて潜り、そのまま移動するのなんてわけないよ」

そう。アリアは、ネギが武装解除を刹那に放った瞬間、刹那がネギ一人のほうに向いた一瞬の間隙についてお湯の中に潜り、そのまま刹那が来るであろう場所を予想し、湯から顔をあげた場所がちょうど刹那の背後になるであろう場所に移動したのだ。

「そ、そんな方法だったとは……」

アリアの説明に、感心半分、驚き半分といった感じで納得する刹那。実際、アリアは簡単だと言ったが、そうではない。まず、隙を見た一瞬で潜る際には、音を立てないかつ素早く潜らないといけない上、湯に潜ったまま視界の悪い中ちよつと予想通りの場所に行ける方向感覚が必要で、さらには刹那ほどの達人相手の場合、完全に気配を殺さないと、背後に回ることなど不可能だ。

それをアリアは、あの状況で一瞬でそれを判断し、実行したのだ。

刹那が驚くのも無理のないことだ。

「アリア先生……あなたは一体「やいてめえ桜咲刹那！やっぱりてめえ、関西呪術協会のスパイだったんだな！？」なつ、違う！誤解だ！違うんですネギ先生！」

どうやら先程の会話はネギ達には聞こえていなかったようで、まだカモ達は刹那が敵だと勘違いしているようだ。

「何が違うもんか！ネタは上がってんだ！とつとと白状しろいっ！オコジヨだからってなめんなよ！」

「わ、私は敵じゃない！15番桜咲刹那！一応先生の味方です！」

「……へ？」

「嘘じゃないと思っぜ？さっき新幹線で式紙真っ二つにしてたし」

「なぬっ！？」

「あ、あの一体どういう……」

「私はこのかお嬢様の「ひゃあああああああああああっ！！！？」
っ！？」

刹那がネギ達に説明をしようとした途端、脱衣場のほうから、聞き覚えのある声で、悲鳴が聞こえてきた。

「い、この悲鳴は……」

「このかお嬢様!？」

(……このか“お嬢様”、ね)

このかの悲鳴があがる中、アリアは冷静に刹那の言葉を分析しようとしたが、

(やめた。今は、このか助けるのが最優先だ)

そう思った後、彼は脱衣場の方へと走って行った。

第十二話 スパイ？（後書き）

感想待ってます！

第十三話 わけあり京都娘

三人称 side

「ひゃああああああああああああつ!?!」

夜の旅館に、一つの悲鳴がこだます。

「お嬢様!」

その悲鳴のした方に、真つ先に駆ける刹那。

「え?お嬢様?ちよつ、刹那さ……」

「ネギツ!話は後だつ!今はこのかの所に行くぞつ!」

「あつ、う、うんっ!」

アリアの言葉で我に返り、アリアと共に刹那の後を追い、走りだすネギ。

「兄貴、きつとまた関西呪術協会のいやがらせだぜつ!」

「う、うん。脱衣場の方から聞こえたよ!」

「またカエルとかだったら、まだいいんだけどな……」

内心、アリアはかなり焦っていた。

（学園長の孫で実家がこつちにあつて、お嬢様と呼ぶ凄腕の剣士がいて、そのいやがらせの対象になつたつて……いくら何でも、偶然じゃないだろっ！）

自分の生徒であり、世話にもなつたこのかに、何かあつたのではないかと、刹那ほどではないにしても、結構焦つていた。

それでも思考だけは冷静に、事態の対処のことを考えていた。

（刹那が味方なのは大きなアドバンテージだ……これなら大抵の敵は簡単に退けられんだろ）

そう思い、焦りを消し、動くことに集中する。

「大丈夫ですかこのかさん!？」

脱衣場の扉を、叫びながら勢いよく開く。

するとそこでは、

「いやぁーん」

「ちよつ、ネギ!？なんかおサルが下着をーっ!？」

なにやら、式紙と思われるサル達が、アスナとこのかの下着を脱がそうとしていた。

「……………」

その光景を見た途端、何だか先程までの危惧が馬鹿らしく感じてき

たアリア。

(…………取り敢えず、この式紙消すか)

そう思い、魔法の射手を放とうとすると、サル達がこのかの下着を脱がすことに成功した。

それを見た途端、刹那の殺気が膨れ上がるのを感じ、思わず動きを止めて刹那の方を見るアリア。

「こ、この小猿ども…………このかお嬢様に何をするかあっ!!」

「ええーっ!?!」

刹那がぶちキレながら刀を抜き、構えたのを見て、驚きの余りネギが叫ぶ。

「きゃっ、桜咲さん何やってんの!?!その剣本物!?!」

「うーん、結構な業物だな」

アスナが驚いている横で、品定めするかのように刹那の刀を見て、眩くアリア。

どうやら見ただけでどれくらい優れている刀かわかるらしい。

そしてネギは、刹那が刀を振ろうとするのを、刹那の後ろから抱きつき、必死に止めていた。

「ダメですよ、おサル切っちゃかわいそうですよおーっ!!」

「あつ、何するんですか先生っ！こいつらは低級な式紙！斬っても紙に戻るだけで……」

「ウキーツ」

刹那がネギに説明していると、猿が今度は刹那のタオルを脱がし、そのまま二人は倒れた。

「何やってんだか」

そう呆れながら、魔法の射手で式紙達を紙に戻していくアリア。

すると、何匹かがこのかをさらっていった。

「あーもうめんど」「こつちもなんとかしてえーっ！」「ええー……」

アリアが、このかをさらった猿を追いかけようとしたら、アスナからヘルプの声を聞こえたので、立ち止まって不満の声をあげるアリア。

「お嬢様！！」

どっちを先に助けるか迷っていると、刹那が長刀を構えて駆け出した。

「神鳴流奥義……百烈桜華斬！！」

瞬間、サル達の胴体が次々に真っ二つになり紙に戻り、式紙達はまるで紙吹雪のように散った。

左手では、しっかりとこのかを抱き抱えている。

それを確認した後、アリアは脱衣場に残っていた残党を、魔法の射手で一瞬で灰にして、刹那達のもとに駆けた。

「このかーっ！」

「このかさん大丈夫ですかっ!？」

「っ！」

ネギ達とともに走っていたアリアが、急に立ち止まった。

「どうした旦那？」

「（逃がしたか……）いや、何でもない」

不穏な気配を感じたが、気付いたときには既に逃げられた後だった。

「せ、せっちゃん。なんかよー分からんけど助けてくれたん？あ、ありがとう」

事態をよく把握していないが、刹那が助けてくれたということを理解し、お礼を言うこのか。

すると突然、刹那はこのかを手放し、急いでどこかに走り去っていった。

「あ……」

「??.」

「ちよつ、何よー今は……」

「うーん……」

「こ、このかさんっ！あの刹那さんって人は何なんですか!?!このかさんのことお嬢様って言うてましたけど……」

「あ、それ俺も気になる」

ネギに便乗するアリア。これまでの疑問を解く鍵になるかもしれないと思つたのだ。

「このか……やっぱり……あの、桜咲さんとは何かあつたの?」

少し遠慮気味に、アスナがこのかに聞く。

「うん……アスナにもちゃんと話してへんかつたよね……」

話す前に着替えようという話になり、それぞれ服を着てから、再び合流した。

そして、このかは話し始めた。

「ウチ、引つ越してアスナと一緒に部屋に住むまでは、京都に住んでたやる?ウチは小さい頃、えらい広くて静かなお屋敷で育つたんやけど……山奥やから友達一人もいーひんかつた。そんなある日、ウチと同じくらいの女の子が、お屋敷に来たんよ。それがせつちや

んやった。せつちゃんが、ウチの初めての友達やってん。せつちゃん
は剣道やってて、恐い犬を追っ払ってくれたり、危ない時は守っ
てくれた。何やらウチが川で溺れそうになった時も、一生懸命助け
ようとしてくれて……。結局二人とも大人に助けられたんやけど……。
でもその後、せつちゃんは剣の稽古で忙しくなっであんまり会わん
ようになっってウチも麻帆良に引越して……。中1の時、せつちゃん
もこっちに来て再会できたんやけど……。でも……。何かウチ、悪いこ
としたんかなあ……。せつちゃん昔みたく話してくれへんよーになっ
てて……」

話し終え、そう呟くこのかの瞳からは、涙が滲んでいた。

「はあ……。何か大体予想出来たなあ」

このかと別れた後、ネギ達とも別れたアリアは、一人旅館の廊下を
歩きながら呟く。

(刹那ももうちょい素直に接すればいいのに……。あんなことしても、
誰も幸せになんて、ならないのになあ)

事情を大体把握したアリアは、刹那とこのかの関係に、むず痒いものを感じていた。

そんな風に考えながら歩いていると、前方から先程別れたネギ達が歩いてきた。

「はいはい皆さん。就寝時間ですよー。自分の班部屋に戻ってくださいー」

生徒にそう呼び掛けていると、ネギに近づいていく生徒がいた。

「お疲れでござる、ネギ先生」

全く忍者ということを隠していない、バカブルーこと長瀬楓だ。

「修学旅行の夜にしては静かでござるな」

「騒がせどころがみんな寝ちゃいましたからね」

「明日起きたら悔しがるわよーみんな……」

「うわぁ……明日の夜は大変そうだなぁ」

「「うわぁっ!?!?」「」

いきなり会話にまざって来たアリアに驚くアスナとネギ。

「おお、アリア先生。お疲れでござる」

対する楓は、気配でアリアが来ることがわかっていたので、驚かず

に普通に対応する。

「んー。ところで楓って忍者なの?」

「ん?何のことでござるか?」

アリアのドストレートな質問に、堂々ととぼける楓。

(……突っ込んだら負けとみたっ!)

アリアはそう判断し、この話題をスルーする事を決めた。

(ところでまた何やら大変そうでござるな先生。拙者で良ければ、いつでも呼ぶでござるよ)

楓が小声でネギにそう呟く。

「あ、はい。ありがとうございます長瀬さん」

ネギがお礼を言った後、楓はニコニコと笑いながらおやすみでござると言って、自分の部屋に戻っていった。

「前に楓に世話にでもなつたのか?」

「う、うん。エヴァンジェリンさんのことで、落ち込んでたときに……」

「ふーん」

「あ、そうだアリア。刹那さんのことなんだけど……あの人は味方

なの？」

「そーそー。私もその辺気になるんだけど」

ネギとアスナの問いかけに、アリアはさあ？と両手をあげてわからないというポーズをとる。

「ま、個人的な見解を言わせてもらうなら、多分味方なんだと思う」

「そっかあ」

「ま、本人に聞くのが一番だろうな」

「カモの言うとおりだ。まだ部屋にも戻ってないみたいだし、探せば見つかるかもな」

「よおしっ！そうと決まれば早速行くわよっ！」

「夜だから静かにね」

そんなわけで、ネギ達は刹那を探すために歩き始めた。

途中、新田先生に見つかりそうになったが、隠れることで何とか難を逃れた。

「あ」

「いたいた。桜咲さん」

一階の玄関の上のほうに、台に乗った刹那が、何やらお札のようなものを貼っているのを見つけたネギ達。

早速近づき、先程までのことを聞こうと声をかけることにする。

「な、何やってるんですか？刹那さん」

「これは式紙返しの結果です」

「へえー」

「術式が大分違うな」

「ええ。東洋と西洋は、発展が全く別ですので」

「へえ」

興味深そうに、刹那の言葉を聞いていたアリアだが、当初の目的を思い出して、いかんいかんと頭をふる。

「えと……刹那さんもその……日本の魔法を使えるんですか？」

「ええ。剣術の補助程度ですが」

「なるほど。ちょっとした魔法剣士って訳だな」

（そーか。オコジョが喋っても驚かない世界の人か……）

刹那がカモの言葉にも普通に返すのを見て、思わず苦笑いするアスナ。

「あ、神楽坂さんには話しても？」

今更のように気付いた刹那が、アスナに魔法関連の話をして大丈夫かを聞く。

「ハ、ハイ。大丈夫です」

「もう思いっきり巻き込まれてるわよ」

やれやれと言った感じで答えるアスナ。ネギはそれに申し訳なさそうな顔をするが、アリアとアスナに喝を入れられ、背筋を伸ばし、話に意識を戻す。

「敵の嫌がらせがかなりエスカレートしてきました。このままでは、このかお嬢様にも被害が及びかねません。それなりの対策を講じなくては……」

そう言いながら、結界に使う呪符をしまつ。そして、ネギをじっとした目で見て、

「ネギ先生は優秀な西洋魔術師と聞いてましたので、上手く対処し

てくれると思ったのですが……意外と対応が不甲斐なかつたので、敵も調子に乗つたようです」

「あうっ……ス、スミマセン。まだ未熟なもので」

「……それに、アリア先生」

今度は、アリアを見る刹那。

それにアリアは、少し眠そつに目を擦りながら、

「何？」

「あなたは、一体何者ですか？」

「……見習い魔法使い」

その答えが不満だったのか、少し眉を寄せて、再度問い直す。

「聞き方を変えます。あなたのその技術は、一体どこで身につけたのですか？」

その刹那の言葉に、場を静寂が訪れる。

どうやらネギ達も気になるようで、じつとアリアを見ている。事情を知らないアスナだけが、ポカンとしていた。

それから少しして、アリアが口を開いた。

「英雄のもとで、かな」

「……は？」

疑問の声をあげる刹那達を無視して、アリアは言葉を紡ぐ。

「それより、当初の目的忘れてないか？」

「あっ」

「そ、そうだったぜ。あんたは味方なのか？」

カモが、刹那に向けてそう聞く。

刹那はアリアの正体が気になったようだが、これ以上聞いても口を開かないだろうし、信用に値すると判断し、その話はおわらせることにしてカモの質問に答える。

「ええ。そう言ったでしょう」

その言葉を聞いた途端、ネギとカモの二人が刹那に謝った。

その謝罪の言葉を聞いて、少し罰の悪そうな顔をした後、敵について話し始めた。

「私達の敵はおそらく、関西呪術協会の一部勢力で、陰陽道の『呪府使い』、そしてそれが使う式紙です」

「呪府使い……特徴は？」

「呪府使いは、古くから京都に伝わる日本独自の魔法、『陰陽道』」

を基本としていますが、呪文を唱える間、無防備となる弱点は、ネギ先生達西洋魔術師達と同じ。それゆえ、西洋魔術師が従者パートナーを従えているように、上級の術者は、善鬼（前鬼）や護鬼（後鬼）という強力な式紙をガードにつけているのが普通です。それらを破らぬ限り、こちらの呪文も剣も通用しないと考えた方がいいでしょう」

「でも逆に、そのぜんきとごきつてのを破れば、後は楽勝だろ？」

「ええ。ですがそれだけではなく、関西呪術協会は、我が神鳴流と深い関係にあります。神鳴流とは元々、京を護り、魔を討つために組織された掛け値なしの力を持つ戦闘集団。呪府使いの護衛として、神鳴流剣士が付くこともあり、そうなってしまうえば非常に手強いと言わざるを得ません」

「うわわ……ちょっと何かヤバそうじゃん？」

「ヤバそうじゃなくて、ヤバいぞマジで」

「まあ今の時代、そんなことは滅多にありませんが……」

「じゃ、じゃあ神鳴流ってゆーのはやっぱり敵じゃないですかっ！」

「はい……彼らにとってみれば、西を抜け、東についた私は、いわば『裏切り者』。でも、私の望みは、このかお嬢様をお守りすることです。仕方ありません。私は……お嬢様を守れば、満足なんです」

「刹那さん……」

刹那の言葉を聞き、感心するネギ達。

ただ、アリアだけは、

「それじゃ、意味ないだろ……」

と、小さく呟いた。

「よし、わかったわよ桜咲さん！あんたがこのかのこと嫌ってなくて良かった！それがわかれば十分！友達の友達は、友達だからねっ！私も強力するわよっ！」

「か、神楽坂さん……」

「よし、じゃあ決まりですねっ！3ーA防衛隊結成ですよっ！関西呪術協会からクラスのみんなを守りましようっ！！」

「えー、何その名前……」

「ん？俺はカツコいいと思うけど……」

「えー、センス悪いわよ？」

そんな感じで、3ーA防衛隊が結成された。

「敵はまた今夜も来るかも知れませんが！早速僕、外に見回りに行つてきますっ！」

「あ、ちよつとネギ……」

「ああ、俺がついてくよ」

アスナにそう言って、外に向かって走って行ったネギを追いかけるアリア。

少しして、ネギの背中が見えると、入り口のところで、従業員の人がぶつかっていた。

「何やってんだか……」

従業員の人が運んでいたタオルを慌てて拾っているネギのところまで行き、拾うのを手伝う。

「あ、アリア……」

「俺も見回りに来たんだよ」

「あ、拾うの手伝ってくれてありがとう」

「気にすんな」

そして、全てのタオルを拾い終えて、再び見回りに向けて走りだした。

そんな二人の後ろでは、従業員である女が、二人の後ろ姿を見て、

「ふふ。かわいい魔法使いね……」

と呟いた。

「っ!?!?」

嫌な気配を感じたアリアが、慌てて後ろを振り向いた。

「?どうしたの?」

隣にいるネギが、不思議そうに聞いてくる。

「(気のせいか?)……いや、何でもない。それより、見回りさつ
さど行こうぜ」

「あ、そうだね」

そして、二人は再び走りだした。

自分達が、敵を招き入れたとも知らずに。

第十三話 わけあり京都娘（後書き）

感想待ってますっ！

第十四話 仲直り

三人称 side

「ってわけさあ」

「へー、なるほどー。このカードで、？パートナーと念話したり、
？遠くから呼び出したり、？パートナーの能力や道具の発動etc.
……が出来るんだね」

「因みに道具を出すときは、来れ（アデアット）って言うんだぜ」

「詳しいな旦那」

「まあな」

「それよりもアリア。少し聞きたいことがあるんだけど……」

ネギが、アリアに少し遠慮がちにそう言う。

アリアはそれに、何だ？と聞く。

「さっきの……『それじゃ、意味ないだろ』って、どういふこと？」

「……聞こえてたのか？」

「えっと、うん……」

ネギの肯定の言葉を聞いて、思わずため息をこぼすアリア。

「まんまの意味だよ。自分は『裏切り者』って呼ばれて、このかをただ影から守ればいいなんて考えてんだろっけど……そんなこと、このかが望むと思うか？」

「思うわけないよっ！」

「だろ？つまりはそういうことだ。刹那はもっと、このかと接するべきなんだよ。昔みたいに、な」

「……」

「とりあえず、この話は今は置いておこう。それよりもカードの機能だ」

「そうだな。兄貴、早速使ってみろよ。このカードのミラクルな便利機能をよー！」

「う、うん！じゃあアスナさんと念話してみるねー！」

そう言っつて、カードをおでこに当て、

「念話！」

（アスナさんアスナさん。聞こえますかー。テストテストー）

念じてみるが、向こうからの返事がない。

「もしもーし……アレ？アスナさんからの声は聞こえないの？」

「ま、まあな」

「それってケータイの方がよくない？」

「うっ」

痛いところをつかれ、何も言えなくなるカモ。

すると、ネギの懐からケータイの鳴る音が。

電話に出ると、慌てたようなアスナの叫びともとれる大声が、アリ
アとカモの耳にも聞こえてきた。

「ネギごめん！！このかがゆーかいされちゃった！！どうしようっ
！？」

「「ええええええっ！！」」

「魔法使いがケータイとはなあ……」（フツ）

ネギとアリアが驚いている横では、カモが一人黄昏ていた。

「ムツ……兄貴アレは！？」

「えっ！？」

カモに言われた方を見ると、猿の着ぐるみを着たものが飛んでおり、
そのままネギ達の目の前に着地した。

「おサル！？」

「でかつ」

「いや……違っっ！」

アリアが身構えたのと同時に、着ぐるみがこちらに気付き、話しかけてきた。

「あら、さっきはおーきに。かわいい魔法使いさん」

「てめえ、さっきの……」

「ふふ……」

アリアの言葉を最後まで聞かず、走りだす着ぐるみ。

「ちっ、レール……」

魔法の呪文を唱えようとしたアリアだが、いつの間にか召喚された小猿達によって、それを遮られる。

「くっ、ラス・テル……」

ネギも事態に気付き、慌てて懐から杖を取り出し、呪文を唱えようとしたが、アリアと同じように小猿達にそれを遮られる。

「ちっ、邪魔だあっ！」

アリアは、魔力による身体能力向上を使い、自分にしがみついていた小猿達を、引き剥がした。

その後、再び向かってくる小猿達を、殴り、蹴り、投げ、踏み、消していく。

そのすぐ後にアスナ達が来て、急いで逃げた着ぐるみを追い掛けた。

「ふふ……西洋魔術師ゆーても、大したことあらへん。このかお嬢様まで楽に手に入れてしもたわ」

このかを抱えた着ぐるみが、走りながらそう呟く。

「このままこのかお嬢様に戻って来てもらえたら……ウチら関西呪術協会も……「待てえーっ！」……ムッ？」

後ろから聞こえてきた声に、振り向いてみる。

すると、先程まいた少年二人と、このかと同じくらいの少女二人が追いかけてきた。

「ち……しつこい人はきらわれますえ！」

そう叫び、逃げる速度を更にあげる。

「あ、不味い！駅へ逃げ込むぞっ！」

「っていうか、何よあのでかいサルは!？」

「着ぐるみだろ!？」

「そーゆーこと言ってんじゃないわよっ！」

「おそらく、関西呪術協会の呪府使いです。あの着ぐるみも、ただの着ぐるみではなさそうです、気を付けてっ！」

駅の中に入るネギ一行。

だが、終電間際とはいえ、その駅には乗客は愚か、駅員すらいなかった。

「ちょっとおかしいわよ。終電間際にしても、乗客も駅員も一人もいないわ」

「人払いの呪府ですっ！普通の人には近付けませんっ！」

「最初から計画されてたっつてことかっ！」

着ぐるみが乗った電車に、ギリギリで乗り込むことが出来た。

「うわっつと間に合った」

「ネギ先生！前の車両に追い詰めますよっ!！」

「はいっ！」

前を走る着ぐるみを追い掛けるネギ達。

「ふふ……ほな、二枚目のお札ちゃんいきますえ」

そう言っつて、着ぐるみが札を取り出し、呪文を唱え始めた。

「お札さんお札さん。ウチを逃がしておくれやす」

そして札を投げた。

数秒後、その札から大量の水が溢れだした。

「わーっ!?!」

「な、何この水!?!」

そして、あっという間に水に吞まれるネギ達。

(くそっ、呪文が唱えられないっ!)

アリアは、水の中で、何とか呪文を唱えようとしたが、それが出来ずに舌をまく。

(……ちっ、使つか)

そう思い、懐からあるものを取り出そうとした。

瞬間、刹那が長刀を水の中で振り抜き、そのまま長刀から放たれた衝撃波が、水を押し返した。

そのまま電車が駅につき、ドアが開いて水の流れるままに流される。

「み、見たかそのデカザル女。嫌がらせはあきらめて、大人しくお嬢様を返すがいい」

「ハアハア……なかなかやりますな。しかし、このかお嬢様は返し
まへんえ」

「……………え？」

「このかお嬢様？」

ネギ達が、呆然とした瞬間に、また着ぐるみが逃げた。

「あ、待てっ！」

またそれを追いかけるネギ達。

「せ、刹那さん！一体どういうことですか！？」

「ただの嫌がらせじゃなかったの！？何であのおサル（？）の、このか一人を誘拐しようとするのよ！！」

追いかけているが、ネギとアスナが刹那に聞く。

アリアは、大体の予想がついているので、ただ黙って追いかける。

「じ、実は……以前より、関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまったことを心良く思わぬ輩がいて……おそらく、奴らはこのかお嬢様の力を利用して、関西呪術協会を牛耳ろうとしているのでは……」

「え？」

「な、何ですかそれえっ!？」

「別に不思議なことじゃないだろ。今の上の方針が気に入らないから、下の奴らが乗っとうと力を求める。組織間のいざこざじゃ、よくあることだ」

「私も学園長も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中に誘拐などという暴挙に及ぶとは……しかし元々、関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織。このような強行手段に出る者がいてもおかしくはなかったのです」

歯噛みしながら、刹那が説明する。

そして、駅の出入口のすぐ近くの壁にも人払いの呪府があった。

「む、ここにも人払いの呪府……やはり最初から計画的な犯行かっ!?!くっ、私がついていながら……」

「あっ」

「刹那さん待って……」

「まったく、張り切りすぎだぞ」

先行する刹那に、三者三様の言葉を発する。

そして、駅を出てすぐの階段の上のほうに、着ぐるみを脱いだ、先程の従業員がいた。

「あつ、さっきの……」

「やっぱりか」

「てか、新幹線の！」

「おサルが脱げた!？」

「いやだからあれは着ぐるみだつて」

着ぐるみを脱いで出てきた、メガネをかけた黒髪美人に、またそれぞれに声をだす。

そしてその女は、呪府を片手に前演説を始めた。

「ふふ……よーここまで追ってくれましたな。そやけどそれもここまで。三枚目のお札ちゃんいかせてもらいますえ」

「おのれさせるかつ！」

呪文を唱えようとする女に、刹那が唱える前に倒そうと駆け出す。

「お札さんお札さん。ウチを逃がしておくれやす」

けど、それは間に合わず、札が放たれた。

「喰らいなはれ、三枚符術京都大文字焼きっ！！」

そして、札からはとてつもない大きさと熱さの、大文字の炎が放たれた。

その炎熱は、あの刹那すら近付けないほどだった。

「ほほほ。並の術者では、その炎は越えられまへんえ。ほなさいなら」

そう言つて、立ち去ろうとする女。

その顔は、余裕に満ちていた。

「レール・ラン・マジック・スキル・マジステル、吹け、一陣の風……」

「ラス・テル・マ・スキル・マジステル、吹け、一陣の風……」

「「風花・風塵乱舞！！」」

アリアとネギによる、膨大な魔力が込められたとてつもなく大きな風が二人から放たれ、炎をかき消した。

「な、何や……「おい、サル女」っ!？」

アリアに呼ばれ、我に振り返って構える女。

「見せてやるよ。本物の炎って奴を」

そう言っつて、アリアは先程取り出そうとしたものを、懐から取り出した。

「えっ!?!」

「だ、旦那それは……」

アリアの取り出したものは……

『仮契約カード』だった。

驚くネギ達を無視して、アリアは静かに唱えた。

「来れ(アデアット)」

そして、カードが一瞬光り、その光が収まったとき、アリアのすぐそばには、奇妙なものが浮いていた。

それは、拳大くらいの大きさの、真っ黒な球体で、アリアの周りをふわふわと浮いている。

「『八つの創造具』……第一の創造、フレイムヘイズ『紅蓮の手袋』」

アリアがそう呟くと、黒い球体が一瞬光り、その光が収まると、黒い球体が消えていた。

「え？」

「一体何が……っ！」

そこまで呟いたところで気付く。

先程まで、なかったものがあることに。

「アリア……その手袋……」

アリアの手には、肘まで包まれた、波打つような赤と黒の紋様の手袋があり、その手袋の紋様はまるで暗闇の中に灯る炎のようだった。

「な、何やそれは……」

女がそう聞いてくるのを無視して、ネギ達に言う。

「お前ら、呆けてる暇あんのか？」

その言葉にネギ達も我に返り、ネギは懐からアスナの仮契約カードを取り出し、唱える。

「契約執行180秒間！！ネギの従者『神楽坂明日奈』！！」

すると、アスナの身体が、光に包まれた。

「桜咲さん行くよっ！」

「はい！」

そして、アスナ、刹那、アリアの三人が駆け出した。

「兄貴、アレだっ」

「うんっ。アスナさん！パートナーだけが使える専用アイテムを出します！！アスナさんのは『ハマノツルギ』！！武器だと思います。受け取ってください！！」

「武器！？よ、よし頂戴ネギ！！」

「能力発動、神楽坂明日奈！！」

アスナの手元に、光が集まり、そして……彼女の手にはハリセンが握られていた。

「な、何よこれー。ただのハリセンじゃないのーっ！」

「あ、あれー。おかしいなあ」

「やっぱりアスナは突っ込み役だな」

「そのネタ引つ張るなっ！」

「神楽坂さん！」

「もー、しょーがないわねっ！」

半ばやけくそ気味に、ハリセンで女を叩こうとする。刹那も一緒に、長刀を振り上げ、それを振り下ろす。

だが、それは先程のぬいぐるみと、さらに召喚された熊のぬいぐるみによって防がれた。

「何これ？動いた!？」

「さっき言った呪府使いの善鬼護鬼です！間抜けなのは見てくれだけです。気を付けて神楽坂さんっ！」

「ホホホホ。ウチの猿鬼と熊鬼はなかなか強力ですえ。一生そいつらの相手でもしていなはれ」

刹那達が従者を相手にしている間に、このかを連れて逃げようとする女。

「このかつ！このおーっ!!」

それを見たアスナが、怒りのままにハリセンを猿鬼のに叩きつけた。

瞬間、ポツという音とともに、猿鬼が消えてしまった。

「す、すごい神楽坂さん」

「ぼさつとすんなよなあ」

「え？」

後ろから聞こえた声に刹那が振り返った瞬間、彼女は信じられない

ものを見た。

熊鬼が燃えていたのだ。それも、先程の大文字の炎などとは比べものにならないほどの炎熱で。

「この程度か……刹那、さっさとこのかんとこ行くぞ」

それを行ったアリアを、しばらく呆然と見つめていた刹那は、その声で我に返り、一気に女のもとまで駆ける。

「このかお嬢様を返せえーっ！！」「えいっ！っ！？」

いきなり現れた人物が、刹那に向かって刀で斬りかかってきた。

それを刹那は何とか弾き、数歩後ろに下がった。

（しまった！この剣筋……まさか神鳴流剣士が護衛についていたのか！？マズい！）

が、そんな刹那の心配は、杞憂に終わった。

「んじゃ、返してもらっせ」

「なっ！？」

アリアが、いつの間にか現れた神鳴流剣士の後ろ、サル女の目の前にいたのだ。

アリアは、刹那が神鳴流剣士と刀を交え、一瞬出来た隙で、瞬動を使って神鳴流剣士のわきをすり抜けたのだ。

「ふっ」

サル女の腹に掌底を打ち込む。

「がっ」

肺の空気を吐き出しながら、吹っ飛ばされるサル女。

吹っ飛ばされる瞬間に、一瞬浮いたこのかを素早く抱え、一気にその場を離れようとするアリア。

「逃がしまへんえ」

だが、アリアの目の前に神鳴流剣士が立ちはだかった。

「刹那っ！」

「はいっ！」

アリアの声を合図に、刹那が後ろから神鳴流剣士に斬り掛かる。

神鳴流剣士は、それにすぐさま反応して、刹那の一閃を受けとめる。

だがそれこそがアリア達の目的だ。

その脇を通って、ネギ達のところまで行くアリア。

「アリアッ！」

「アスナはこのかを！ネギ、あの女捕まえんぞっ！」

「わかつたっ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル、風の精霊1人！縛鎖となりて敵を捕まえる！！魔法の射手、戒めの風矢！！」

ネギの詠唱が終わると同時に、11本の敵を捕える魔法の射手が放たれる。

これで終わりだ。

誰もがそう思った。

だが、

パァンッ

「っっっっ！？」

魔法の射手は、弾かれた。

サル女は何もしていない。

では誰がやったのか？

「やれやれ。悪いね。まだ捕まるわけにはいかないんだよ」

アリアの目の前にいきなり現れた少年が、子供に言い聞かせるかのようになんて言うてる。

「っ！？」

いきなり現れた少年に向けて、反射的に拳を顔面に放つ。

（捕えたっ！！）

そう確信するアリア。

しかし、

「当たらないよ」

その拳は、虚しく空をきつた。

「な……」

その少年は、一步も動かないどころか、微動だにしていなかった。

つまり、アリアが拳を外したのだ。

（バカなっ！！確実に捕えたはずなのに……）

「じゃあね」

そう言って、アリアに回し蹴りを放つ少年。

「っー」

咄嗟に腕をクロスしてガードするアリア。

が、

「っ!？」

ガードしたのにも関わらず、そのままアリアは吹っ飛ばされた。

アリアは、戦闘中は、無詠唱の『戦いの歌』を使っただけで、身体能力を最大限にあげているのだ。

その状態のアリアを吹っ飛ばすほど、少年の蹴りは重かった。

「があっ……はっ」

階段に何度か叩きつけられながら、落ちていき、最後に地面に叩きつけられて止まる。

(嘘だろっ!？ガードの上からこの威力って……)

起き上がりながら、初めてアリアが驚愕の顔を少年に向けた。

「じゃあ、これで失礼するよ」

少年がそう言って、指を鳴らすと、サル女、神鳴流剣士、少年の身体が風に包まれて消えた。

「ててて……とんでもねーな、ったく」

身体を起こしながら、痛めたところをさするアリア。

そのまま駆け足でネギ達のところに行き、このかの様子を全員でみる。

「このかお嬢様！お嬢様！しっかりしてください！！」

刹那が必死に呼び掛ける。すると、その呼び掛けが聞いたのか、このかが目を覚ました。

「ん……あれ、せつちゃん？あー、せつちゃん……ウチ、夢見たえ……変なおサルなさらわれて……でも、せつちゃんやネギ君やアリア君やアスナが、助けてくれるんや……」

このかの言葉を聞きながら、このかの無事に安堵の息を吐いた後、刹那がこのかに笑いながら、

「よかった……もう大丈夫です。このかお嬢様」

それを聞いたこのかは、一瞬目を見開いた後、満面の笑みを浮かべて、

「よかったー……せつちゃん、ウチのこと嫌ってる訳やなかったんやなー……」

「えっ、そ、そりゃ私かてこのちゃんと話し……」（ハッ）

そこまで言ったところで、このかから一歩後退り、跪く刹那。

「し、失礼しましたっ！」

「え、せつちゃん？」

「わ、私はこのちゃ……お嬢様をお守りできれば、それだけで幸せ

……いや、それもひっそりと陰からお支えできればそれで……あの
……御免!」

慌ててどこかに去っていく刹那。

「あつ、せつちやーんっ!」

その様子を見たアリアは、ため息を吐いた。

(何でもっと素直になんないかなー)

どうしたもんかと考えていると、アリアの変わりにアスナが行動を
起こした。

「桜咲さあんっ!明日の班行動、一緒に奈良回ろっねえっ!約束だ
よあーっ!」

それに刹那は一度振り向いた後、また走り去っていった。

「大丈夫だっこのか。安心しなよ」

アスナがこのかを励ましている横では、ネギとカモがアリアと話し
ていた。

「アリア、怪我は大丈夫?」

「んー、まあ何とか。防がなかったら内臓破裂してただろうけど」

「ほっ、よかった」

「怪我がなくて何よりだぜ旦那。それより、あの仮契約カードのことだが……」

「ああ。『八つの創造具』な……それについての説明は、明日にしよう。それよりカモ、このかがいるから静かにな」

（おっと。いけねえいけねえ。俺っちとしたことが）

「ネギ君ら何の話してんのー？」

「何でもないよ。それより、早く戻らないと、新田先生に旅館抜けたことばれるぞ」

「うわっ、やばっ！！」

「急いで戻りましょうっ！！」

夜の静寂の中、ドタバタと駆ける影が、四つあった。

「こんなところにいたのか、刹那」

「……アリア先生ですか」

もう既に深夜をまわる時間帯。

そんな時間にも関わらず、アリアと刹那のいる場所は旅館ではなく、旅館の敷地内の橋だった。

「こんな時分に、何か用ですか？」

「ああ。単刀直入に聞く。明日の班行動、どうするんだ？」

「……私などが「シャアーラップツ！！」っ!？」

刹那の言葉を遮って、アリアが刹那に近づき、胸ぐらを掴む。

「ア、アリア先生？」

いきなりの行動に驚く刹那だが、そんな刹那を無視して、アリアが話し始めた。

「やれ自分とは身分が違うだの、やれ自分なんか近づいちゃいけないだのうっせーんだよっ!! あいつが、このかが身分なんか気にすると思うのかっ!?! あいつが、お前には近づいて欲しくないなんて思ってると思うのかお前はっ!!」

「そんなことっ……」

「思っていないんだろ？だったら、後はわかるな？」

「し、しかし……」

アリアは、まだどこか煮え切らない態度の刹那に、痺れをきらして、最終兵器を使うことにした。

「ごごのちゃん」

「っ／／／！！！！??？」

アリアの投下した最終兵器に、顔を真っ赤にして何も言えなくなる刹那。

「ま、つまりはこれがお前の本当の気持ちだ。あんまり『友達』悲
しませんよ」

言いたいことを言い終えたのか、刹那を離して旅館の中に戻ろうとするアリア。

(……友達、か)

アリアの言葉を、頭の中で反芻した後、立ち上がる。

「アリア先生っ！ありがとうございますっ！」

それにアリアは振り返らず、手を振ったのだった。

くくおまけくく

「コリアアツ！！誰かいるのかあ！？」

「やっぱ新田先生っ！？大声出しすぎたかチキショーツ！！」

その後、新田先生に見つからないように移動して、30分後にようやく眠ることが出来たのだった。

第十四話 仲直り（後書き）

アリアの始動キー

レール・ラン・マジック・スキル・マジステル

アーティファクト

『八つの創造具』

アーティファクトの詳細については、次回にするつもりです。

感想待ってますっ！

第十五話 のどかの告白（前書き）

久しぶりの投稿です？

それでは第十五話どうぞっ！

第十五話 のどかの告白

三人称 side

「ね、眠い……」

修学旅行二日目の朝、ネギの隣の布団に寝ていたアリアが、呻くように呟く。

昨夜、このかをさらったサル女との戦いの後も、新田先生とのかくれんぼを乗り切ったのだ。

疲れ＋眠気＋低血圧のせいで、只でさえ朝の弱いアリアにとっては、地獄だった。

「ほらアリア。早く起きないと、朝ごはんの時間に遅れるよお」

「あ、あと五……」

「え？何？あと五分？」

「五日……」

「終わってるからっ！五日後には修学旅行終わってるからっ！自分のベットで寝てるだろうからっ！」

「うつせえなあ……てか、何でお前は平気なをだよお」

ぐちぐち文句を言いながら、布団から這い出るアリア。

「……………」

スーツに着替えた後、無言で空手の型を始める。

(…………ふむ。どこも痛めてないな)

昨日、突然現れた少年による蹴りによってどこか痛めたか確認したが、特に問題がなかったようだ。

「んじゃ、行くか」

「うん」

「ーそれでは麻帆良中の皆さん、いただきます」

『いただきまーすっ!』

ネギの朝食開始の挨拶に、ノリよく大声で返す3ーAー同。

挨拶の後、ネギはアリアの座っている隣まで行く。

そしてアリアは、お茶碗と箸を両手に持ち、正座で姿勢よく、

「くー」

寝ていた。

それを見たネギは、

「わーっ！？起きてよアリアーッ！！」

「あー？何だよネギ。今日は日曜だぜ？」

「平日だからあーっ！！」

そんな微笑ましいやりとりをした後、何とかアリアを起こすことに成功した。

「はあ。しっかりしてよアリア」

「しゃーないだろ。眠いんだから」

「僕だつて眠いよお」

「なら寝ようぜっ！」

「駄目だからっ！」

教職についてる自覚があるのかどうかわからない会話を繰り返して来ると、このかが自分の分の朝食をお盆に載せてやって来た。

「ネギくんちよつと眠そやなー アリア君は……寝てるなあ」

「あ、このかさのおはようございますって、え？」

このかの言葉を聞いて慌てて隣を見ると、見事に爆睡しているアリアがいた。

「アリアーッ！」

「んー、寝てません寝てませんくー」

「言ってるそばからっ!？」

必死にアリアの体を揺らして起こそうとするネギ。

そんなネギにアリアは寝てません寝てませんと言いながら、目を閉じたまま朝食を食べ続けるという器用というか荒技というか、そんな超人的な行動をとっていた。

このかは、そんなネギ達を見て微笑んだ後、ウィンクしながら、

「夕べはありがとな 何やよーわからんけど、せつちゃんやアスナと一緒にウチを助けてくれて」

「い、いえ……僕はほとんど刹那さんやアリアについていっただけで……」

「くうーくうー」

「あはは。アリアくんはホンマに疲れてるんやなー」

そう言いながら、アリアの頭を撫でる。

すると、このかは視界に刹那を映した。

「あ、せつちゃん」

それに気付いた刹那は、さりげなく、ではなくあからさまにそそくさと席を移動する。

「あんつ、何で！？恥ずかしがらんと一緒に食べよー」

それにネギとこのかは声をかけながら追いかけて、更に刹那はそれから逃げるという奇妙な光景が繰り広げられた。

「あー、まあいきなりは無理か」

そんな刹那を見て、アリアはぼそりと呟いた。

起きてたのかよっ！という突っ込みはさておき、そんななごやかな雰囲気のまま、朝食の時間は過ぎていった。

「さて、今日はどうするかな……」

朝食を食べ終えて、今日の班別行動をどうしようかと考えるアリア。

隣ではネギが同じようにどうしようか考えている。

そんな彼に、近づくと影が一つ。

このクラスでは珍しく大人しい、宮崎のどかだ。

のどかがネギを班別行動に誘おうと、勇気を振り絞って声をかけようとした瞬間、

「あの「ネギくん今日ウチの班と見学しよーっ！」」

クラスを代表するバカレンジャーが一人、佐々木まき絵がネギに抱きつきながら班別行動に誘う。

因みに、アリアはすでに安全地帯（アスナの後ろ）に避難していた。

「ふう。危ない危ない」

生徒達にもみくちゃにされているネギを見て、そう呟くアリア。

「あんたって案外薄情？」

そんなアリアに、半分呆れたように言うアスナ。

「いやだって……あれはさあ」

そう言つて、ネギ達を指差す。

そこでは、

「ちよつ、まき絵さんっ！ネギ先生はウチの3班と見学をっ！」

「あ、何よーっ！私が先に誘つたのにーっ！」

「ずるーい！だったら僕の班もーっ！」

「ネギ先生。ぜひ3班にっ！」

「ネギ君4班4班ー」

……凄まじいとしか言い様のないネギ争奪戦が行われていた。

「……確かにあれじゃ仕方ないわね」

納得したように呟くアスナだった。

「あれ？アリア君は？」

ネギ争奪戦の中、誰かがそう呟いた。

「やばっ」

慌ててアスナの背中に隠れるアリア。

「あれ？いないねー。アスナ知らない？」

「えっ？えっとお……」

アスナの背中を必死にぼかぼか叩いて黙っていることを訴えるアリア。

「し、知らない、かなあ？」

「そっかー。アリア君も誘いたいのになー」

（あ、危ねえ危ねえ……）

アスナの後ろで、そっと胸を撫で下ろす。

その間にも、ネギ争奪戦は繰り広げられている。

だがそれは、次の瞬間あっけなく終了した。

「あ、あのネギ先生っ！よ、よろしければ今日の自由行動……私達と一緒に回りませんか!？」

のどかが、騒いでいた生徒達をしのぐくらい大きな声で、ネギを班別行動に誘ったのだ。

それを聞いたネギは、このかの護衛の為にも、一緒に行動したほうがいいと判断し、

「わかりました宮崎さん！今日はぼく、宮崎さんの5班と回ることにします！」

と、のどかに了承の意を伝える。

それを聞いた途端、生徒達が本屋が勝つたと騒ぎだした。

「で、あなたはどうすんの？」

騒いでいる生徒を見ながら、後ろにいるアリアに聞くアスナ。

「うーん……俺もお前らと行動するかな」

「大丈夫なの？担任と副担が同じ班なんて……」

「幼なじみと同じ行動をしたいと、新田先生に泣き落としをかけてみる」

「……あんたって顔は綺麗だけど心は汚いわね」

「……ちよっと自重します」

その後、少し落ち込んだようなアリアが、見事新田先生泣き落とし作戦を成功したのだった。

〜奈良公園〜

「わーっ。ホントに鹿が道にいるーっ」

「生で初めて見た……」

目を輝かせながら、アリアが感動したように呟く。

「角はないのか!？」

「あつたら危ないでしょうがっ!」

「くっ、一番楽しみにしてたのに……」

物凄くがっかりしたようにうつむくアリア。

「すごいすごい。見てくださいアスナさん。わあっ!」

対するネギは、はしゃぎながら鹿のそばまで走り、アスナに手を振ると、鹿に手をあまがみされた。

「何やってんだか……っっておわあっ!？」

呆れたようにアリアが近づいた途端、鹿がアリアにたかって来たのだ。

「凄い懐いてるなー」

「アリアって昔からよく動物に懐かれるんですよーっ」

「って、お前ら見てないで助けるーっ！！」

鹿にもみくちやにされてるアリアが、必死に叫ぶが、一同はそんなアリアを見て和むのだった。

「和むなあああああああっ！！」

「ぜえ……ぜえ……酷い目にあつた」

「大丈夫ですか？アリア先生」

昨日の疲れ（というよりただの寝不足）+鹿との格闘を終え、辟易していたアリアに、口元に笑みを浮かべながら刹那が聞く。

「笑いながらそれを聞くか……」

「す、すみません……つい」

謝りながらも、刹那の雰囲気はどこか昨日と比べてやわらかかった。

(これで後は素直になれば完璧なんだけど……ま、時間の問題かな)

アリアはそんな刹那を見て、このままならきつとこのかともうまくいくと確信し、残りの問題について考えることにした。

(後はこのかを守りきって、親書を届ければ完璧……なんだけど)

アリアは、昨日最後に現れた少年を思い出す。

(守りきれぬのか?……いや、守りきる。絶対に……)

そこまで考えたところで、顔をあげると、ネギとアスナがこっちに歩いてきた。

「行きましようか、アリア先生」

「りょーかい」

「今のところ、おサルさんのお姉さんは来ませんねー」

「うーん……」

「おそらく今日は大丈夫だと思いますが……念のため各班に式紙を放っておきました。何かあればわかります。このかお嬢様のことも私が影からしっかりお守りしますので……お三方は修学旅行を楽しんでください」

「じゃあこのか呼んでくるか」

「ちよつとーっ!?!?」

このかを呼びに行こうとすると、刹那に全力で肩を掴まれてしまったアリア。

「何で止めんだよー」

「だ、だだだだっ……」

「そうよー刹那さん。隣でおしゃべりしながらでも守ればいーのに」

「いつ、いえ私などが気やすくおしゃべりなどする訳には……」

（まだ言うかっ!?!?）

アリアは、思わずため息をつく。

「またもー、何照れてんのかな桜咲さん」

「なっ、別に私は照れてなど……」

刹那が、反論しようとするが、それはいきなりやってきた他の班のメンバーによってさえぎられた。

「アスナアスナー。一緒に大仏見よーよ！」

「へぶうっ!?!」

夕映とハルナがアスナを蹴りつきとばし、

「せっちゃんお団子買ってきたえ。一緒に食べへんー?」

このかが団子片手に刹那を連れていく。

「ほらアリア君もっ!」

「へ?ってうおっ……」

ハルナがアリアの襟首を掴んで走り去り、場にはのどかとネギだけが残る形となった。

そして、襟首を掴まれ、引っ張られながらアリアは、

(……………何がどうなっただ?)

と、あまりにもあからさまな行動をとる彼女達に、疑問符を抱かずにはいられなかった。

彼はまだまだ鈍感な十歳のお子様だった。

アリアはただ今、よく分からないという顔をしていた。

自分の横にいるのは、教え子であるハルナと夕映。

そして彼女らの視線の先には、楽しそうに会話をしているネギとのか。
どか。

「で、何でこんなことしてんの？」

「しっ、静かにっ」

疑問を投げ掛けてもろくに答えてくれず、アリアは結局訳も分からないので、

「俺向こう行って来るから」

と一応ハルナ達に言って、ネギ達のいる方向とは逆の方に歩きだした。

(せっかく京都に来たんだから、楽しまないかね)

だが、何をすればいいのかもまいちアリアにはわからなかったの
で、誰かを探すことにした。

因みに、アリアの中では、鹿と遊ぶという選択肢は、毛ほどもな
った。

「もー、何でこのかから逃げるのよ」

場所は変わって奈良公園のとある道で、アスナは刹那を早足で追
かけながら、そう聞いた。

対する刹那は、目をそらしながら、

「し、式神に任せてあるので、お嬢様の安全は大丈夫です」

「そーじゃなくて、何でしゃべってあげないの？」

「それは……」

「身分の違いを気にしてるから？」

「はいその通りで……つてわひゃあつ!？」

いきなり現れた声に一瞬遅れて素っ頓狂な声をあげる刹那。

「何変な悲鳴あげてんだ？」

そんな刹那を見て、声の主であるアリアが、首を傾げながら聞く。

「……い、いいいたんなら声をかけてくださいよっ」

「いや今来たところなんだけど……」

「気配を消して近づかないで下さいっ」

(別に消してないんだけどな……)

アリアは普通に歩いて刹那達に近づいたただけなのだが、刹那達のほうが話に集中していて気が付かなかったようだ。

そのことを指摘すると、また何か顔を真っ赤にして言ってきそうなので、大人しく黙っていることにした。

「にしても……凄いわね、それ」

アスナは、アリアの格好、いや性格にはアリアの持っているものを見てそう呟いた。

アリアの手には、ありとあらゆる奈良のグッズというグッズが入ったビニール袋がぶらさがっていた。

それにアリアは満足気な顔で、

「満喫したぜ……奈良」

と答えた。

どうやら本当に満喫してきたようだ。

それにアスナはさいですかと言い、刹那はそのアリアの子供らしさを少し珍しそうに見ていた。

がさっ

「ん？」

物音のしたほうに目を向けた。

すると、そこにはアスナ達のクラスメイトである宮崎のどかがいた。

あの後、何かガキにはまだ早い話とかアスナに言われて追い払われ、アリアは公園で鹿と戯れていた。

もちろん周りには鹿の数が少ない場所を選んで。

「んー、何の話してるんだろうなあ？」

そうアリアが呟くと、目の前にいた鹿が首を傾げた。

「って、お前に聞いてわかるわけないよなあ」

先程まで持っていた荷物は既にバスの中に置いてきてあり、あまりにも手持ちぶさただ。

「んー、これからどうしよ」「宮崎さーん」「ん？」

すると、アリアのよく知った声が聞こえてきた。

(のどか探してんのか？さっき会ったけど一体……とりあえず声かけるか)

「おーいネぐえっ」

ネギに声をかけようとした途端、いきなり誰かに襟首を掴まれて引っ張られた。

そしてそのまま草むらの中に引きずりこまれる。

「げほっげほっ。だ、誰だよ」「しっ、静かに」「むぐうっ!?!?」「

誰かを確認しようとしたら、いきなり口を抑えられてしまう。

それに対してアリアは、反射的に相手を投げ飛ばそうと相手の手を掴んだが、相手の顔を見た途端にその手を止める。

(刹那っ！？一体どういうことだよっ！？)

そう叫ぼうとするが、口を抑えられているのでむごむごと言うだけで留まることに。

そして、刹那の隣にはアスナもいることがわかり、さらには彼女らがかたに視線が釘付けになっていることに気が付いた。

(何だ？)

そう思ってそっちを見ると、ネギとのどかが向かいあっていた。

すると、のどかが顔を真っ赤にして、口を開いた。

「ネギ先生、あのっ……実は私……大……」

アスナと刹那が、ごくりと喉を鳴らすのが聞こえてくる。

それにつられてアリアもよくわからないが、視線をネギに釘付けする。

そしてのどかが大きく息を吸い込み、

「大…根おろしも好きで……」

ドドッ

刹那とアスナがずっとこけた。

その拍子にアリアの拘束も解ける。

「げほっげほっ。ったく、どういっつ見で教師を拉致しやがったんだよこら」

半眼で刹那達を睨むアリア。

先程から、アリアには訳のわからないことばかりで、面白くなさそうな顔をしていた。

だが、そんなアリアに構わず、刹那達は何やら小声で議論をしていた。

(ったく、本当になんなんだ?)

そう思って、再び視線をネギ達に向ける。

すると、またのどかが大きく息をすっているところだった。

そして、のどかは顔を真っ赤にしながら、大きな声で、たどたどしくもはつきりと言った。

「私、ネギ先生のこと、出会った日からずっと好きでした。私……私、ネギ先生のこと大好きですっ!!」

「……え?」

アリアとネギがそろってそんな声をあげる。

ただ、ネギの顔は少し赤くなっていた。

そしてアリアは、事態を必死に頭を回して把握しようとしていた。

（ええっと……つまり、今までの不可解な行動の連続はこれのためであって……なわけだよな？）

大体の事情を何となく、漠然と理解したところには、のどかはいなくなっており、ネギは抱えている問題に頭の許容量を越えて、知恵熱を出して倒れてしまった。

「って、ネギっ!？」

慌ててアリア達がネギのもとへと駆け付ける。

その後、ネギが倒れたのを新田先生達を誤魔化しながら、バスへと運んで、今日の自由行動を終えるのだった。

第十五話 のどかの告白（後書き）

感想待ってますっ！

第十六話 パパラッチは見たっ！（前書き）

久しぶりの投稿ですっ！

それではござっ！

第十六話 パパラッチは見たっ！

三人称Side

「……」

アリアは、今どうすればいいのかわからなかった。

別に彼自身がどうこうという話ではない。

むしろ今日一日奈良を満喫して絶好調と言っていていいくらいで、朝の寝不足などどこかに吹き飛んでいた。

手持ちぶさたなわけでもない。ちゃんと教師としての仕事だって、子供と新米という理由であまり渡されていないがちゃんとする。

なら、なぜそんなことになっているのか……

それは、彼の目の前にいる人物が原因だった。

「ううーっ、ああー、どうすればーっ」

今、彼の目の前では、放心状態でロビーの椅子に座っていたかと思えばいきなり頭をふり、そしてロビーの床を転がり回るといふ訳のわからないことこの上ない行動を取っている幼なじみの、ネギがいた。

彼は先程から、そんな幼なじみを見ていて、どう対処すればいいか非常に困っていた。

それに、そんなネギを隠れながら見ている生徒達にも気付いていたのだが、その生徒達にも注意すべきか、もういつそのこと全部丸投げしようかとすら考えていた。

(いやあ、そうしたらネギがあいつらにもみくちやにされんのは明らかだしなあ……かといって、この状態のネギを一体どうしろと？……はあ。眠い)

そこまで考えたところで眠気がぶり返ってきて、ロビーの椅子へとふらふらと足を運び、その青眼を静かに閉じた。

「……あ、やべ。一瞬寝てたか」

そう呟いてアリアが起きると、何故かネギがいなくなっており、彼の目の前には顔を輝かせてこちらの顔を覗き込んでいる生徒達がいる。

「ええつと……何？」

そう聞いた途端、

『カ……カワイイ』

「へ？」

何か呟いたと思ったら、いきなり一人がアリアを抱きしめてきた。

「むむうっ」

（な、何なんだ！？）

アリアは抱き締められて、かなり焦りながら思考を働かせていると、

「あっ、ずるーいつ！私も私もーっ！」

とか、

「だったら私もーっ！」

などと言いながら、どんどん群がってきた。

（く、苦しい……い、息が……）

たまらなくなったアリアは、ほんの少し体を動かす。

すると、彼の体は面白いようにスルリと抜け落ち、そのまま一気に強引に生徒の群れの中から抜け出した。

そして、彼は全力疾走でその場から離れた。

後ろから聞こえる声は気のせいだと必死に頭のなかで叫びながら……

因みに、彼女らがアリアに抱きついたのは、彼の寝顔があまりにも綺麗で見とれていて、起きた後の子供らしい行動とのギャップがあまりにも可愛くつい抱きついた、ということだ。

本人はまるで気付いていなかったが。

「さっきのは何だったんだ？」

そう呟きながら、頭を掻くアリア。

頭には、先ほどあった光景を思い浮かべては？マークを浮かべていた。

「……ま、いつか」

あっさりどうでもよくなり、そのことを考えるのをやめた。

すると、目の前にフラフラ歩きながらこちらに来るネギの姿が見えた。

その姿はあまりに弱々しく、何だか哀れみすら感じられる絵図だった。

(どう声をかければいいんだ、あれ……)

アリアがそう考えていると、ネギがこちらに近づき、か細い声で、

「 ああ、アリア…… 」

と声をかけてきた。

「 お、おおネギ…… 」

そう返すのが精一杯なほど、今のネギは痛々しかった。

そして、少し考えるような仕草をした後、ネギにこう話し掛けた。

「 ネギ、外行かねえか？ 」

「 外？ 」

「 うじうじ悩むより、外の空気吸って、すっきりしたほうがいいだ

る？」

「……うん、そうだね。ありがとうアリア」

アリアの心遣いが嬉しく、ネギは先ほどと比べればかなり明るい顔で、アリアにお礼を言った。

それにアリアは照れくさそうに頬をかいた後、「さっさと行くぞ」と言って歩きだした。

それにネギは微笑みながら、「うん」と言っ、アリアの後についていった。

二人はロビーを横切り、そのまま入り口から外に出た。

すると、アリアとネギの足元を、一匹の猫が通りすぎた。

そして、タイミングが悪く、猫が道路に飛び出した瞬間、一台のワゴン車がちょうど走っていた。

「げっ」

いち早くそれに気付いたアリアが、道路に駆け出そうとした瞬間、アリアよりも一瞬早くネギが言ってしまった。

（アホッ！俺が瞬動で助ければすんだのにつ！）

そんなことを思いながら、この後の事態に備え、呪文を唱える。

アリアの目の前で、ネギが猫を抱えた後、杖を振るい呪文を唱えた。

バンッ

そんな音と共に、ワゴン車が空を舞っていた。

アリアは、ワゴン車の軌道を予測し、ワゴン車が着地する瞬間に風の魔法を唱え、落下の衝撃を緩和させた。

「つぶねえ……」

冷や汗を流しながら、そう呟く。

一歩間違えれば、運転手が大怪我を負っていた。

「ア、アリア！大丈夫！？」

心配そうな声を出しながらこちらに走ってくる今回の原因の大元に
向かってアリアは、

「こんのボケがああああああああああああああああ
……」

と叫びながら、思いっきりネギの頭に拳骨をくらわしたのだった。

あの後、早急に現場から離れるためにネギの杖で空を飛んで逃げた
アリア達は、修学旅行で溜りに溜まった心身の疲れを癒すために、
風呂に入っていた。

「はあ~~~~あ」

風呂に入った途端に、ネギが情けない声をあげた。

「オラオラ兄貴。情けねえ声出してんじゃねーよ」

「そーだそーだ。ため息はこっちがつかたいくらいだぜ……」

昨日戦った、明らかに自分より格上の相手をどうするか考えるので
手一杯だというのに、その上教師としての仕事にネギのお守りにフ
オロー、生徒に弄ばれる……俺、何でこんな疲れてんだらとついつ
い思ってしまう。

「旦那もそんな辛気臭い顔すんなって！」

「オコジヨは気楽そうでいいなー。いつそのことオコジヨになつて
やるうか？」

ニヤリと笑って言うアリアに、ネギが慌てたように立ち上がった。

「だっ、駄目だよアリアーっ!!」

「いや、冗談だ。冗談」……え？」

しばらくポカーンという顔をした後、ようやくからかわれた事に気付いたネギは、可愛く頬を膨らまして、ポカポカアリアを叩いた。

そんな風にいつものやり取りをしながら和んでいると、誰かがドアを開ける音がした。

アリア達が振り返ると、そこには、しずながいた。

「し、しずな先生ーっ!？」

しずなのバスタオルをまいただけの姿に、ネギは顔を真っ赤にしながらかんだ。

対してアリアは、ジーツとしずなを見た後、ああ成る程とばかりに顔を頷かせていた。

(面白そうだから、しばらく傍観してよ)

アリアは、さりげなく自分としずなの方にネギがくるように移動して、状況を楽しむことにした。

「今日もお疲れさま お背中流しましょうか？」

「い、いえその、結構ですので……」

「アリア先生は？」

「もう洗っちゃいました」

さりとて嘘を言う。

ネギはえっ？って顔をしているが、そんなネギを完璧スルー。

アリアは本当に十歳なんだろうか？

「あら、そんなんですか？残念ですねえ」

さして残念でもなさそうにそう言うと、今度は湯船に足をいれ、ネギの真後ろに行くと、囁くようにアリアにも聞こえるように言った。

「うふふふ。実はねネギ先生。私……あなたの秘密を知ってしまったの……」

「えっ!?!」

しずなの言葉に驚いたように振り向くネギ。

アリアはその言葉を聞いて更に楽しそうに口の端を吊り上げる。

「あなた……魔法使いでしょう」

「正解!」

「えっ！?!あれ……が、学園長から聞いたんですか……でも、って、アリアはなんでっ……」

混乱の極地に立たされおろおろしているネギを見て、「こらえきれなくなったアリアが大笑いする。

そんなアリアに、しずなさえが怪訝な顔をする。

もしかしたら、自分の正体に気付いているんじゃないかと疑ったが、標的をネギに絞れば問題ないと判断し、続行する事にする。

「ま、何だかわかんないけど……お願いがあるのよ」

しずなは人差し指を顎にあと、可愛く小首を傾げながら言った。

「私……ネギ君の魔法見たいなあ」

「えーっ!?!」

流石に今の発言にはアリアも一瞬面食らったが、すぐにまたニヤニヤしながら成り行きを見守る。

すると、しずなは胸にネギをつめてお色気で頼みこもつという作戦にでた。

すると、ネギが疑問の声をあげた。

「ん？あれ？」

「どうしたの？ネギ君。その気になった？」

「え？マジで？」

流石にそれは予想外のようだ。

と思ったら、ネギがいきなり爆弾発言をした。

「なんかしずな先生、胸すごく小さくありませんか？」

「なっ……何いつ！？失礼ね、それでもクラスN.O.4よっ！！」

「あ、自爆した」

「クラスN.O.4！？だ、誰ですかあなたは！？」

しずなの発言に、アリアは呆れ、ネギは驚きの声をあげた。

「くっ……しまった。バレたんなら仕方ないっ！」

「いやバラしたんだろ」

的確な鋭いツツコミをスルーし、続けるしずな。

「ある時は巨乳教師、またある時は突撃リポーター！」

そこまで言ったところで、自分の髪と顔を掴み、それをとった。

そこにいたのは……

「その正体は、3-A組三番、朝倉和美よっ！」

「ああーっ！朝倉さんっ！？」

「マズい、バレてるぜ！記憶を消しちまえーっ！」

「朝倉だったのかー。魔法なしの変装なのにうまいなー」

慌てるネギ達をよそに、呑気な声をあげるアリア。

慌てて魔法詠唱を始めるネギ。

しかし朝倉はどこからかケータイを取り出し、叫んだ。

「おおつと待ったーっ!!このケータイが見えないの!?!下手な動きはしないで!」

「っ!?!」

その言葉に動きを止めるネギ。

アリアは風呂を満喫しながら傍観していた。

「この送信ボタンをポチッと押せばその瞬間ネギ先生の全ての秘密が、私のホームページから全世界に流れることになるよ。気をつけてね」

「ええーっ!?!」

「兄貴、できるぜこの姉さん!!言うことかかないと全世界にバラされてオコジヨにされちまう!!」

「ああ、いい湯だ」

『うおいつ!?!』

アリアの呑気な声に、流石に耐え切れなくなった一同が突っこんだ。

対するアリアは、

「あ、邪魔した？続けて続けて」

なんてケロリとした顔で言ってくる。

（な、何でこんなに落ち着いてるの！？）

朝倉は焦る気持ちを必死に抑えて、アリアのことは無視することにして、ネギに詰め寄った。

そもそもアリアがこんなに落ち着いてるのには、ちゃんと理由があった。

一つは、もしインターネットにその情報を流したとしても、信じる者などいるはずがないということだ。

実際に見た人以外は、信じないだろう。

二つ目は、朝倉のケータイを、その気になれば一瞬で奪うことができるからだ。

だからアリアは、くつろぎながらも常に朝倉の親指に視線を集中させ、彼女が指に力をいれた瞬間、ケータイを奪ってデータを消すつもりでいた。

そんなアリアの思惑など知る由もなく、朝倉はネギに詰め寄る。

「ど、どうしてこんなことを……」

か細い声で、ネギが朝倉に聞く。

その様はまるで小動物だ。

「フフ。スクープよ。全てはスクープのため。悪いけどネギ先生…
…私の世界的な野望のために協力してもらおうよ」

「え？や、野望？」

「そのとおり！魔法使いが実在すると知ったら世間は大注目！！私の独占インタビュー記事が新聞、雑誌で引つ張りダコに！！」

「んなアホな……」

またもやアリアのツッコミはスルー。

「人気が出たネギ先生は私のプロデュースでTVドラマ化&ノベライズ化！！さらにハリウッドで映画化して世界に進出よーっ！！」

「始めのスクープの話どこいった」

「そ、そんなの嫌ですっ！！世界とかキョーミないですっ！！」

朝倉の話にアリアはもう呆れるしかなく、ネギは逆にうるたえまくっていた。

そのうるたえを何を勘違いしたのか、朝倉はサムズアップしながら、

「大丈夫！ギャランティはネギ君と私で山分けにするから！！」

と言いながら、ネギに迫った。

「どう！？ズバーンと魔法使う気になった！？」

「あうえっ……へうっ」

涙目でそんな声しか出せなくなるネギ。

「だいたいこんなところで先生やってんのも大変でしょ？バーンと使
つて楽になりなよ！」

「へぐっ……僕……先生……それにバレ……て……」

「ん？」

そこで異変を感じたアリアは、目を細めてネギを見た後、顔を青く
して、急いで風呂場から脱出する。

その直後。

ヴアアアアアッ！！

という轟音と、ネギの泣き声と共に、湯船の湯が、一気に逆流した。

そしてそのまま朝倉は吹っ飛ばされてしまった。

それに気付いたネギは、慌てて杖で飛んで朝倉の手を掴んだが、そ
の際朝倉に魔法で飛んでいるのを写メにとられてしまった。

けど、地上に降りてケータイを確認すると、無惨にもその画面は割れていて、使い物にならなくなっていた。

更にそこで運悪くユー・A一同が風呂場に現れ、大惨事になってしまった。

「うわーん！アリアー！どこーっ!？」

ネギがそんな悲痛な声をあげている頃、アリアはというと、

「ういいい〜」。気持ちいいいい〜」

マッサージ椅子で、くつろいでいた。

本日の教訓。

馬鹿な事には最後まで付き合っではいけない。

第十六話 パパラッチは見たっ！（後書き）

感想待ってますっ！

第十七話 真夜中のばか騒ぎ

修学旅行二日目の夜。

朝倉はカモに、3-Aの自分の持っている情報を教えていた。

そして、それを見ている影が一つ。

「……何やってんだ？あいつら」

アリアだった。

彼は、不気味に笑うカモ達を見て、絶対にろくでもないことをしようとしていると感じとった。

「……ま、いつか。面白そうだし」

しかし、対して気にも止めず、その場を後にしたのだった。

その選択を、後で後悔するとも知らずに……

あの後、アスナや刹那に説教されているネギを見たアリアは、アスナ達に便乗して説教しようとしたが、現場にアリアがいたことがバレてしまい、逆に説教されていた。

(くそ、何でこうなった?)

それはお前がネギが困っているのを楽しんでいたからだ、とはもちろん誰も突っ込まず、説教は続いた。

そのまま説教すること数分、元凶のパパラッチがやってきた。

「おまえのせいだっ！」

開口一番、そう叫ぶアリア。

どうやら説教をされた腹いせらしい。

「えっ、何が!?!」

それを知らない朝倉は、訳が分からないとばかりに叫ぶ。

それを見たアリアは満足そうに頷いた後、

「いや何でも」

と言って、目をそらした。

その後、朝倉が味方になることを説明され、そこにたまたま通りかかった委員長達に何をしているか聞かれ、ネギが朝倉と仲良くなっ

たなどという爆弾発言投下。

そのことを聞いたたそうと委員長が身を乗り出したところで、運良く新田先生が通りかかり、ことなきを得たのだった。

あの後、3ーA一同は新田先生の注意を無視し、枕投げ、怪談、恋ばななどで密かに盛り上が……らず、堂々と盛り上がっていた。

結果。

「コラアツ！いい加減にしなさい！」

当然の如く教師一同にバレて説教。

そして、もし朝までに自分の班部屋から退出した場合、ロビーで正座というありがた〜い死刑宣告を受けてしまった。

その事を愚痴っていた一同のところに、パパラッチがやってきた。

「くっくくく……怒られてやんの」

開口一番、皆に向かってそう言う朝倉。

その挑発に怒る一同を無視し、朝倉は先程力モと計画した作戦のために、口を開いた。

「まあまあ、私から皆に提案があるのよ。このまま夜が終わるのはもったいないじゃない？一丁三ーAで派手にゲームをして遊ばない？」

その言葉を聞いた面々は、

「何を言ってるんですか。委員長として許しませんよ、そんなことー」

「賛成ー！」

「反対ー！」

「ゲームってどんなゲームなの？」

賛成多数、反対一部。

どうやらゲーム決行は確定なようだ。

朝倉の口から、今回のゲームのルールの説明が話された。

ゲーム名は朝倉命名、『くちびる争奪！修学旅行でネギ&アリア先生とラブラブキッズ大作戦』という、これ死語じゃね？って疑問を抱きそうな名前だが、そこはノリの良い三ーA一同。ゲーム名を聞いた途端さらに盛り上がりを見せた。

ルールは簡単。

各班から二人ずつを選手に選び、新田先生方の監視をくぐり、旅館内のどこかにいるネギ&アリア先生の唇をGET！妨害可能！ただし、武器は両手の枕投げのみ！上位入賞者には豪華商品プレゼント！？なお、新田先生に見つかった者は他言無用、朝まで正座！死して屍を拾う者無し！！

朝倉の説明をそのまま言つと、こつなつた。

何はともあれ、修学旅行二日目の夜の悪夢は、始まったのだった。

「はー、もう11時か。大変だったなあ……………」

「可哀想に」

「半分くらいアリアのせいなんだけど……………」

「あ、アスナ達が戻って来たぞ」

自分の部屋でくつろいでいたアリアとネギのところに、アスナと刹那がやってきた。

見回りに行っていた二人の話だと、周囲に特に異常はないようだ。

「じゃあ、次は僕達が行ってきますよ。今晚は何だか変な殺気みたいなものを感じるんです」

「言われてみれば確かに異様な気のような感じですが……」

「……」

ネギと刹那の言葉を聞いた途端、先程のことが頭をよぎった。

カモと朝倉が、明らかにろくでもないことを企んでいたことを。

(……気のせいだろ)

アリアは特に気にせず、布団にもぐりこもった。

「……何してるのアリア」

「眠いから寝る」

「ちよつとオ！？今がどういう状況かわかって……」

「お前こそわかってんのかよ？昨日何で敵が旅館の中に入ってきたのか」

「……あ」

そう。

昨日、ネギとアリアが見回りに行くために外に出る瞬間に、敵に入られたのだ。

同じ手を敵が使うとは考えにくいが、警戒するのは当然だろう。

アスナがアリアの言葉に何か言い返そうとしていると、部屋のふすまを開けてしずな先生が入って来た。

慌てて隠れるアスナと刹那。

ネギとアリアは、しずなが部屋に入らないようなるべく前に出て対応する。

しずなからは、見張りは自分に任せて、早く寝るように言われた。

そして最後に、『部屋を出ないように』という台詞を残してどこかへと去っていった。

アリアは、しずなを見送った後、ネギ達に向かって、

「やっぱ見回り行く」

「へ？」

「いやーやっぱ警戒するに越したことはないからなうん」

矢継ぎ早にそう言うアリア。

いきなり意見を変えたアリアに、ネギ達は訝しげな顔をしていたが、

行ってくれるのに越したことはないので、特に追及はしなかった。

アリアが意見を変えた理由は簡単で、『疑念』が『確信』に変わったからだ。

さっき、しずなに変装した朝倉が、『部屋を出るな』と言ってきたのだ。

つまり、部屋にいればろくなことにならないと判断したのだ。

(まあ、出るとき警戒してれば問題ないよな)

物凄く嫌な予感がしたアリアだったが、旅館から出れば問題ないと判断したのだった。

全ての班のゲームの出場者が決まり、モニターによってゲームの進行状況を説明でき、出場者がスタート位置に配置された頃、ネギとアリアは全く身に覚えのない寒気に襲われていた。

「な、何だろうねこの寒気」

「さあな。ただ……絶対にろくでもない事って断言する」

「あはは……確かにね」

そう言った後、ネギは先程刹那からもらった式紙の束を出した。

ネギから式紙を幾つかもらい、自分の名前を書く。

「……何やってんだ？お前」

呆れたように呟くアリアの目線の先には、式紙をくしゃくしゃに丸めてはゴミ箱へと放るネギの姿が。

「ふ、筆だと緊張しちゃって……」

「……もうそれ五枚目だぞ」

「わ、わかってるって……」

アリアの言葉がプレッシャーになったのか、先程までと違い慎重に筆を走らせる。

そして、ようやく式紙に自分の名前である、『ネギ・スプリングフィールド』を書く事ができた。

すると、アリアとネギの名を書いた式紙が急に光だし、アリアとネギの姿になった。

「おー！」

「わぁー、凄いや!」

いきなりの出来事に、感動したように声をあげるアリア達。

それほど、その式紙は『外身』はよく出来ていた。

「んじゃ、ここで俺達の変わりに寝といてくれよ」

そう言って、アリアはベランダから外に降りた。

「あ、待ってよアリア」

それにネギも慌ててついていく。

彼らは気付いていなかった。

自分たちの部屋に、見た目がネギの式紙が四体、新たにゴミ箱から這い出て来ていることに。

「なあ。余りの式紙くれよ」

見回りの為に走っていたアリアが、いきなりネギにそんなことを言った。

「へ？何で？」

「いたずらの為」

「駄目っ！！」

「冗談だよ。刹那に返すだけだった」

「…………絶対だよ？」

「ラジャッ」

敬礼をしながら、ネギから式紙を受け取るアリア。

その時、密かにニヤリとアリアがほくそ笑んだのに、ネギは気付いていない。

「ん？そういえば、カモはどこだ？」

「あれ？そういえばそうだね」

「……………」

（朝倉と一緒に。本当に見回りに出てよかった！）

心の中でガッツポーズしながら、アリアはネギと他愛ない雑談を交わしながら、見回りを続けた。

一方その頃カモは、朝倉と同じ部屋で、ゲームの進行状況を見るためのモニターを見ていた。

そのモニターの中で、始めに接触したのは、4班の赤石裕奈&佐々木まき絵ペアと、3班の委員長&長谷川千雨ペアだった。

ちょうど廊下の角で鉢合わせた二組は、即座に行動を開始した。

まず、委員長とまき絵が互いに枕で相手の顔面を殴った。

その隙をついて裕奈が攻撃をしかけるが、アホらしいと顔で語る千雨が足で転ばした。

更にそこに2班が来て、三つ巴戦に突入。

そこへ、逃げようとしていた千雨が、鬼の新田先生に見つかってしまい、それに気付いた皆の者が、まずは古菲が裕奈を踏み台にして逃げ、その後に皆続く。

千雨と裕奈の二人は、仲良く犠牲になったのだった。

朝倉の仕掛けた監視カメラも万全ではなく、そこには5班の宮崎のどかと、綾瀬夕映の姿がなかった。

彼女達は、壁のでこぼこ部分を利用して、外からネギ達の部屋へと向かっていた。

そのまま彼女達は、裏手の非常階段まで行き、こっそり扉を開ける。そして、そろりそろりと廊下を歩いていると、いきなり目の前に口ープ状の梯子が落ちてきた。

驚いた二人が上を見上げると、そこには1班の鳴海風香と鳴海史伽がいた。

すぐさま二組のバトルは始まった。

……と思ったら、夕映がのどかに狙いを定めていた鳴海姉妹に不意打ちよろしくいきなり枕を投げつけ、のどかを先に行くように促す。

その両手には、分厚い辞書が握られていた。

そこに更に先程新田から逃げてきた2班の古菲と楓が現れた。

夕映は、隙をついてのどかをネギ達の部屋に押し入れた。

夕映の事が心配だが、ここで退いては夕映が犠牲なつた意味もないし、自分の想い人であるネギとのキスという誘惑もあり、のどかは前に進むことにする。

「ネ、ネギ先生……すみません……こんな形で……でも、でも、私嬉しいです……先生……キス……させてください」

か細くそう断りを入れて、顔を真っ赤にし、目を閉じて、顔を近付ける。

すると、何故か『周りから』ネギの声が聞こえて来た。

それに気付いたのどかは、始め小さな悲鳴をあげた後、大声で悲鳴をあげた。

それを聞き、部屋の前で戦っていた夕映達が慌てて入ると、そこには気絶しているのどかと、小さな紙切れが一つ落ちていた。

「……危なかった」

見回りに外に出ていたアリアが、ぼそりと呟く。

アリアには、旅館内の自分の部屋で起きた事が、全てわかっていたのだ。

予め、カモと朝倉が何かを企んでいる事を知っていたアリアは、刹那に式紙の分身術式の組み込み方を、事前に教えてもらっていて、もし自分の分身に何かされそうな状況になったら、即座に解除しようと考えていたのだ。

そして、先程のどかがしようとしていた行為によって、何となく目的がわかったアリアは、のどか以外の生徒が傾れ込んで来るのを察知したのと同時に、術を解いて自分の分身を、ただの紙切れに戻したのだった。

「え？何が？」

そんな事情など知らないネギは、可愛く首を傾げながらアリアに聞く。

一瞬その無知っぷりに殺意がわきかけたが、慌ててその感情を払いのけたアリアは、「何でもないよ」と適当に返した後、旅館に帰った後自分がとばっちりくいませんように、と静かに願った。

カモと朝倉の目に映るモニターには今、二人（？）が想像すらしていなかった事態が映っていた。

カメラ1、ネギと委員長。

カメラ2、ネギと古菲と楓。

カメラ3、ネギと鳴海姉妹。

カメラ4、ネギとまき絵。

カメラ5、ネギと夕映。

……ネギだらけだった。

傍観者の生徒達は凄いななどと言ってキャツキャワイワイと素直に感心したり驚いたりしているが、当の本人達は大変だどうしようとおたふたしていた。

そして、それぞれのネギがそれぞれの生徒にキスしようとしたところで、夕映のところにはいたネギの腕が、某妻わらの船長の如く、ビヨンと伸びていた。

そこでようやく偽物と気付いた夕映は、己の辞書で式紙を撃退。

すると、式紙はポウンツという音とともに、ただの紙切れへと戻った。

それを合図に、他のネギ達は、いきなりどこかへ向けて走りだした。

そこで四人のネギが、鉢合わせてしまった。

訳も分からず混乱していた出場者達だが、どれでもいいから取り敢えずキスをすればいいと古菲が勢いよくジャンプし、一人のネギの頬にキスした。

しかし、偽物だったので煙を出して紙切れに戻った。

そこで騒ぎを聞き付けた新田先生が来たが、目の前にいきなり三人のネギが現れた事により、脱落。

そして、自棄になった出場者達が、全員のネギにキスしたが、結局全員偽物という結果に終わる。

「あれ？何か騒がしいような……」

ロビーに戻って来たネギが、旅館が何やらおかしい事に気付いた。

その瞬間嫌な予感がしたアリアは、

「俺、眠いから先に戻るぞ」

「え？アリア？」

ネギが止める間もなく、アリアはすたすたと歩いていった。

そして、そこでのどかと夕映に鉢合わせてしまった。

そして、ネギはのどかに告白の返事をした。

「ー友達から始めませんか、と。」

それにのどかは快く返事をした。

そして、夕映はのどかの足をつまづかせ、ネギとのどかにキスさせた。

「よおっしゃーっ!! 宮崎のどかの仮契約カードゲットだぜーっ!
」!

カモが、のどかの仮契約カードを高々と掲げて、そう叫ぶ。

和美もトトカルチヨの総取りで儲けて満足していたので、笑顔でカモにずらかるように言って、部屋を飛びだ……

「……なるほど朝倉。お前が主犯か」

した所で、新田先生とぶつかった。

「全員朝まで正座ーッ!」

という新田先生の叫びが、真夜中の旅館に響き渡った。

「全員朝まで正座ーッ!!」

自分の部屋に戻り、即行で布団の中に潜り込んでいたアリアの耳に、新田先生の怒号が聞こえてきた。

「……逃げといてよかった」

そう呟いた後、アリアは静かに眠りについた。

第十七話 真夜中のばか騒ぎ（後書き）

感想待ってます！

第十八話 石段での戦い（前書き）

展開大分早いです。

それではどうぞっ！

第十八話 石段での戦い

修学旅行三日目。

「…………誰もいないな？」

「うんっ、行こうっ！」

アリアとネギの二人は、ロビーに誰もいないことを確認した後、素早くそこを通り抜けた。

そしてそのまま、裏口から脱出に成功した。

彼らは今日、自由行動の時間を使って、新書を渡すために旅館を抜け出したのだ。

本山の場所を、地図などで確認しながらアスナと約束した待ち合わせ場所に向かう。

だが何故かそこには、5班のメンバーが勢揃いしていた。

「…………アスナさん？」

じと目でアスナを見るアリア。

「ごめんごめん。パルに見つかったって」

「いやいや見つかったって……………」

アリアなどはまだましな方で、ネギは驚きのあまり口をパクパクさせることしか出来なかった。

「……まあ、途中で抜け出せば問題ないか」

そんなわけで、アリア達と5班の楽しい楽しい自由行動が始まった。

「おりやあたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたつほわ
たあああああああああああつ！！」

ゲーセンに、とある金髪先生の叫び声が響く。

「ア、アリア……」

「ん？何だよネギ。今いいところなんだよ」

アリアが今やっているゲームは、格ゲー。

只今十五連勝中。

初めてゲームをやったにも関わらず、未だ負けていない。

そして、

「これで十六勝おおおおおおおおおおお
！！」

アリアの目の前の画面に、Winの文字が現れた。

「ふっ、ちよろいぜ。で、何だネギ？」

「……………」

呆れて一瞬物も言えなくなったネギだが、慌てて我に返り、今から
本山に向かう旨を伝える。

「あー…………俺、ここ残るわ」

「ええっ!?!」

「しいーっ」

大きな声をあげたネギの口を、慌てて塞ぐ。

(こっそり抜け出すんだろ? あんま大声だすな)

(あっ、ご、ごめん……………で、でも何で? まっ、まさかゲームするた
めに……………)

(違えよっ! このかの護衛のためだよっ!)

(え?でもそれなら刹那さんが……)

(一昨日、最後に出てきた奴がちょっと気になってな。念のため、俺はここに残る)

(そ、そっか。うん、わかった。気を付けてね)

(そっちな)

小声でそうやり取りした後、ネギはアスナとともにゲーセンを後にした。

(新書を渡す今日、奴らは必ず動くはず……気を付けるよ、ネギ)

ネギの去っていった方を見て、アリア静かにそう思った。

だからアリアは気付けなかった。

ゲーセンの中からのどかの姿が消えていることに。

「……………」

壁に背を預け、刹那は静かにこのかを見守っていた。

(いい笑顔だ……麻帆良学園に行つてからというもの、友人も多く得て明るくなられた)

このかが夕映達と一緒に笑っているのを見て、微笑む。

刹那にとって、このかとは他の誰よりも大切な存在なのだ。

このかが幸せなら、自分はどうでもいいと、本気で考えるような少女なのだ。

……一昨日までは、それが本当に正しいと思つてきた。

一昨日の夜、アリアに言われた事を思い出す刹那。

(……本当に、よいのだろうか？)

『友達』。

その言葉は、今までの刹那の決意を鈍らせるのに、十分な効果があった。

(……アリア先生、か。不思議な人だな)

「刹那」

「ひゃあっ!?!」

「うおっ!?!」

いきなり声をかけられて、小さな悲鳴をあげて飛び上がる刹那。

対して、普通に声をかけただけのアリアは、いきなり飛び上がった刹那に目を丸くしていた。

「ど、どうした?」

「いつ、いいいい何もっ!!そ、それよりアリア先生何か!?!」

顔を真っ赤にして、必死に誤魔化すように言う刹那。

「あ、ああ……ネギ達なんだけど、やっぱりちょっと不安だろ?」

「……そうですね」

「ほら、お前分身の式紙あったろ?あれでさ」

「成る程。わかりました」

刹那は自分の懐から式紙を出し、呪文を唱えた。

伏見神社によく似た、大きな鳥居の前にネギとアスナはいた。

「ここが関西呪術協会の本山？」

「うわー。何か出そうねー……ん？」

アスナの目の前に、淡い光を放つ光の球が現れ、そちらに目を向けると、その光の球がいきなり小さな人の形になった。

それが刹那の連絡用の分身だと聞かされた後、ネギ達にワナがあるかもしれない事や、一昨日襲ってきた奴らが来る可能性など、注意すべき事を聞かされる。

それを聞かされ、アスナは自分のアーティファクトであるハリセンを出し、ネギも杖を構えた。

そして、アスナの掛け声とともに、境内に向けて一直線に石段を走りだした。

――30分後

「うっ……なんて長い石段なの……」

「ハアハア……もう30分は走ってますよ……」

ネギ達は、未だに石段を走っていた。

それに、刹那の分身のちびせつなが、ある事に気づき、ネギとともにアスナとカモを残して先に行くと、何故かアスナの後ろからネギが来た。

今度は横の竹林から脱出を試みたが、結果は反対側から戻ってくるに終わる。

最終手段に杖で上からの脱出を試みたが、一定の高さまで飛ぶと、地面に戻ってしまった。

ちびせつなの話によると、これは無間方処の呪法というらしく、半径500メートル程の半球状の堂々巡り（ループ）型結界らしい。

つまり、ネギ達は、敵の結界の中に閉じ込められてしまったのだ。

すると、アスナがお手洗いにいきたくなり、叫びながら走りだした。

慌ててネギ達もそれを追う。

彼らは錯乱状態にあった。

「ふうー、一息ついた……」

ネギ達は、あの後なんとか休憩所のようなところを見つけ、そこで休んでいた。

そこでカモから、契約執行した際の効果などを教えてもらっていた。

それを見ていた敵の一人である少年が、ネギ達が思ったよりもやれることを知り、戦闘意欲がわいてきてしまい、ついには先程言われた『見張り』という命令を無視し、巨大な蜘蛛の式紙とともに、ネギ達のもとに降り立った。

「ハアハア……」

のどかは今、ネギ達の登って行った石段を、必死に登っていた。

その両手には、先日ネギとのキスによって生まれたアーティファク

トである一冊の本が握られていた。

そして、その本を開けると、そこには今のネギ達の状況の絵が、簡単に描かれていた。

「……なあ、刹那」

「はい？何でしょっ？」

「……のどかはどこだ？」

「……え？」

「ほなやるか、西洋魔術師。いや……ネギ・スプリングフィールド」
蜘蛛の上に乗った少年が、拳を握りながらそう宣言する。

その少年が、先程ゲーセンにいた子供であることに気付いたアスナが、指を指しながらその事を叫ぶ。

（この罫を作ったのはこの子？ゲームセンターでは僕のことを下見してたのか？）

杖を構えながら、相手のことを考える。

（一昨日のおサルのお姉さんと同じく護鬼を連れてる。ということはやっぱり、護鬼VS従者、陰陽師VS魔法使いの戦いになるってことだ！）

「ネギ！」

アスナの叫び声とともに、契約執行の呪文を唱えるネギ。

それと同時に駆け出したアスナの、強化された右ストレートが蜘蛛に直撃し、そのまま蜘蛛はひっくり返った。

そして自分のアーティファクトを出し、ハリセンで蜘蛛を叩いて消滅させた。

わずか数秒で、素人のアスナが、護鬼を倒してしまった。

それを少年が、感心したように声をあげた。

だが、その後目を鋭くして、ネギを睨んだ。

「でも、お前の方は大した事ないな、チビ助。凄いのはお姉ちゃんの方や。女に守ってもらって恥ずかしいと思わへんか。だから西洋魔術師は嫌いなんや」

「む……」

言いたい放題言われ、流石のネギも少しカチンときたらしい。

「あ、そついや格闘強い西洋魔術師がおるって、千雨さんゆうてたな」

「！」

アリアの事だと分かり、ネギの顔が強ばる。

「暇やしさつさと片付けて、そつちに行くかな」

瞬間、ネギが無詠唱の魔法の射手を一矢放った。

少年はそれに驚き、少し慌ててそれをしゃがんで避けた。

「不意討ちとはやってくれるやんけ」

少年が、先程よりも目を鋭くさせて、ネギをにらみつける。

対してアスナやカモ、ちびせつなはいきなりのネギの行動に驚いていた。

「ネ、ネギ？」

アスナが、恐る恐るネギの名前を呼ぶ。

だが、ネギはそれには答えず、少年の方を睨み付けて、

「アリアの所には、絶対に行かせない」

と、静かに告げた。

「……………」

刹那は、ちびせつなを通して見ていた光景に驚き、目を見開いていた。

（あのネギ先生が、あんな行動をとるなんて……………）

刹那は、その行動の原因である、アリアの方に目を向けた。

彼は今、このか達と楽しそうに話をしていた。

「……本当に不思議な人」

その眩きが聞こえたのか、アリアが刹那の方を振り向いて、手を振りながら、

「おい！刹那もこっち来いよっ！」

笑顔で刹那を呼んだ。

その笑顔は、見ているだけでこちらまで笑みがこぼれるくらい、輝いて見えた。

「行くでっ！」

叫びとともに、少年が一直線に突っ込んでくる。

少年はアスナの目の前で着地し、アスナが振るうハリセンを軽く避け、後ろにいる呪文を唱えているネギに向かう。

「風花……」

ネギが呟いたのと同時に、少年は懐から数枚の札をだした。

「武装解除！！」

ネギの手から膨大な風が、目の前の少年に放たれた。

だが、その風は全て少年の取り出した札によって、防がれてしまった。

そして、無防備になったネギを、思いっきり少年がぶん殴った。

ゴツという音とともに吹っ飛ばされるネギ。

それからは防戦一方だった。

少年は、アスナの攻撃を避けながら、一方的にネギを攻撃し、ネギはそれを必死に防ぐことしかできない。

「ちょこまか逃げんな、このチビ助！！」

そしてついに、ネギの魔法障壁を貫いた少年の掌底が決まった。

「ハハハ、やっぱ西洋魔術師はあかんな。弱々や。このぶんやお前の親父のサウザンなんかとかももう一人の西洋魔術師も、大したことないんやろ、チビ助」

「……………」

その言葉に、ネギは口から流れる血を拭うことしか出来なかった。

「駄目だ兄貴！」

「ここは一旦退きます！」

カモが、先程自販機で購入したペットボトルを投げ、ちびせつながら呪文を唱えた。

瞬間、ペットボトルからいきなり霧が発生した。

「くっ、霧！？目眩ましかいな」

少年が霧の中で戸惑っている間に、アスナがネギを抱え、駆け出した。

後ろから少年が何かを叫んでいたが、今はそんなことを気にとめる余裕などあるはずもなく、アスナ達は更に速度をあげるだけだった。

第十八話 石段での戦い（後書き）

感想待っています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125o/>

魔法先生ネギま！～麻帆良に来た魔法使い～

2011年2月12日00時49分発行